

2008年9月第23号

人環フォーラム NO.23

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

対談：湖の文化と砂漠の文化

嘉田由紀子／勝又直也 司会 高橋義人

特集：日本語－その過去と現在と未来と－

内田賢徳／李 長波／甲田直美／チャワーリン・サウェッタナン／阿辻哲次



京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究所（略称「人環」）は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



●目次——人環フォーラム23——

巻頭言	1
すべての芸術は音楽をめざす	鳴原眞一
対談	2
湖の文化と砂漠の文化	嘉田由紀子／勝又直也
	司会 高橋義人
特集：日本語—その過去と現在と未来と	
ことたまの系譜／内田賢徳	14
近代日本語における和漢欧文脈の混淆／李 長波	20
日本語のレトリックとテキスト／甲田直美	24
オーストラリアとタイにおける日本語の高等教育事情	
／チャワリー・サウェッタナン	28
これからの日本語における漢字のあり方／阿辻哲次	32
リレー連載：環境を考える	
環境税の二重の配当について／浅野耕太	36
サイエンティストの眼	
筋肉同士の助け合い／神崎素樹	42
知の息吹	
総人・人環での私の哲学研究／戸田剛文	44
社会を斬る	
文明化のペシミズム／道籙泰三	46
フロンティア	
リチウム二次電池と地球温暖化問題／福塚友和	50
マンガというビジュアル・コンテンツの越境と受容／孫 郁雯	51
奈文研の散歩道	
画像工学技術が拓く年輪年代学の新たな世界／大河内隆之	52
文学の周辺	
未完のミステリー—ディケンズの遺作／廣野由美子	54
世界の街角	
パリの街角の表と裏／多賀 茂	56
フィールド便り	
阪神大震災の集団力学／八ッ塚一郎	58
共生を育む亜熱帯の森／川北 篤	60
「軍艦アパート」の記憶／中嶋節子	62
書評	
篠原雅武『公共空間の政治理論』／岡部明子	64
稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考』／柏木隆雄	65
人環図書	66
阿辻哲次著「近くて遠い中国語」	
金坂清則他編「アジアの歴史地理」	
東郷雄二著「打たれ強くなるための読書術」	
伊從勉他編「みやこの近代」	
森谷敏夫著「メタボにならない脳のつくり方」	
佐藤義之他編「知を愛する者と疑う心」	
李仁子他編「はじまりとしてのフィールドワーク」	
瓦版	68
コラム	
「お国の食べ物」ブルガリア／ティナ・ベネヴァ	41

「すべての芸術は音楽をめざす」

鳴原眞一 — SHINICHI SHIGIHARA

【京都大学名誉教授】

英語の文学を教材にして「読んで訳す」という逐語訳の授業で感じるのは「翻訳は反逆」という宿命である。英語を日本語に読み換える、英語の音調は消える。これは英語に限らず、外国語の学習に付きまとう難題である。

しからば「直読直解」は可能か。もちろん学習期には無理な話で、バイリンガルな能力を必要とする。言葉の障壁を乗り越える方法はあるのか。「読み書き」から「聞き話す」への転換はひとつの突破口だが、それも中級レベルまでで、その先は音調など無視しても複雑な意味内容を捉えることが先決だ。そもそも言葉の意味と音調はどう関係するのか。吉川幸次郎は論語の難解な語彙の解釈の決め手に音韻の整合性を挙げた。聖典なので内容が先行するが、意味を確定するのは発音だ。

中西信太郎の「シェイクスピアのソング」に触発されてルネッサンス音楽に興味を持ち、流れにまかせてシェーンベルクの現代音楽まで辿りつき、五十歳近くでコンサート評を書きだした身には、文学と音楽の関係は重要な問題だった。京阪神を中心に音楽会に足繁く通い、コンサート評やプログラム・ノーツを三十年近く書いてみると、限られた視座からでも世界の音楽の動きが感じられて面白い。「音楽には国境がない」というスローガンは言葉の壁のある文学を超える芸術の可能性を示唆している。しかし音楽の根幹にあるリズムとメロディーは歌と踊りに由来する。歌は言葉に密着し、踊りには民族性がある。声楽やオペラがその国の言葉と切り離せないのはもちろんだが、器楽やオーケストラ音楽も当該言語の構造や性格と無関係ではない。

クラシック音楽の源泉は音楽用語が示すようにイタリアだが、ハイドンやモーツァルトからベートーヴェンへの道程はドイツ語独立への歩みでもある。イギリスのような辺境の島国にマドリガルやリユート

ソングなど、大陸の音楽文化が伝播して独自のスタイルができるまでには一世紀単位の時間が必要だった。ロンドンにはハイドンを招き、ヘンデルを帰化させ、ベートーヴェンに「第九」を依頼した。ドヴォルザークに「新世界より」を書かせたのはニューヨークだった。先のが後になり、後のものが先になるのか。

京都では自治体主催する京都市交響楽団が昨年五十周年を迎え、大阪では京大オケの大先輩、朝比奈隆が創立した大阪フィルが六十周年を祝った。京阪神には定期演奏会を開くオーケストラが今や六つもあって互いに覇を競い、充実した演奏力と柔軟な表現力を誇っている。第二次大戦後の関西はオーケストラ音楽の成長期だったともいえるが、最近ではヴェルディ日本初演もので話題を呼んだ滋賀県立の「びわ湖ホール」や、山崎正和のリーダーシップで三年前に完成した兵庫県立文化芸術センターのブッチーニ「蝶々夫人」連続八公演の驚異的な成功が象徴するように、興味の焦点がオーケストラからオペラに移りはじめた。それでもレパートリーを見ると、團伊玖磨の「夕鶴」以来、繰返し上演に耐える日本人の作品は少ない。日本のクラシック音楽は今も実質的に外来文化のままだが、演奏家の質は世界的な水準に向上した。チャイコフスキー国際コンクールのピアノ部門で日本人として初めて第一位を獲得した上原彩子のような優れた才能が、奥田光郎・元教養部長の姪御さんだというような身近な話題にも事欠かない。音楽の力は目に見えなくても計り知れないが「すべての芸術は音楽をめざす」というのはマシュー・アーノルドからT・S・エリオットに至るイギリスの批評家に共通の認識だった。二十一世紀、ベルリン・フィルを指揮するのはイギリスのサイモン・ラトルであり、ウィーン・フィルは日本の小澤征爾である。日本語のオペラもこれからが正念場だろう。



対談

嘉田由紀子

Yukiko KADA

湖の文化と
砂漠の文化

勝又直也

Naoya KATSUMATA

●司会
高橋義人

Yoshio TAKAHASHI



日本は四囲を海に囲まれた山国であり、豊富な水と緑に恵まれている。日本の環境問題を考えるに際して、このような地理的条件を抜きにして考えることはできない。なかでも滋賀県は、琵琶湖とそれを包む山々からなり、しかも琵琶湖は海と違い、環境汚染を明瞭に映し出すので、日本の環境問題を考える上で最適の地である。他方、水と緑の乏しい地方がある。砂漠の多い中近東である。そこで今日は、琵琶湖を中心とした環境問題に長年取り組んでこられた嘉田滋賀県知事と、イスラエルを中心とした中近東の事情に詳しく、つい先ごろ、湯川・朝永賞の文系部門の第一回受賞者に選ばれた勝又先生のお二人に、「湖の文化と砂漠の文化」を対比させながら、人間と環境との関わりについて話していただくことにした。

●嘉田由紀子（かだ ゆきこ）

一九五〇年埼玉県本庄市出身。京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了、米國ウイスコンシン大学修士課程修了。農学博士（京都大学）。滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員、京都精華大学人文学部教授を経て、現在滋賀県知事。国際的視野も含め琵琶湖における地域住民と環境のかかわりを中心とした研究を行う。著書に『生活世界の環境学』、『水辺ぐらしの環境学——琵琶湖と世界の湖から』、『琵琶湖・水物語』（共著）、『環境社会学』、『水辺遊びの生態学』など多数。

●勝又直也（かつまた なおや）

京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。一九七〇年東京都生まれ。東京大学文学部卒業、エルサレム・ヘブライ大学大学院博士後期課程修了。哲学博士（ヘブライ大学）。日本学術振興会特別研究員を経て、現職。主著に『ネヘミア・ベン・シユロモの典礼詩』（ブリル学術出版、二〇〇二年）、『シユムエル・ハシユリシのヘブライ語文体』（ブリル学術出版、二〇〇三年）などがある。

●高橋義人（たかはし よしと）

京都大学大学院人間・環境学研究科教授。一九四五年、栃木県生まれ。慶應義塾大学助手、京都大学教養部助教授を経て、現職。文学博士。専門はドイツ文学・思想。主著に『形態と象徴』（岩波書店、一九八八年）、『ドイツ人のこころ』（岩波新書、一九九三年）、『魔女とヨーロッパ』（岩波書店、一九九五年）、『グリム童話の世界』（岩波新書、二〇〇六年）などがある。



命の原点は水にあり

高橋 私どもの人間・環境学研究科は、京都大学では最初から環境問題を旗印にして作られた研究科です。本広報誌『人環フォーラム』が刊行され始めたときには、創刊号の特集「自然との共生」で嘉田知事に「現代日本人にとっての水環境観」という小論文を書いていただきました。本研究科の環境研究を実地に即して進めてゆくために、最近では京都市・長浜市と連携交流協定を締結し、環境問題を



琵琶湖（滋賀県庁ホームページ「滋賀の風景」写真データより）



水を汲むマラウイの少女（撮影 嘉田知事）

念頭に置いた町づくりを進めようしているところです。長浜市を含む滋賀県の町々では、琵琶湖という水とそれを囲む緑との共生という大きなテーマになるのではないかと思います。

先日、長浜市の「町づくり役場」というNGO法人を訪ねましたとき、嘉田知事が昔から長浜市でしばしばフィールドワークをされていたと聞きましたので、まず嘉田知事が環境社会学に進まれた経緯について、お話をうかがいたいと思います。

嘉田 最近『生活環境主義でいこう！』⁽¹⁾という本を私の語りでまとめてもらった時に気がついたのですが、人と環境の関わりはずいぶ

(1) 嘉田由紀子語り、古谷桂信構成『生活環境主義で行こう！―琵琶湖に恋した知事』岩波書店、二〇〇八年。

ん茫洋としたものなんです。環境社会学がその像を結び始めたのは、アメリカでは八〇年代後半からです。特に農村社会学系の人たちが、公害問題や資源循環の問題といった社会運動論をひとつの柱としながら、八〇年代に動き始めたものなんです。

日本では一九九〇年に環境社会学会が作られました⁽²⁾。そこで初めて環境社会学が日本で社会化されました。今では私の専門は環境社会学と言っていますが、以前は、人と環境の関わり、特に人と水の関わりについて研究しています、と言っていました。

私の原点のひとつはアフリカにあります。一九七一年、学部三回生のときに単身アフリカに行き、半年暮らしました。今西錦司さんの『人類の誕生』や梅棹忠夫さんの『サバンナの記録』などの本を読み、電気もガスも水道もないアフリカのようなところで一度暮らししてみたいという思いがつのつたからです。住んでいたのはタンザニアでしたが、そこでは川一本に人、家畜、農業のすべてが相互に依存して存在しています。農業をする人たちは川の近くに住んでいます、牧畜に携わる人たちは片道四キロ、五キロという距離をひょうたんに入れた飲み水を背負って移動するんです（三頁下図参照）。私はそこをえつちらおつちら歩きながら、水が命だ、水に命の原点があると知りました。

次に結婚をして、七三年にアメリカに行きました。ここでは水がもう使いたい放題なんです。一番驚いたのはガーベッジ・デイスボーザー⁽³⁾でした。ご存知ですか。流しのシンクにミックスがついていて、お茄子のヘタだろうが、ジャガイモの皮だろうが、生ごみを全部ガチャガチャガチャとミキシングして、大量の水道水と一緒に下水道に流してしまうシステムです。

勝又 知りません。

高橋 日本にもあるじゃないですか。

嘉田 滋賀県では禁止していますよ。

高橋 でも、アメリカはごく普通に常備されていますね。

嘉田 そうです。ごく普通にあるんです。でも、そんなものを作った意味が分からないんです。アメリカではそうやって一人一日千リットルの水を使う市もあります。他方、アフリカでは片道一時間の距離を一人二リットルの水で必死に生きているんです。アメリカの水の使い方を見て、「もったいない！」と感じましたね。

アメリカではエネルギーもすごい無駄使いしているんです。私が留学したのはウイスコンシン州のマディソンで、ここは札幌くらいの緯度にあります。真冬はマイナス二〇〜三〇度になります。ところが学内は半袖なんです。私は新婚早々に行ったので、夫の長袖のシャツをいっぱい準備して行っただけですが、全然いらぬ。半袖シャツで過ごせるんですよ。ものすごいエネルギーの無駄使いだとは思いませんか。こんな社会はいずれもたなくなる、と感じました。

私は京都大学では農業経済学を専攻していたので、土地利用や森の利用を学びたいと思っていましたら、アメリカの指導教授から、わざわざカリの資源ながら確実な生産力を持った高密度の社会は日本だ、フィールドワークは日本でしなさいと言われ、それで七四年から滋賀県でフィールドワークを始めました。

滋賀県は豊かな水に恵まれているために、人々は水をあまりありがたいとは思っていません。しかも一九七〇年代には、伝統的な川の水や地下水に代わって上水道への転換が起きました。そのため地下水が涸渇しても住民は文句を言わない。水道の水の方が地下から出る井戸水よりも上等だって教えられてきたからです。

社会的公共財としての水

勝又 豆腐屋の豆腐は地下水で作らなければ美味しくありませんが、行政の指導では水道水で作らなければいけないことになっています。ところがそうすると味が落ちるんですね。

嘉田 行政としては由来の分らない水を飲んでほしくない。確実に塩素処理されている水道水で国民の健康を平均的に守るのが、行政としての責任なんです。

勝又 役所は、自分たちの責任になつては困るから、まずは安全な豆腐にしろ、と言うんです。同じように川が氾濫しては困るから、巨大な堤防を作り、町から川を見えなくしてしまう。ヨーロッパの行政とはまるで考え方が違うんですね。

嘉田 行政は管理・制御するという思想のなかで安全性を確保します。ですから水も水道管のなかできちんと管理しなければなりません。だから水のなかに塩素を入れる。面白いのは、水質が安全だったら塩素を入れなくてもいいと思うでしょう。ところが日本ではそ

(2) 嘉田知事は日本環境社会学会の元会長。

(3) 今西錦司『世界の歴史 1 人類の誕生』河出書房、一九六八年。「人類とはなにから」人類とは、直立二足歩行するようになったサルである（二六頁）という前提に立つて、化石人骨、現生霊長類、サル社会、ゴリラ社会、狩猟採集民などについて論じたものである。

(4) 梅棹忠夫『サバンナの記録』朝日新聞社、一九六五年。梅棹は一九六三〜一九六四年に東アフリカのタンガニイカで過ごした。本書のあとがきで梅棹はこう記している。「わたしは、これらのアフリカ人との交際をなつかしく思い出す。しかし、未開の現住民は、かならずしも純真・素朴ではない。かれらとの交際も、なかなか心あたらないのである。かれらもまた、われわれとおなじように、高い英知も、悪がしきさもある。いやらしさも、あわせもっている。だからこそ、わたしは、人間の記録としてこういう本を書く気になった。これは、愛すべき動物たちの記録ではない（二四八頁）。

(5) 台所の生ごみを破砕して配水管に流す装置。一九三五年にアメリカで商品化される。日本では一九五五年ごろから輸入品が使われ始め、一九五九年に国産品が発売される。一九八八年に生産中止になったが、一九九四年ごろから認定されるようになり、デイスボーザー対応の排水処理施設を備えた集合住宅が販売されている。

ういわけにはいけません。地下水に大腸菌が入っていないくても塩素を入れるのが、水道水としての必要条項なんです。

勝又 不合理な話ですね。

嘉田 塩素処理という仕組みは、アメリカ軍の影響もあり、昭和三年に入れたものです。塩素処理をして末端まで塩素 0.2ppm が入っていないといけないという水道法の安全性基準を作ったんです。あの頃、アメリカ軍は日本の大地を信用していませんでした。伝統的な日本の農法では糞尿が農作物の肥料でした。アメリカ軍は、そんな糞尿にまみれた水は信用できないと考え、滋賀県のあるところで化学肥料と水で野菜を栽培し、それをアメリカ人に配給したんです。

高橋 アフリカの砂漠地帯では水の確保が大問題になっていますが、勝又さん、イスラエルでも水の捉え方はわれわれとはずいぶん違いますね。

勝又 初めてイスラエルに行ったとき、ぼくは死にかけたんです。学生時代の夏の暑いときでした。飛行場からバスで街に向かい、ちよつと散歩しようと思ってバスから降りました。帽子もかぶらず、水も持たずに、ブラブラ歩こうと思ったんです。ところが日光が強く、すごく乾燥していて、そのうちにフラフラしてきましたね。水を飲みたいと思いましたが、トラベラーズチェック以外に現金はなく、しかもそもそも自動販売機なんてないんです。これはまずいと思い、タクシーを拾って、百ドルのトラベラーズチェックを見せ、これ全部あげるからホテルに連れていってくれて頼んだんです。高くつきましたが、あれでなんとか助かりました。だから、砂漠では、普通にただ単に歩くということだけでも、死と隣り合わせなんです。

嘉田 イスラエルでは飲み水は普段持ち歩いていますか。

勝又 もちろんペットボトルを持ち、帽子をかぶり、日陰を探して歩きます。そうしないと、歩くことすらできないところですよ。大変なカルチャーショックを受けました。

高橋 一九七〇年頃にイザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』という本が出ました。この本のなかで、日本人は、水と安全はタダだと思っていると書かれていますね。

嘉田 生活用水はどうですか。ほぼ水道を使っていらいっしょやる？

勝又 いや、水道水はほくら外国人はあまり飲みませんでしたね。水の会社があつて、契約すると、大きな樽みたいなものを貸し出してくれるんですよ。定期的にその樽を換えに来てくれる。

嘉田 飲み水を供給してくれる、一週間に一回とか。

勝又 そうですね、お金がかかりますが。

嘉田 洗濯は水道水で？

勝又 はい、そうです。

嘉田 水道料金はどうか。

勝又 高いですね。日本では夏、子どもを家庭用の小さいプールに入れて水遊びさせるじゃないですか。でも、そんなことやっていたら怒られます。見も知らぬ通行人から、何やっているんだ、水を無駄遣いしちゃいけないって怒られるんです。

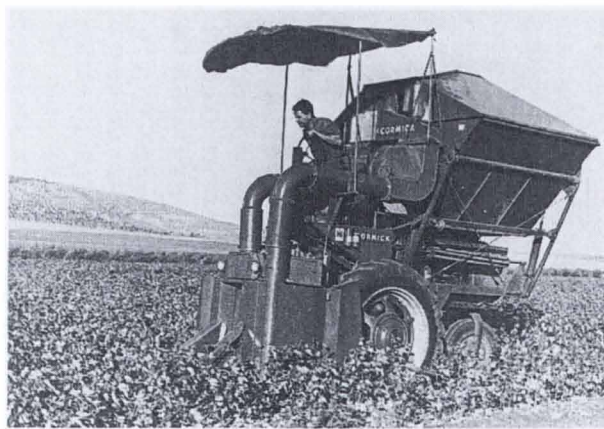
嘉田 それは水が社会的公共財になっているという事です。

勝又 当時はそう理解してなくて、ぼくが自分の水道料金払うんだから、なんで他の人に言われなければならないのかと思いましたけれども、今考えてみると、水は社会的な共通資本なので、水を大切に使うということですね。

嘉田 あの中東紛争の根っこは水争いにありますからね。

勝又 そうですね。根深い問題ですね。

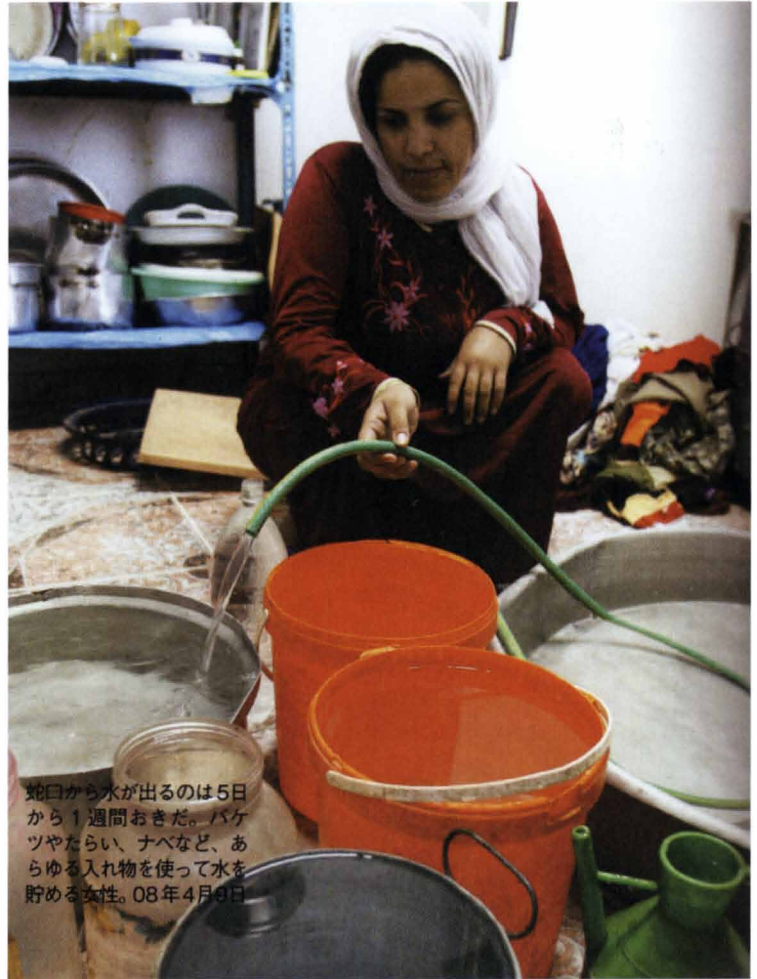
嘉田 ユダヤの土地がイスラエルの地に入ってきたとき、水をどこから持ってくるかが問題になりました。ヨルダン川水系の水資源をどう確保するかという水争いから中東紛争は始まりました。ユダヤの人たちが最初に



キブツの農業（アミア・リブリッヒ『キブツその素顔』1993年、樋口範子訳より）

（6）水道法施行規則（厚生省令第四五号、昭和三年一月二十四日）の第十七条「衛生上必要な措置」の二に以下のように記されている。「給水栓における水が、遊離残留塩素を 0.1mg/l （結合残留塩素の場合、 0.4mg/l ）以上保持するように塩素消毒をすること。ただし、供給する水が病原生物に著しく汚染されるおそれがある場合又は病原生物に汚染されたことを疑わせるような生物若しくは物質を多量に含むおそれがある場合の給水栓における水の遊離残留塩素は、 0.2mg/l （結合残留塩素の場合、 1.5mg/l ）以上とする」。

（7）山本七平『日本人とユダヤ人』角川書店、二〇〇四年。本書は山本七平が山本書店から一九七〇年に「イザヤ・ベンダサン」という著者名で執筆した。問題の記述は「日本人は、安全と水は無料を手に入れている」という「二〇頁」という箇所である。



蛇口から水が出るのは5日から1週間おきだ。バケツやナベなど、あらゆる入れ物を使って水を貯める女性。08年4月6日

水をためるガザ・パレスチナ自治区の女性（『DAYS JAPAN』第5巻第7号、2008年、広河隆一撮影より）

いった技術者は農業水利の技術者だったんですよ。
 勝又 イスラエルの建国自体が「水と緑の都づくり」だったんです。まったく不毛な砂漠に「水と緑の都」をつくったんです。農業に関するイスラエルの科学技術はすごく進んでいますね。
 嘉田 農業水利の技術はすごいですね。パレスチナ地区に管を埋めて、ヨルダン川から水をイスラエルまで引いてくる。そして農地にスプリンクラーで水を撒き、緑をつくりあげるんですね。

糞尿と農業

嘉田 いろいろと文献を見ていて思うんですが、文献で見える文化と見えない文化とがありますね。人間であるかぎり水は飲まなければいけないし、うんこやおしっこをしないとダメですね。でもそういうことに関して記録されている文献はあまりないんです。私は

尿処理にすごく興味を持っているんですが、うんこ・おしっこに関する文献はイスラエルにはありますか。

勝又 ちょっと知りませんね。

嘉田 うんこ・おしっこの付き合いって、すごく大切なんですよ。

勝又 ちょっと考えたことがなかったなあ。

嘉田 砂漠だとそのまま乾燥できるのかしら。糞尿を肥料にしたという記録はないですか。

勝又 ちょっと聞いたことはありませんね。

嘉田 まず、家畜の糞尿を肥料にするかしないかがひとつの目安なんです。ヨーロッパでは家畜の糞尿は肥料にしますが、人間の糞尿を肥料にするというのは、ヨーロッパでは東ヨーロッパの一部にしかないんですが、西アジアはどうだったのでしょうか。

勝又 ご存知のように、ユダヤ人はディアスポラという形で世界中に散らばりましたが、彼らは自分たちの土地を持つことを許されず、したくても農業ができなかったんです。

高橋 そう言えば、ユダヤ人の農民って聞きませんね。

勝又 そう、農民にはなれなかったんです。しかし自分たちも土地を持つて農業をやりたいという欲求はユダヤ民族のなかにずっとあった。それが、現代のイスラエル建国で実現されたわけです。

嘉田 じゃ二千年の民族の悲願だったのね。

勝又 そう、農業するのが悲願だったんです。

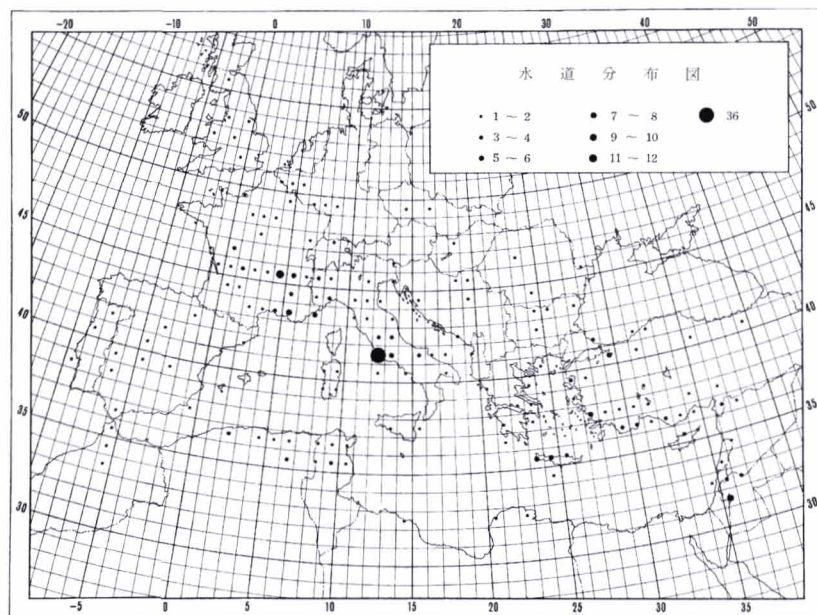
嘉田 日本は正反対ですね。五百年も千年も千五百年も土地に縛りつけられてきたのが日本人です。江戸時代にはたとえば滋賀県には千六百くらいの基礎自治体がありました。その基礎自治体ではどこでも農業が中心ですから、水を確保できるかどうかが死活問題になります。ですから水の境界が社会の境界をなします。たとえばうちの村は六〇町歩の田んぼを持っているということになれば、この田んぼにどうやって水をうまく回すかという話から、村落共同体が始

(8) 一九四八年、イスラエルが建国された。なお、それに伴いパレスチナ難民が発生した。パレスチナ人の側はこれをナクバ（大惨事）と呼ぶ。

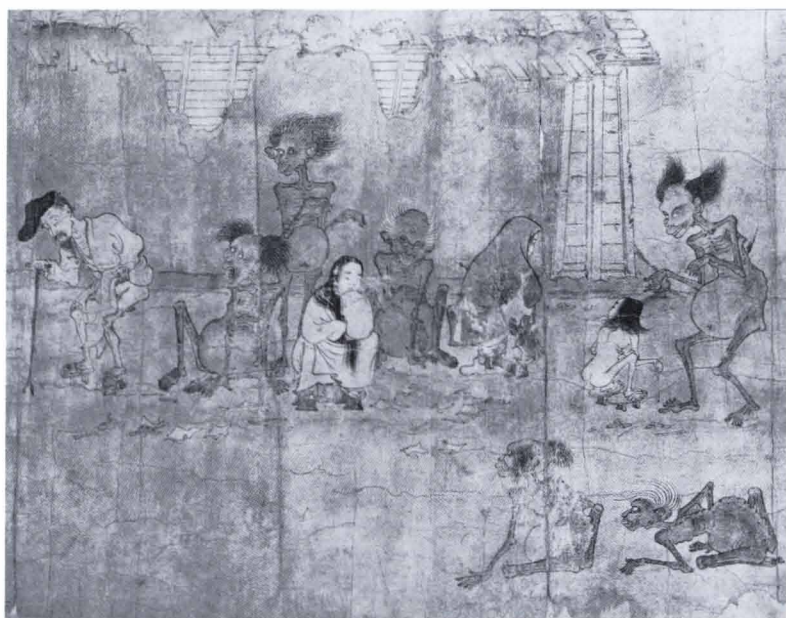
まるんです。

六〇町歩を有する村落共同体が米を収穫したとすると、その収穫のうち四割五割を年貢として納める。税金を納める母体も村落共同体ですから、たとえばA家、B家、C家があったとして、Aの家が今年だめだったら、BやCの家が代わって納めるんです。

これは、為政者にしたらすごく助かる制度なんです。個別に税金を納めてもらわなくていい。年貢がまとめて村請制度になっているんですからねえ。今の納税組合はその名残です。滋賀県のなかにも江戸時代の仕組みが残っていて、たとえば水道代や電気代などの公共料金は全部村で集めてくれるという地域も最近までありました。年貢や税金をみんなまとめて払うというシステムの背後には、土地と水の共有があります。それを見ると、大地と離れて暮らしてい



古代ヨーロッパにおける水道の分布図（熊本大学環地中海遺跡調査団『地中海建築：調査と研究第1巻』日本学術振興会、1979年より）



高下駄を履いて用を足す人々とその糞尿を食べようとする餓鬼（『日本絵巻物全集第6巻地獄草紙餓鬼草紙病草紙』角川書店、1960年より）

た二千年間のユダヤの人々と、水と土地に縛りつけられてきた日本人とは、とても対照的ですね。

高橋 イスラエルは古代ローマ帝国に支配されていましたが、古代ローマ帝国では下水が完備していましたね。水の流れる溝の上で用を足す。日本の平城京もそうでした。ところがやがて平城京に人々が多数住みついてしまい、彼らのする糞尿が川下でつまちゃったんです。そのため町全体が臭くなってしまう、もう住んでいられなくなって平城京を捨てたと言われていますね。

嘉田 伝染病が流行ったんでしょうね。それがおそらく尿尿に関する砂漠地帯と、水の多いモンスーン地帯の基本的な衛生条件の違いです。風土なんですから、これはもう逃れようがないんです。平安の都も垂れ流しだったんです。『餓鬼草紙』を見ると、人々が高下駄をはいてうんこしています（図）。祇園祭りの始まりだって、水に

による疫病ですね。疫病がぐつと減るのは、鎌倉以降に尿尿を農地に還元するようになってからなんです。

高橋 あれは最高の資源循環システムですよ。ああいうことをやっていたのは、日本だけですか。

嘉田 いいえ、中国からです。中国と、東アジアではベトナムまで東アジア中国文化圏なんです。インド文化圏は尿尿忌避文化のようです。「尿尿親和文化」と「尿尿忌避文化」っていうのは、私が前に論文¹⁰のなかで命名したのですが、あまり広まりませんでしたね（笑）。

勝又 しかし日本はかつて江戸時代に尿尿親和文化だったのに、今では逆に忌避文化に変わりつつあるわけですね。

嘉田 そうなつたのは、下水道のシステムを導入してからです。

高橋 ばくの子ども時代には汲み取り制度がまだありました。最初の頃は汲み取ってくれた上に、お金までくれたんです。

嘉田 そうです。高橋さんお住まいはどちらだったんですか。

高橋 東京ですが。

嘉田 東京では葛飾あたりが汚穢^{おわい}を利用していた地域ですね。荒川あたりから千葉まで続く汚穢水路がありました。また西武鉄道は、そもそも汚穢を秩父に運ぶために始まったものですから、汚穢電車と言われていました。大都市の成り立ちについて考えるには、都市を人間の体に模してみたらいいんです。水と食べ物をごくから持つてくるか、うんこ・おしっこをごくこへ持つていくかという体の循環を都市の循環に当てはめることができたときに、都市が成立しました。ローマが三千年前に誕生したのも、上水道・下水道を作ったからです。

便所のある文化圏とない文化圏

嘉田 世界のなかには、飲み水を安全に飲めないと言われていた地域がアジア・アフリカに多くありますが、水が汚いのは工場排水のせいじゃないんです。人間のうんこ・おしっこで汚染された水による、大腸菌や、コレラや赤痢といった水系伝染病などによりそれを解決するには、うんこ・おしっこを処理するための便所を作ることです。ところが便所を作るにはすごくコストがかかります。

私が研究していたアフリカのマラウイのことですが、一ヶ月の学校の先生の給料が二

千円ぐらいなんです。しかしお便所ひとつ作るのに六千円ぐらいかかる

んです。ところが日本人がどうして

一生懸命お便所を作ったかって言う

と、なかにあるものが欲しかったから

です。うんこ・

おしっこが欲しかったんです。イ

ンドやアフリカは

もともと便所をも

たない文化圏です。

インドの農村を歩

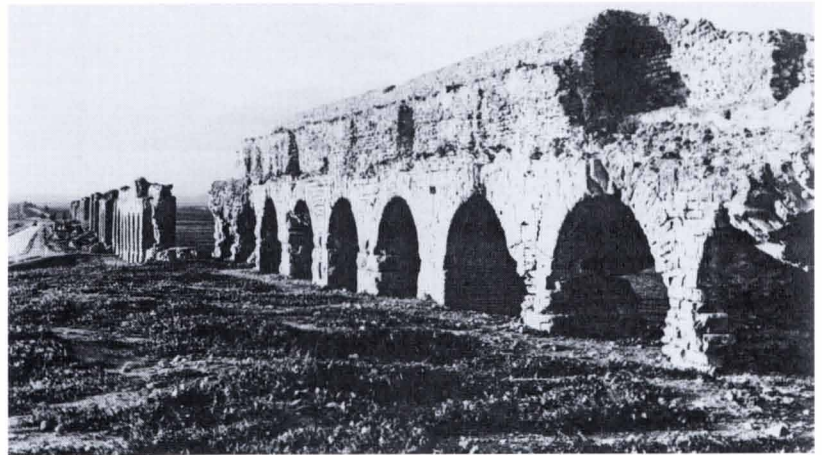
いてみると、あちこちうんこだらけですよ。

高橋 ヨーロッパも便所のない文化圏でした。広大なヴェルサイユ宮殿のなかにひとつもトイレがありません。全部おまるでしていた。そのおまるのなかのものを、窓から通りに捨てていた。通りを歩いていると、頭上からうんこ・おしっこが降ってきたんですよ。

嘉田 なんてあんなに帽子が流行ったかといえ、頭上から落ちてくるものを避けるため、ハイヒール文化が生まれたのは、踏まないためだったんです。なんで香水が流行ったかという、匂いがきつ

かったからです。これはアラン・コルバンが『にのいの歴史』¹¹のなかで書いています。

高橋 道路に捨てられた尿尿は、天気がいれば乾きますが、雨が降れば、またグジョグジョになる。そこを、裾まで引きずるような



ウドナ付近に残る水道橋（『熊本大学環地中海遺跡調査団『地中海建築：調査と研究 第2巻』日本学術振興会、1979年より）

（9）八六九年、京都の洛中で疫病が流行し、死者が続出した。人々はこれを厄神である牛頭天王の祟りだと考えた。そこで矛をたてて神輿をおくり、御霊会を行った。これが祇園御霊会の始まりとされる。

（10）嘉田由紀子「世界の水事情と水文化―尿尿忌避文化と尿尿親和文化（シンポジウム報告）京都文教大学人間学研究所二〇〇五年度公開講演会京都の水・世界の水（二）人間学研究」、京都文教大学人間学研究所、第六号、六〇―七〇頁。

（11）鎌倉時代に人尿尿が肥料として使われるようになった背景には、二毛作の普及と都市の成長があるとされる。江戸時代に入ると尿尿の必要性はさらに高まり、農民は争って都市の住民の尿尿を買い取ったり米と交換したりした。江戸末期において江戸や大坂は世界有数の大都市に成長していたにもかかわらず、世界の他の都市と比べて流域の河川が汚染されていなかった理由はここにあるとされる。ただし、都市住民の尿尿がすべて肥料として近郊の農村に搬出されていたわけではなく、特に農繁期には汲み取りが滞って衛生問題が起っていたという。一九〇〇年代ごろから、工業の発達に伴って農村の労働人口が減少しはじめ、農地が宅地に変わり、尿尿の運搬距離が伸び、辛い汲み取り作業が忌避されるようになっていった。そして安くて取り扱いの容易な化学肥料が大量に生産されるようになると、都市の尿尿は農民に汲み取り料を支払って持っていった。

（12）農業の問題に主眼的関心を抱く井上ひさしは『コメの話』（新潮社、一九九二年）のなかで次のように語っている。戦前から戦後にかけて、西武電車は「汚穢電車」と呼



雨で汚水が溢れたパリの街路を少女を背負って歩く男 (Fournel, Victor, Les rues du vieux Paris, Firmin-Didot: Paris, 1879, p.5)

ロングドレスを着て歩くんです。そこで路上には石がいくつか置かれていました。しかも彼らは風呂にも入らなかった。

嘉田 すごく臭かったといえますね、パリの街は。

高橋 ものすごく不潔でした。ペストだって流行りますよ。¹⁴

勝又 うんこ・おしっこを有効に利用する日本文化をもっと発信していけないんですかね。

嘉田 安土桃山時代に日本にきたルイス・フロイスが、「なんで日本の町はこんなに美しいんだ」と言っていますね。また、イザベラ・バードやお雇い外国人が明治期に日本中を旅行して、なんで日本はこんなにきれいなんだって言っているでしょう。それこそ争ってうんこ・おしっこを活用したおかげですよ。たとえば京都の町には街角にたご桶が置いてあり、所有者が決まっていた。¹⁵「京女は立小便」¹⁶って有名ですが、小尿を取るためですよ。小と大は別でしたから。確かに小尿を取って、高瀬舟で運んだんです。だから水路のあるところ

ろでは農業が有利だったんです。

勝又 それは、海外では受け入れてもらえそうにありませんね。汚いって見られるでしょうね。

ユダヤ教の穢れと日本の不浄

勝又 うんこ・おしっこの関連で言いますと、ユダヤ教の律法では穢れの概念がすごく強いんです。たとえば死体は穢れ、皮膚病は穢れ、出産は穢れといった具合に色々あるんです。¹⁷

嘉田 穢れには、ヘブライ語で言葉がありますか。

勝又 トウムアって言うんです。じゃ、何がユダヤ教の穢れかっていう研究があるんです。でも穢れだけ見ても分からないと思うんです。最も穢れていないものがあるからこそ、初めて「穢れ」の意味が出てくる。では最も穢れていない浄いものは何かというところ、ユダヤ教においては神なんです。ユダヤ教は一神教ですから、われわれを超越した永遠に生き続ける唯一なる神が、宇宙も世界も含めてわれわれを創った。すると、死だとか病気だとか、生殖に関することとか、穢れとされているものはすべて人間らしいことなんです。

嘉田 確かに、人間臭いことですね。
勝又 神って死にませんしね、病気にもならないし、性交渉して子どもを産むこともない。つまり、最も人間らしいことが穢れているんです。ですから本当は、「浄い/穢れ」は、「きれい/汚い」の問題ではないというのが多くの考えです。では、なんで「穢れ」って概念があるのかというと、穢れに関する決まりを日ごろ守らせることによって、自分は死んだり病気がしたり子ども産んだりする人間であると自覚させ、それによって逆に唯一なる神の存在を思い起こさせる、そういう役割があるのではないか。そう考えています。

嘉田 浄いということは、権力とか権威とつながりますか。

ばれていました。この池袋の先、練馬や石神井にかけてはほとんど農家でした。農家ですら、肥料が必要です。そこで東京の中心部の汲取便所の人糞を、西武電車が運んだのです。深夜、正規の運行が終わってから、肥桶を積んだ電車が走っていた。運転手にはベテランの、運転の上手な人が選ばれました(笑)。下手に運転するとチャブチャブと波立って、外にこぼれてしましますから、上手な人が選ばれたのです(一九四頁)。

(13) コルバン・アラン『おいの歴史—嗅覚と社会的想像力』山田登世子・鹿島茂訳、新評論、一九八八年。原書は、Corbin, Alain, La misère et la jonguille: l'odorat et l'imaginaire social XVIII^e-XIX^e siècles, Paris: Aubier Montaigne, 1962.

(14) 本来は野ネズミなどげっ歯類の動物の伝染病である。病原はペスト菌。主としてノミの媒介でヒトにも伝染する。感染経路は他に、患者からの飛沫感染、患者の分泌物・排泄物の付着した物品からの気道感染がある。

(15) 茨城出身の両親を持ち、子ども時代を京都で過ごした松田道雄(一九〇八—一九九八)は『明治大正京都追憶』(岩波書店、一九九五年)のなかで以下のように記している。「京見物の祖父母をおどろかせたものに、京都の女の人の排泄の異様な姿がある『女が立ってしてんだよ』。そういった祖母の見たものは、私も知っていた。花売りのおばさんが、急に路上で堀に背をむけ、膝をまげずにはじめなにかく屈したとき、はじめな京女は優雅なものときめつけている東国の人間に、その情景は衝撃だったのだろう(三七頁)」。時代を遡ると、滝沢馬琴もまた『霧旅漫録』の第八十二段「女児の立小便」で



肥桶を担ぐ人（渡辺信一郎『江戸のおトイレ』新潮社、2002年より）

勝又 ユダヤ教の場合、それはあまりありません。そういう側面は歴史的にはあったかもしれませんが、基本的にはユダヤ教では、神とそれ以外のものとの違いが一番重要なんです。「穢れ」から見ればより神に近い位置にいる人もいれば、神からより離れている人もいます。するとあたかも優劣の関係が出てきそうですが、そういう側面は少ないですね。神の前での人間の近さというのは細かく決められていて、穢れていない人はより神に近く、穢れている人は遠いというんだけれども、それは「いい悪い」の意識とは違うんです。神に近いとされている人の方が、事実上差別的な位置にある場合もあります。たとえば祭りにおいて、その人の存在が不可欠であるような人は、神に最も近いわけですが、実際には社会的に被差別的な立場にあったりします。

嘉田 そこがものすごく大事なところだと思うんです。日本には赤不浄、白不浄、黒不浄といった「不浄」がありますが、女性の月経や出産に関する赤不浄にせよ、出産に関する白不浄にせよ、死に関する黒不浄にせよ、人間の死や生や生殖といったまさしく人間臭いことに對して、日本人は怖れこそ抱いてはいたけれども、それをそんなに別世界には押しやらなかった。それと付き合う仕組みが、日



シナイ半島の砂漠（野町和嘉『Sinai・聖書の旅——モーセの足跡を追って』平凡社、1979年）

本人の生活空間のなかにはあったんです。

勝又 ユダヤ人の穢れと半ば似ていますね。

嘉田 日本ではお産のときには産小屋を、月経のときには月小屋を作って、不浄を共同体から少し離れさせるけれど、完全に排除することはしない。お葬式、お墓も、意外と人家に近いところにあります。日本では穢れに対する怖れが、たぶんユダヤ教などが持っている怖れほど強烈ではないのかもしれないかもしれません。

以下のように記している。「京の家々厠の前に小便担桶ありて、女もそれへ小便をする故に、富家の女房も小便は悉く立て居てするなり。但良賤とも紙を用ず。妓女ばかりふところをみもちて便所へゆくなり。月々六斎ほどづ、この小便桶をくみに来るなり。或は供三人つれたる女、道ばたの小便たこへ立ながら尻の方をむけて小便をするに耻るいろなく笑ふ人なし」（『日本随筆大成第一期1』吉川弘文館、一九七五年、二四一頁）。

(16) 人間の尿中、肥料として効果のある窒素、リン酸、カリウムのそれぞれ約八五%、五五%、八〇%が尿に含まれる。また、糞便には大腸菌がいるが、尿にはない。数値は石橋多聞他『公害・衛生工学体系1』（日本評論社、一九六六年）の一三八頁の表2・3より算出。

(17) たとえば「レビ記」には出産に伴う穢れについて以下のように記されている。「ある女が身こもって男児を出産した場合、彼女が七日の間穢れる。彼女が月経で体調不良となる期間と同様、彼女は穢れる。八日目には、その子の性器の包皮に割れが施されねばならない。その後三十三日間にわたって、彼女は引き籠って血の浄めをしなければならぬ。彼女の血の浄めが終わるまで、彼女は聖なるものに触れてはならず、聖所に詣でもならない。もし彼女が出産したのが女兒であれば、彼女は二週の間、彼女の月経期間と同様穢れる。その後六十六日間をわたって、彼女は引き籠って血の浄めをしなければならぬ」（『出エジプト記レビ記』木幡藤子・山我哲雄訳、岩波書店、二〇〇〇年、一八三頁）。

(18) 「赤不浄」は月経と出産時の血を穢れたものと見なして呼ぶ名称である。穢れは火によって感染すると考えられ

勝又 そうかもしれませんね。だとするとやっぱり、穢れていない存在自体がユダヤ教における神ほど絶対的なものではなかったということになりますね。

嘉田 祭りにおける穢れていない存在といえば、お祭りのご神体です。琵琶湖のあたりでは、坂本に八王子山というご神体の岩山があり、それは女性の女陰を模しています。そこから清らかな水が流れ出しています。穢れていない存在ですが、でも、これはイスラエルにおけるほど絶対的な存在ではないようです。その神を勧請して神社をつくった。そういう神の勧請は全国あちこちでなされています。日吉の山王神社だって全国に三千八百社もあります。そうやって神の力を自分たちの生活空間に据え、淨い穢れていない世界を自分たちのそばに置いた。だから村落のなかにも産土神があり、そこは清い空間となっています。

高橋 砂漠の世界の非常に厳しい環境において信じられる神と、日本のように優しい顔をしていることの多い自然のなかで信じられる神というのは、その顔がだいぶ違うでしょうね。だから、どうしても砂漠では、一神教の神様が厳しく人間を律しないことには、人間は厳しい環境のなかで生きていけない。

勝又 シナイ半島行ったときに思ったんですが、本当に何にもないんです。砂漠って、すでに自然じゃないんですね。

嘉田 日本人の眼から見たら、不自然なところですね。

勝又 何も生きておらず、音もしないんです。これ、やっぱり自然じゃありませんよね。本当に死と隣り合わせの世界なんです。日本だと川があったり緑があったりして、いたるところに神がいそうですが、砂漠にいと、何も無い。すると上から唯一の神の声が聞こえてくるんでしょうね。

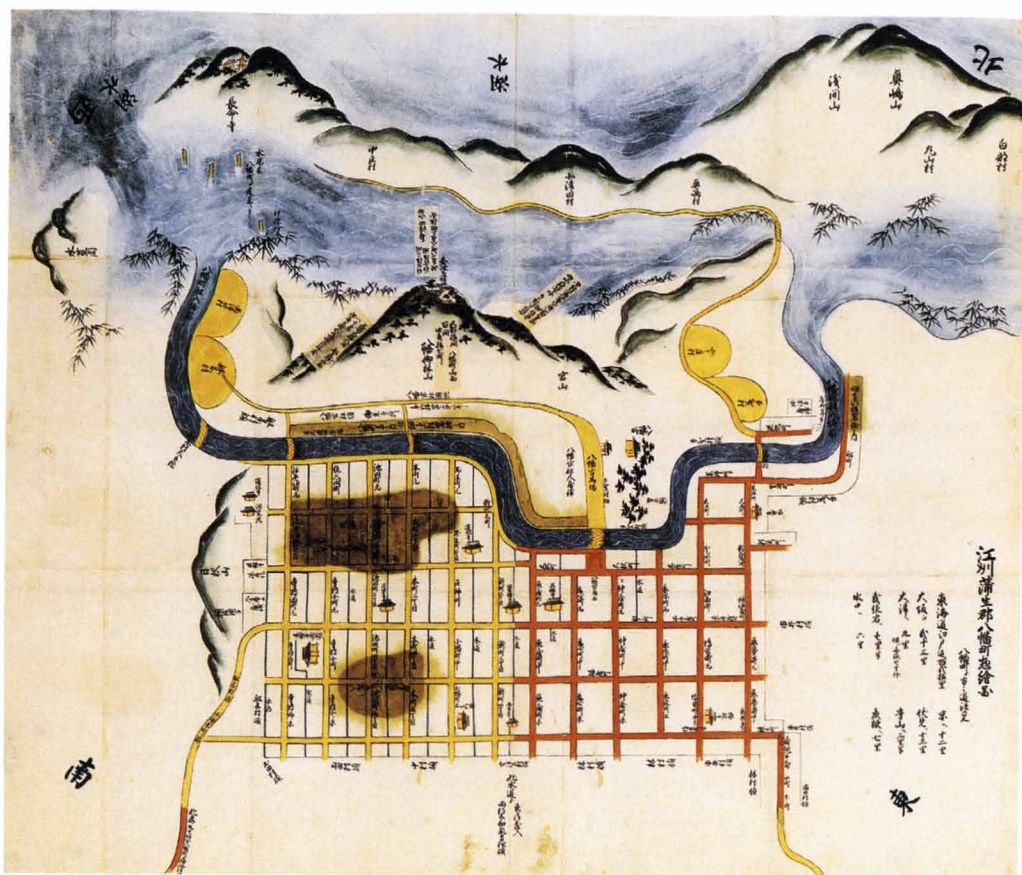
一神教か多神教か

嘉田 日本の場合には、水の神、岩の神、木の神があちこちにいますし、それに神と仏を区別しない。たとえば琵琶湖の沖島に行ったとき、神社の前を通るおばあちゃんがナンマンダンマンダって言っているのを見ました。神社の前で神さまに声をかけなければ済まないと思ったのでしょうか。それを見ていて、ふっと思ったの。ああ、

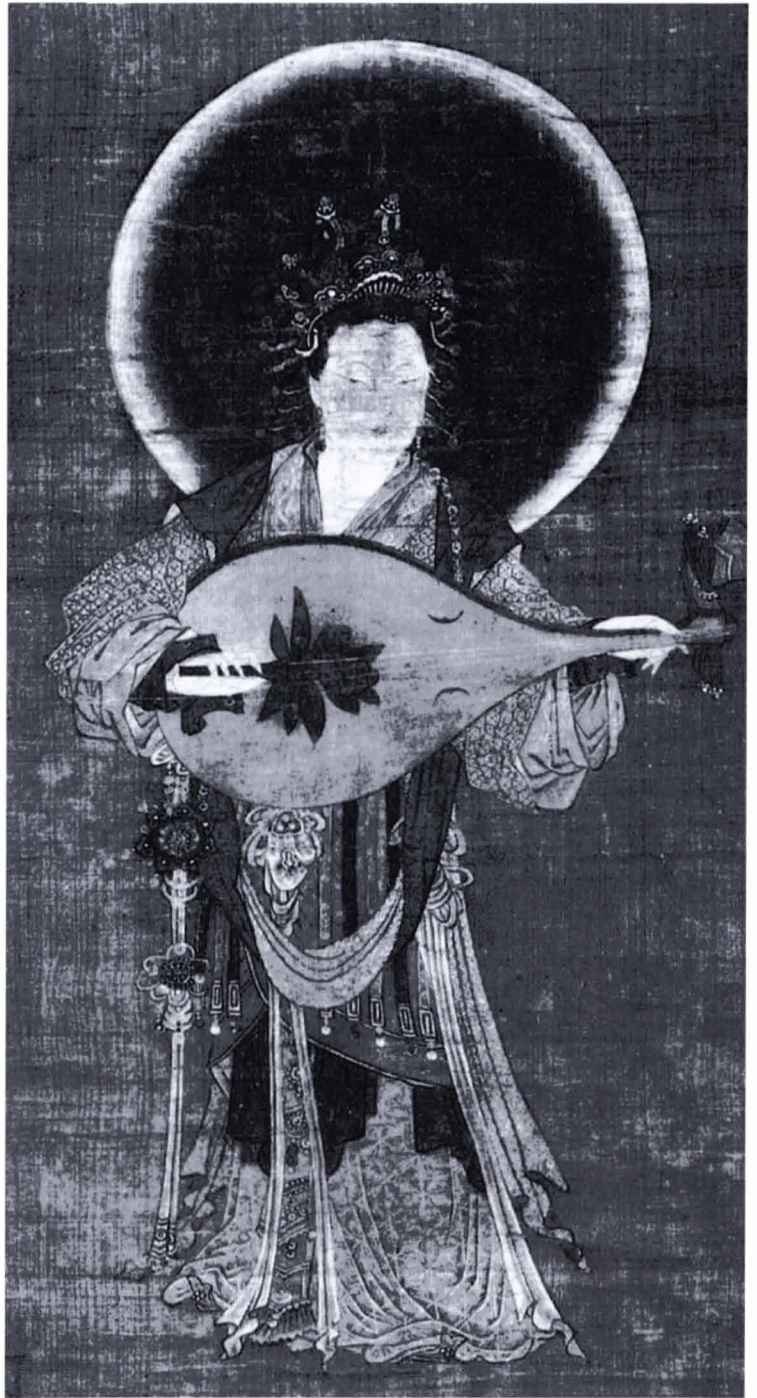
日本では神も仏も一緒やなあ、と。ともにありがたいもの、もったいないもので、その気持ちで神前でのナンマンダになって表れたんですね。ここに私は琵琶湖の水の文化の原点があると思っています。平安時代に本地垂迹説が唱えられ、神と仏がセットになったものが日本で誕生しましたが、ここはその故郷のようなところなんです。天台の伝教大師が生まれたのは坂本の日吉大社のふもとなんです。彼はもともと渡来系ですが、瀬田の国分寺で修行しているとき

たため、月経中の女性や産婦は家から離れて別の小屋で生活をした。別小屋のない場合でも、食事を作る火は家族とは別にした。「白（しら）不浄」は、奄美諸島の喜界島や沖縄の宮古島、八重山諸島などでの出産の忌の呼び名である。また、死の穢れは「黒不浄」と呼ばれる。この場合も火を分かちことが行われた。

(19) 最澄(七六七〜八二二年)の諡号である。



江戸時代の八幡町の絵図（『湖北の地図—長浜町絵図の世界』市立長浜城歴史博物館、1989年より）



竹生島宝厳寺の弁才天像（『竹生島宝厳寺』市立長浜城歴史博物館、1992年より）

に比叡の山に魅かれ、七九四年に平安京ができる九年前の七八五年に、伝教大師は比叡山に小さな祠を開きました。その後で平安京ができるわけですがもともとは琵琶湖畔の人です。ですから琵琶湖は

天台薬師の池²⁰とも言われます。天台の仏さんを中国からお持ちして、比叡山に本山を築いたとはいえ、その天台薬師の池が関わるのは琵琶湖の水神の世界なのです。だから竹生島には、竹生島神社とともに宝厳寺という天台のお寺があります。この天台のお寺のなかに弁天さんがいるんです。弁天ってインドのサラスヴァティー、水神ですよ。何もかも一緒くたにしてしまう多神教だとは思いませんか？

高橋 ユダヤ教、キリスト教が人間存在そのものを穢れと捉えるのに対して、日本では、生活のなかで穢れと祓い清めが隣同士で同居しています。普段の生活は穢れているので、神社に入る前に手を洗い、口をすすいで、祓い清めなければならぬ。この清めの精神は日本神道の本質をなしていて、それが生活のなかに隅々まで入り込

んでいる。そこに、日本のエコロジーの原点があるんじゃないでしょうか。

嘉田 生活のなかに入り込んでいくからこそ、自分たちの解釈が可能なんです。私たちは生活環境主義という考え方を一九八〇年代から言っていますが、生活の中で、生活の必要に合わせて自然と人のかかわりに幅を持たせています。

長浜の曳山祭りには四百年の伝統があり、女性には山に触ってはならず、祭りに入ってはいけないことになっています。私は去年は祭りを遠くから見ていました。ところが今年は、知事も市議会議長も女性だからといって、ただ外から見てもらっているわけにはいかなと言って、どうぞお入りください、と。

歴史的な転換点だと思いました。白黒のどちらかに判断するのはなく、真ん中にグレーゾーンを作ってくれたんです。それまでだったらば、総当番の委員長が先頭に立ち、その後に神聖な行列がつつ

(20)『梁塵秘抄』二五三番に「近江の湖は海ならず 天台薬師の池ぞかし 何ぞの海常楽我浄の風吹けば 七宝蓮華の波ぞ立つ」とある。

(12) Hardin, Garrett, 'The Tragedy of Commons,' Science, Vol. 162, Cambridge, Mass.: Moses King, 1968, pp.1243-1248.

(22) Dasgupta, Partha. The

きました。ところが今回は、総当番の副委員長を先頭で、その後ろに知事と議長が入ったんです。さらに、その後ろに総当番の委員長がおられ、行列が続きました。私、「賢いなー」って思い、本当に感謝しました。長浜というところはそういうところなんです。

勝又 それはぜひぶん柔軟な考え方ですね。

嘉田 柔軟なんです、日本人の自然観は。キリスト教の自然観では非人間世界と人間世界を区別した上で、非人間世界としての自然を保護します。典型がアメリカの自然公園です。ヨセミテを初めとするアメリカの自然公園では、公園内は非人間世界で、人間の手を一切加えてはならないことになっています。しかしよく調べてみると、かつて先住民族が住んでいた頃、ヨセミテでは火を使ったりしていたんです。その先住民族を追い出して、完全に人間のいない空間を作り、これが保護すべき自然です、保護するのは人間です、というのが、アメリカの国立公園のいわば基本的な思想です。

「公共私」の三元論

嘉田 こうした欧米の思想とは違い、日本の里山は、自然を使いながら守っていくところに特徴があります。自然のなかに人間が入っているいいし、入らなければ自然を守れないんです。里山というのすばらしい発想を、私はアメリカ留学中に一生懸命説明しようとしたが、誰も理解してくれませんでした。私は、ハーディン²の「コモンスの悲劇³」の主張は間違っているって言ったんです。乱獲・乱伐という悲劇⁴が起きたのは、ハーディンのいうコモンス（共有地）が本当のコモンスではなかったためです。コモンスでは乱獲・乱伐が起きるので、資本主義的な私有化の制度に変えなければならぬとハーディンは言うんですが、違うでしょう。みんなで規則を作り、自然を使いながら守るという仕組みを日本は何百年もやってきたんです。そう下手な英語で説明したんですが、通じませんでしたね。

高橋 それはじつは今の京都でも起きている問題なんです。自然保護すべき地域を国が全部買い取り、そこからは人を追い出して自然を守ろうとするのが、国の発想です。しかし人がいず、木々の手当てをしなかったら、自然はかえって荒れ果ててしまいますよ。個人

の家の庭だって、年に一、二回は植木屋さんを入れないと、草木が繁殖しすぎてしまいます。それと同じです。買い取り制度では、本来に自然を守ることはできないんです。

嘉田 今の例は、アメリカと同じ「公」と「私」の二元論なんです。「公」と「私」のあいだの「共」という視点が欠けている。コミュニティ、あるいは共有空間がない。欧米の「公」と「私」の二元論ではなく、これからは「公・共・私」の三元論で行かなければならない。

勝又 そうです。みんな「公」のことばかり言うけれど、いま必要なのは「共」なんです。今日でも著名なケンブリッジのダスグプタ⁵が、ハーディン論文は最も短い論文で最も間違いの多い論文であるコモンスの何たるかを分らずに書いてるって言っていますね。

高橋 「共」の精神は昔の日本のほうが強かったんですね。でも、地方にはまだこの精神が残っている地方があります。最近、長浜市や近江八幡市の方々とお付き合っている機会が多くなったんですが、皆さん一緒になって「共同作業」⁶されています。黒壁地区の活性化のためにみなで力を合わせよう。エコな町づくりをみなでしよう、といった具合です。大都市ではとうていあんな風にはやれませんね。みんな、何であんなに助け合うことができるのか、なんであんなに「共」の精神が生きているのかなあ、と感心しますよ。

嘉田 長浜は曳山祭りを含めて、町衆の自立意識がとっても強いんです。意識が先なのか、実態が先なのか分かりませんが、たぶん存在が意識を規定するんでしょうね。長浜に城があったのは一時のこと、江戸時代には彦根に藩の中心がありました。そのため長浜は基本的に町民文化なんです。同じように近江八幡も町民文化なんです（一頁図参照）。近江八幡には八幡祭りがありますが、祭りが維持されているということは、三百年も四百年も、町民文化がきちんと続いているということ、重要な「共」ともいえる社会的共通資本だと思っています。

高橋 そういう「共」の精神が日本中に広まるといいですね。今日はどうもありがとうございます。

（テープ起こしと注は、村田稔彦（平成二〇年人間・環境学研究科修士課程修了）による。）

Control of Resources, Basil Blackwell/Oxford, 1982, p.13. 本書の中でダスグプタは、ハーディンの論文の以下の箇所を引用し、「これだけ短くてこれだけ有名で、しかもこれほど間違いの多く含まれる一節を見つけたのは困難であろう」と述べている。「すべての人に開かれた牧草地を思い描いていただきたい。きつとそれぞれの牧人はできるだけ多くの牛をこのコモンスで養おうとするであろう。（中略）合理的な存在として、牧人は自分の利得を最大化しようとする。はつきりと、あるいは暗に、そして多かれ少なかれ意識的に、彼は問いかける、「私の群れにもう一頭加えることは私にとっていかなる効用があるのか。」（中略）各効用を総計して、合理的な牧人は次のような結論に達する。自分の採るべき唯一の意味ある道は、もう一頭を自分の群れに加えることだ。そしてもう一頭、またもう一頭……。しかしこの結論は、コモンスを共有するすべての牧人がそれぞれ到達するものである。そこに悲劇がある。各人は無限に群れを拡大することへと追い立てられるシステムに組み込まれてしまっている。コモンスは有限であるにもかかわらず、コモンスにおける自由を信奉している社会では、各自が自分の最大の利益を追求することによって、全員が破滅に向かって疾走するのである。コモンスにおける自由はすべての者に破滅をもたらす。なお、ハーディンはこの論文のなかで、人口増加と環境問題が密接に関わっていること、しかしながら科学技術の進歩や、人々の良心に訴えることはそれは解決されえないこと、したがって出産の自由を法的に制限しなければ、もはや世界は「悲劇」に突き進んでいくしかないこと、を主張している。

ても見むと 百重波 千重波にしき
言挙げす我は 言挙げす我は

(萬13・三三・五三)

反歌

磯城島の 大和の国は 言霊の 助く
る国ぞ ま幸くありこそ

(萬13・三三・五四)

「言霊の助くる国ぞ」という表現を踏襲して「ことたまのさきはふ国」と歌う山上憶良の「好去好来歌」(萬5・八九四 天平五年)は遣唐使への送別の歌、「好去」はお元気でという中国六朝の俗語で、「好来」はそれを応用した表現、元気で帰って来ようというのが題詞の意味である。だから、人麻呂のそれも遣唐使に捧げられたものである。う。「葦原の 瑞穂の国」は大和国(日本)の美称、そこでは、神の意に任せて、人はことさらな物言いをしてない習慣の国である。しかし、今私は高らかに言おう。お元気で、そしてお元気であったらきつとまたお会いできると、寄せては返す波のように何度も何度も私は言挙げをしようというのが歌意。平安朝の古写本で長歌の最後の句が小字になっているのは、繰り返して歌われた部分とされている。「神ながら 言挙げせぬ国」は、反歌で「言霊の 助くる国」とされている。発言の戒めと矛盾するようでありながら、自己の言挙げは神意に逆らうのではない、かえってそれに沿うのであって、それを保証するのがことたまだというのである。ことさらに大和国をことたままで規定するのは、ことたまのような現象、言わば草木も物言うといったあり方が、中国では伝

統的に経書に悖る「妖言」という言語行為として戒められてきたことを意識するのであろう。ことば、殊に歌の大和ことばに表すことへの自負が、人麻呂にはあった。ただその傍らには、外国語について、「さひづらふ漢女」(7・一二七三)、鳥のさえずりのように無意味なことばを発する外国の女といった排外的な態度もあった。

ことばと言う前に、日本語では言語をコトと称した。コトとは、カタル(語る)のカタと母音交替、即ち同一の子音環境のもと、母音がーoと変化して語を派生する関係にある語で、要するに同一語源の語であった。またコトは、言であり、同時に事であった。つまり古代日本語で、ことがらとは語り出されであることであった。名詞を造語すれば、「語り出され」というのがそれにあたる。ただし、このことは、古代日本でことばに出したことは必ずことがらとして実現すると信じられていたという、いわゆる言霊信仰ということに帰結するのではない。それは殆ど前々世紀の人類学と言ってもよい古色蒼然とした未開社会観に基づく古代観を基礎とする。ことたまもまたその延長に説かれてきた。それは未開社会たる古代日本の信仰であると、今なお辞書にも記されている。



図2 柿本人麻呂像 江戸時代 作者未詳(水垣所蔵)

僻遠の地、石見に、人麻呂は一人の女を残して去って行く。尽きることのない愛惜は、その地の見えなくなる境の山への強い呼びかけのことばとして現れた。「靡け、この山」。しかし山は靡かなかった。ことたまはむなししい希求でしかなかった。否、ことたまは忠実にそこに語り出されたことの存在を支えるのである。「靡け」という希求そのことこそがそこに言として、事として存していた。

言への信は、しかし時代を接して揺らいでくる。

名草山言にしありけり我が恋ふる千重

の一重も慰めなくに

(萬7・一二二三)

「羈旅作」と題される歌群の一首、旅中の鬱勃とした恋心を、紀伊国のこの名草山は、その名にナグサムという言葉をもつのに、一向に慰めてくれなれいと難ずる。旅でのちよつとした洒落心の歌で、それ自体に特に言うべきことはない。しかし、「言にしありけり」は、ナグサという音節をもちながら、それが慰むの意味に働かず、ただ音が同じであるだけだと言ってしまっている。

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ (萬1・三〇)

既に廃都と化した近江京の荒廃を嘆く人麻呂の「近江荒都歌」の反歌、志賀の唐崎はサキ(崎キ甲)であるが故にサキ(幸キ甲)をなお保っている。しかしその祝福を受けるべき大宮人の舟はいくら待っても現れることがない。言の上の小さな約束を覆い尽くす運命を嗟嘆するが、それ故に言の約束への信は固い。人麻呂は、ほぼ平城京遷都のころに亡くなったとされる。「言にしありけり」とあっさり不信を歌う歌は、遷都後地方の行政区画が整ってからの歌である。

坤 ことのはのうつるひ

コトバという語は、萬葉集のうちに生じた。

百千度恋ふと言ふとも諸弟が練りのことば(言羽)は我は頼まじ

(萬4・七七四)

大伴家持が、滞在先の新京久邇京から、

旧京即ち平城京にいる、後に妻となる坂上大嬢に贈った歌五首のうちの一首、五首は、こちらの方がそちらよりどんなにか恋しく思っていることかと訴える体の内容で、この歌は、そこから何千回恋しいと言ってきたも、それは使いをする連中の言い回しに過ぎないから私は信じないと、いささか戯れた歌いぶりである。萬葉集の本文には「言羽」と記されている。「言」に接尾語のついた形だが、バを端とすれば、言葉尻のような意味で、言を貶めていう称である。「羽」と当てるのは、言の軽々しさをいう意識的な用字であろう。この語が俗語のような性格をもつことは、この使用例からも分かるが、次のように方言としてあつたことにより明らかである。

父母が頭掻き撫で幸くあれて言ひしけとば(氣等婆)ぜ忘れかねつる

(萬20・四三六)

大伴家持が兵部の少輔として難波にあり、防人達の詠む歌を採集した中の一首、駿河国から防人に徴用された丈部稲麻呂という人物の歌、コトバは東国語形である。ここには、先の家持歌のような戯れと俗語意識はない。むしろここでは、父母の言としての確かさ、「幸くあれ」という確かな意味を担った肉声そのことである。方言の内部にあることにおいて、意味の可能性への疑いはない。新しい語形、コトバの登場である。

次の時代、新旧の語形、コトとコトバは、同一の位相に共存する。平安初期の漢文を訓読した文献で、「詞、辞」という文章上

の謂いにはコトバと、「言、語」という口頭言語にはコトと訓がつけられている。また、最古の漢和辞典と言うべき新撰字鏡には、コトドモリ(吃音のこと)、ネゴト(寝言)が見られ、意味に対して定かでない発言をコトと称したと見られる。後世コトは複合語の中のみ見られるが、そのはしりとも言えよう。

二つの語のこの差は、土佐日記に受け継がれる。何気ない幼児の発言が「をさなきわらはのこと」とされるのに対して、「黒鳥のもとに白き波を寄す」と唱えた舟人の発言は「ものいふやうにきこえたる」「ことば」であるとされる。もとよりこの使い分けは、同じく紀貫之の撰、古今集仮名序にも共通する。

ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、すなほにして、言の心わきがたかりけらし。

花をめで、鳥をうらやみ、霞をあわれび、露をかなしぶ心ことばおほく、様々になりける。

歌の歴史の中で、定型の成立につれて、表現手段は言からことばに移行している。その限りに、コトバのバに葉を意識することはなかった。

いで人はことのみぞよき月草のうつし心はいろことにして

(古今 恋四 七一一 よみ人しらず)

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことはうれしからまし

(同 七二二 同)

いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我はたのまし

(同 七 一 三 同)

右三首のうち、第二首(七一二)の「ことのは」は、その使用例として早いものであるが、ここに「言の葉」という意識の見られないことは、注意してよい。前後の歌からして、人のことばは信をおくべきまことではなく、むしろ移りゆく心と共にうつろう。コトとコトノハにさしたる差はなく、コトノハは、「言の端」としての意義にある。元来端のハと木末の葉のハとは同源とも見うるとい点では、連想は起こりやすかったはずだが、ここにはその把握はない。しかしそれを越えた把握が、平安和歌の中に生まれてゆく。

やまとうたは人のこころをたねとして
よろづのことはとぞなれりける。

(古今集仮名序)

著名な一節で、一般には「ことのは」は文飾とされる。しかし、文飾なら、「ことのはな」とした方が、真名序「夫和歌者、託其根於心地、発其華於詞林、者也(紀淑望)」との対応があつて、ふさわしかったのではなかったか。「ことのは」には、真名序の文選風の文辞とは異なる認識があることになる。竹取物語で、かぐや姫が、蓬萊の玉の枝を贗作として返す折に、

まことかと聞きて見れば言のはを飾
れる玉の枝にぞありける

と詠む歌の、枝―葉という縁語関係はまさしく文飾と見える。しかし、ことはむしろ逆であつて、言い表しが事象を規定しているというあり方の中で考える必要がある。

かれにけるをとこのもとに、そのすみけるかたのにはの木のかれたりけ

るえだををりてつかはしける

兼覽王女

もえいづるこのめを見てもねをぞなく
かれにし枝の春をしらねば

(後撰 春上 一四)

「離れにけるをとこ」は、もう自分の所に通つてこなくなった男、春になって木が芽吹いても、既に枯れた枝が芽吹くことはないことに寓して、男の心離れを嘆く。寓意関係は事象のうちにあるのではなく、カルという言い表しにあって、即ちつながりを与える。離ルという語は、枯れ枝と同じようにある。人のことばを一種のものとして把握することは、次のようにしてある。

あはれてふことだになくはなにをか
恋のみだれのつかねをにせむ

(古今 恋 一三〇二 よみ人しらず)

「つかねを」は束緒、ものを束ねて一つ

にする紐である。概念のもとに統括するというような言語学があるのではない。コトは、ものと同じように存在性を付与されている。歌合わせで、歌う内容を州浜に実体化することが流行した時代でもあった。こうした、ことばを存在として、ものと同次元に捉えようとするところに「言の葉」は成立した。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
思ふてふことのはのみや秋をへて色も
かはらぬ物にはあるらむ

(古今 恋 六八八 よみ人しらず)
あはれてふことのはごとにおくつゆは
昔をこふる涙なりけり

(古今 恋 九四〇 同)

自然界のものとしての葉が色を変じ、また露をおくことが、同じく葉である故に言の葉に比定される。ことばの存在性格



図3 陽明文庫旧蔵カルタ 小野小町

はくつきりと葉と同じであると認識されている。前者、愛が変わらずあることを支えるのは、「思ふ」と言われてある語りそれ自体であり、愛の語りは、秋にもうつろわない色の葉としての存在性格を有している。ただ、愛は通常それを、自らがその上にある語り自体を隠蔽する。心が秋と共に、飽きというままにうつろってゆくのに語りのみは不変に存在していることも読める。後者で、過ぎ去った恋をああと嘆息する（アハレは感動詞）とき、アハレというまさしく語それ自体の存在性格、葉としてのあり方ゆえに「昔を恋ふる涙の露」がそこにおかれる。「露／葉」という図と地の関係は、「アハレの意義／言の葉」という関係に対応していて、そしてさらに「涙／身」と対応する。身はこの歌で顕在的な表現をもたないが、

かなしさぞまさりにまさる人の身にいかにおほかるなみだなりけり

（古今和歌六帖 かなしび 伊勢）

のように涙と相関的で、涙は身に存在する。蓋し身とは、命の身体であり、現に生きてそこに在ること、うつせみの最初に宿る世界性である。それは右のようにして、ことばの意義と、言い表し自体たる言の葉との関係に対応するように、平安和歌では把握されていた。

従って、言の葉は、身と共にうつろうものであった。

今はとてわが身しぐれにふりぬればことのほさへにうつろひにけり

（古今 恋五 七八二 小野小町）

「古る」と「降る」とが掛詞になってい

る。ただこれは遊戯的なのではない。葉がしぐれに打たれて色を変ずることとは、葉へと時間が現れ出ることである。シグレは、後に「時雨」の字を当てるように、木の葉に初冬という季節の時間を教える雨である。身が古るとは、自己の内部の時間を知ることである。古りてゆく身と木の葉が、降る雨によって、共に経てゆく時間を経験している。その時間の中で、愛を誓う相手からのことのはは、言の葉であるが故に、そのうつろひを共にするのである。

うつろひは、また、

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしに

（古今 春下 一一三 小野小町）

のようにも見られている。長雨は我が身に時間を刻み、花にうつろひを与える。しかし、この二つの時間は微妙に重ならない。「いたづらに」は、花に現象している時間が、我が身に分節されている時間へと還ることが実感されないことを示す。眺めはそれを見つめていて、即ちナガメということのはは、二つの意味に裂かれている。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

（古今 春下 八四 紀友則）

ゆたりと停止しているはずの春の時間の中で、しかし見えているものの時間は、静まることなく、我が身の経験しているそれと背馳している。不安な気分の中で、ことのははもう存在を繋ぎとめない。

（3）原義は「現シオ霊」、このミはミ甲で、身はミ乙、従ってウツセミは「現し身」ではない。

近代日本語における和漢欧文脈の混淆

李 長波

LI CHANG-BO



李 長波(り ちやうは) 一九六二年中国黒龍江省に生まれる。一九八二年大連外国語学院日本語学部卒業、一九九一年京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程入学、一九九九年三月京都大学博士(人間・環境学)学位取得。一九九七年四月本研究科助手、二〇〇六年四月より同講師。

周知のように、近代日本語は、従来の和漢混淆文にさらに欧文脈が加わった結果、文体、文法、語彙にわたって「言語混淆の時代」を経て、現代語に至っている。これは、和漢混淆の文体が欧文脈の洗礼を受けることによって近代にふさわしい文体として生み出される過程といってもよい。小稿は、語順の問題、連体修飾節に用いられる「〜するところの十名詞」の表現、「〜的」の三つを取り上げ、和漢欧文脈の混淆の一端に触れてみたい。

一 語順と「関係代名詞を持たない日本語」

江戸時代から近代にかけて、西洋語との接触のなかで、日本語への認識が促されたことは、近代の作家にとっては新しい文体の創出のための大きな原動力の一つとなった。とりわけ語順の違いと関係代名詞を持たないことが強く意識されるところとなり、谷崎潤一郎が『文章読本』(昭和九年刊)の中で関係代名詞について一種の羨望をもって語られるのもその一例である。

①西洋の言葉は、支那の言葉と同じやうに動詞が先に來て、次に目的格が来る。又テンスの規則があつて、時間的に細かい區別

をつけることが出来、前の動作と後の動作とはつきり見分けられる。又、関係代名詞と云ふ重寶な品詞があつて、混亂を起すことなしに、一つのセンテンスに他のセンテンスを幾らでも繋げて行くことが出来る。(七一頁)(傍線は引用者による)

日本語の語順、つまり動詞が文末に來ることについては、歴史的には表現を含蓄あるものへと昇華させてきた経緯があり、それ自身日本語の特徴の一端を担っていることはいままでもない。しかし、このような構造を持つ言語が、一つは聞き手・読者に理解の負担を課すこと、もう一つは「弁論」「論述」に概ね適しない一面があることも事実である。たとえば言語学者は次のように述べている。

②日本語では、表現が進むにつれて、末ひろがりに重くなり、英語では末すばまりに軽くなる。そして、末ひろがりの場合には、自然に大小の断裂ができる。これも、すべて動詞が、目的語のあとにつくからである。〔泉

井久之助「弁論と言語と日本語」、『言語の研究』有信堂、一九五六年、一八〇頁)

事実、このような日本語の持つて生まれるところの特徴は、上代語、中古語の書き言葉においても、あるいは日本語の自助的な努力として、あるいは漢文訓読の語法に触発されて、「恐らく、決して、必ずしも」などの陳述副詞が発達し、中古、中世、近世の和漢混淆文においてさまざまな工夫がなされてきているところであった。『文章讀本』の中でも、自分の考えを述べる表現として、

③私は、文章に實用的と藝術的との區別はないと思います。(七頁)



図1 初版発表の昭和九年十一月五日から翌昭和十年三月三日までのわずか四ヶ月で九十刷という記録的な売れ行き、写真は第九十刷の表紙。近代以降世に文章作法を説く書の先駆けとなる。

(1) 池上禎造「近代日本語と漢語語彙」、『漢語研究の構想』、岩波書店、四六頁。

のような表現が随所に見られる一方で、次の例のように、自分の考えを表す動詞や文意をまとめる表現を先にして、後からその内容を述べるような表現を目にすることができる。

④思ふに、昔から文章を彫琢すると云ひ、推敲すると云ひますのは、その大半が單語の選擇に費される苦心を指すのでありまして、私なども、何十年來此の道に携はつてをりながら、未だに取捨に迷ふことが多く、若い時と同じ辛勞を覚えるのであります。(一二五頁)

⑤私の見るところでは、今日より漢學が盛んであつた徳川時代に於いても、漢詩や漢文を弄び、漢語を口にした人士は比較的少數であつて、一般にはもつと平俗な、日本風な云ひ方が行はれてゐたに違ひない。(一三九頁)

⑥要するに、文章の味と云ふものは、藝の味、食物の味などと同じでありまして、それを鑑賞するのには、學問や理論は餘り助けになりません。(九七頁)

⑦が、申すまでもなく、これは口で云ふやうに譯なく出来る仕事ではないのであります。(一六五頁)

⑧詮ずるところ、文字使ひの問題につきましては、私は全然懷疑的でありまして、皆さんにどうせよかうせよと申し上げる資格はない。(二二五頁)

⑨扱、最初に一つの例を引いて申し上げますが、數年前に、或る時私は、……(二七四頁)

⑩いかにも此れは一應尤もな説であります

が、左様な疑ひを抱く人に對しては、私は下のような事實を擧げてお答へしたいのであります。それは何かと申しますのに、私の友人に大藏省に勤めてゐる役人がありますが、……(一〇七頁)

例④から⑩までの七例中、④、⑦、⑨、⑩のような日本語独自の表現から、「要するに」、「詮ずるところ」、「私の見るところでは」のような漢文訓読的な語法にいたるまで、作家谷崎の文体的な工夫もさることながら、いずれも近代日本語の文章語或いは口語におけるかかる努力のあとにほかならない。そして、これらの表現はそのまま現代語に受け継がれている。

一方、SOVという日本語の基本語順に關連して、名詞に対する修飾語は必ず名詞に先行すること、關係代名詞を持たないことは表裏の關係にあると言える。いきおいそこには一種の肥大化ともいふべき傾向を許してしまうのもそのためである。では、このような關係代名詞の「欠落感」に對して、日本語はどのように向かい合つてきたのであろうか。同じく現代語に通じる用例を『文章讀本』に求めれば、次のような「スルところの十名詞」である。

⑪此の讀本で取り扱ふのは、専門の學術的な文章でなく、我等が日常目に觸れるところの、一般的、實用的な文章でありますが、(七六頁)



図2 荻生徂徠の訓点による『官刻六諭衍義』表紙。架蔵本。

「スルところ(の)」の語法はもともと漢文の「所謂(いわゆる・謂うところの)」のような「所十名詞」節の漢文訓読によつてもたらされたものである。それは訓点語から、和漢混淆文では今昔物語集、道元禪師の『正法眼藏』にいたるまで用いられていたが、幕末から明治初期にかけての近代語の書き言葉の形成期に、英語を初めとする西洋語の關係代名詞を訳す際、このような文体的な背景が大いに与つて力があつたのであろう。そして従来和漢混淆文のなかとはいへ、すでに文章語としてかなり一般化しつゝあつたこの表現が、欧文脈の洗礼、いやむしろ欧文脈による「選良」の結果、さらに近代語の書き言葉として一般化するにいたつたのである。

しかし、「關係代名詞を持たないこと」に對する日本語の自助的な努力は、正格漢文からは「スルところの十名詞」の表現を生み出したばかりではない。中世には、更に唐宋時代の口語として禪宗語録によつてもたらされた助字「底」「的」とは同語

にして異なる表記)に基づき、「スル底(の)十名詞」の語法が生み出され、道元禪師の『正法眼藏』から瑩山禪師の『伝光録』その他の禪宗仮名法語を経て、近世仮名法語にも盛んに用いられていた。これは、明治時代には若干一般化の傾向を示しながらも、さほど勢力をえないまま現在は衰退しつつあるようである。出自が禪宗仮名法語であることに加え、「スル」ところの十名詞³⁾の勢いに押されたことも一因と考えられる。

二 「ゝ的」について

現代語の書き言葉、話し言葉を通じてほとんど欠かすことのできない、「ゝ的」については、大槻文彦の、明治の初め英語の「the」を訳すのに着想を得たとの証言を受けて、各種の辞書類も概ねその説を踏襲しているが、実のところ、文獻的には荻生徂徠の訓点にかかる『六論衍義』(享保六年序刊)に訓点語としてもた

らされたものである⁵⁾。以来、白話小説の翻訳等を経て、江戸時代にもすでにわずかながら一般化の傾向が見られたが、本格的な日本語の普通文への進出はもろろん近代以降であり、更に話し言葉まで浸透したのはもっと後のことである。その間長い拒否反応の期間があったことは、谷崎潤一郎の「現代口語文の缺點について」(昭和四年)からも窺われる。

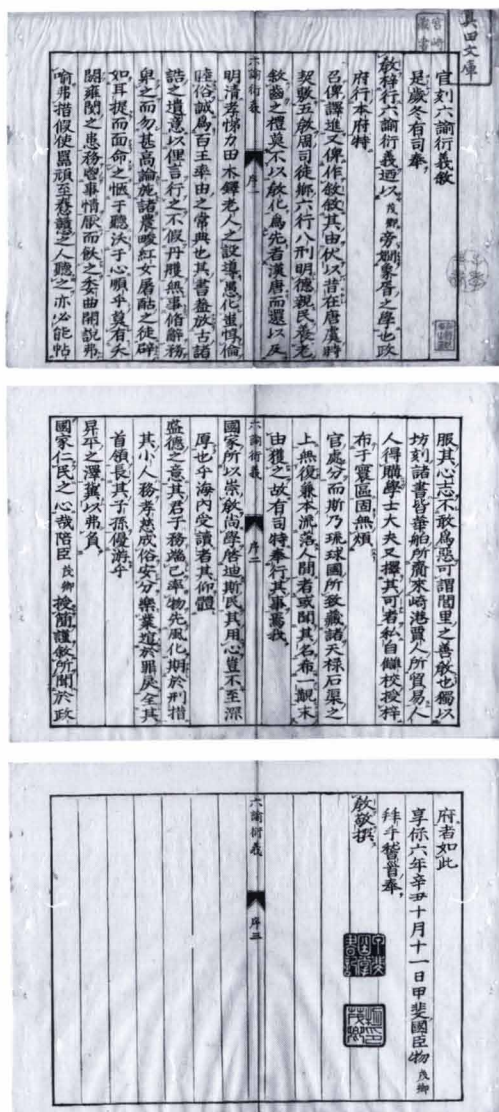


図3 荻生徂徠の序

⑫「觀念」、「概念」等の厄介な言葉を使わないでも、大概な場合は「考」と云ふだけで済むことである。然るに多くの評論家は、「知つてゐる」で済むところを「意識してゐる」と云ひ、「餘り」「差引き」「さや」で済むところを「剩餘」と云ひ、萬事がさういふ行き方で、ことさらに漢字を多く使ふ。就中最も眼につくのは「的」の字の亂用である。あれはただ「の」の字に書き換へて差支へのない場合が非常に多い。たとへば「思想的背景」は「思想の背景」で、「社會主義的文學」は「社會主義の文學」で澤山である。(現在の支那語に於ける「的」の字は「の」の字程にしか使はれてゐない。)それも程度問題であるが、いかなる漢語にでも「的」の字を加へて強ひて形容詞の働きをさせ、それを幾箇となく積み重ねるに至つては、先にも云つたやうに音の連續になるばかりで、意味を追ひかけて行くのに骨が折れるから、到底晦澁になることを避

け得られない。(「現代口語文の缺點について」、一八三—一八四頁)

しかし、同じ「ゝ的」についても、昭和九年刊の『文章読本』では、次のようになりトーンダウンした表現になる。

⑬つまり、文章は「眼で理解する」ばかりでなく、「耳で理解する」ものでもあるのに、當世の若い人達は見分るやうに書きさへすればよいと思つて、語呂とか音調とかに頓着せず、「何々の何々の」と云ふ風に無數に漢字を積み上げて行く。(三八頁)

そればかりではない。当の谷崎自身、『文章読本』のなかで、「ゝ的」をざっと数えるだけでも一三〇例を下らないほど多用していたのである。以下の数例を参照されたい。

(3) 拙稿二〇〇三と二〇〇四を参照。

(4) 「文字の誤用」(明治三十四年七月東京教育会演説)、『復軒雜纂』、広文堂書店、二七四—二八三頁。

(5) それまでは、長崎の唐通事たちの間ではあるいは日常口頭語としてあるいは教科書的な内容としておそくすいぶん親しまれていた言葉の一つであったと思われる。ちなみに、荻生徂徠に唐話の知識をもたらしたのは、ほかならぬ中国語の俗語小説の翻訳物で名高い岡島冠山だったと推定される(石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』、弘文堂書房、一九四〇年、二二—一三六頁)。



図4 『六論衍義第一・孝順父母』の最初の部分。かの室鳩巢もなしえなかった口語体中国語の調点に、徂徠はさまざまな工夫によって成功している。「的」はその顕著な一例。

⑬文章に実用的と藝術的との區別はない。
(七頁)
⑭われわれの方は「曰く云ひ難し」の境地を貴んで、……(七三頁)
⑮徳川時代に造られた比較的新しい言葉や、……(一二七頁)
⑯兎に角、昔は文章を褒めますのに流暢だとか流麗だとか云ふ形容詞を常套的に用ひましたくらゐで、……(一二二頁)

⑬では、語彙も訳語のにおいが強く、欧文直訳風の名詞的用法を残しているのに対し、⑭では「の」を下接しながらも、「曰く云ひ難し」のような漢語ならぬ和語の定型表現に付き、⑮では、現代語に通じる副詞用法に用いられ、⑯では訳語とは異なる普通の漢語に付くなど、このわずかな四例か

らでも、「的」はすでに自由自在に使われていることが窺われる。わずかに四年間の間には「的」についての作家谷崎の文体意識も変化を余儀なくされたのである。一つは谷崎潤一郎の厳しい文体意識のため、今ひとつは一般読者に文章作法を説くという『文章読本』の性格のために、われわれは、「的」は昭和九年の『文章読本』をもって、西洋語の翻訳語として再生されてからおよそ六十年にしてようやく市民権を得るまでにいたったとみることができる。

「ところの十名詞」が連体修飾語にある階層性を与えることに寄与したのと同じように、「的」は明治以来西洋語の翻訳を介してもたらされた大量の漢語語彙という異質な「他者」を、「の」の多義性と口語性を避けつつ、ぎりぎり精一杯の日本語化(形容詞化と副詞化の両面において)の立役者として活躍したことは、認めてよさそうである。

以上のわずかな例からも、日本語の歴史と文体史において、日本語のもって生まれた特長が外国語との接触のなかでいかに変容を余儀なくされ、漢文または中国語の口語からもたらされた語法が、近代においていかにして欧文脈の目から「選良」され、その受容がいかに深化していったかをみることができ。一字一句をゆるがせにしない、鋭い文章感覚の持ち主である谷崎の文体指標の持つ意味は、けっして作家個人の創作のみに止まらず、近代日本語の書き言葉の文体の成立を示す基準として

大きな意義を持つゆえんである。

参考文献

池上禎造『漢語研究の構想』、岩波書店、一九八四年。

石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』、弘文堂書房、一九四〇年。

泉井久之助『弁論と言語と日本語』、『言語の研究』、有信堂、一九五六年。

森岡健二『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』、明治書院、一九九九年。

山田孝雄『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』、宝文館、一九三五年。

山本正秀『近代文体發生の史的的研究』、岩波書店、一九六五年。

拙稿「日本語文体史資料としての中世禪宗仮名法語の研究—連体修飾節に用いられる「底(ノ)」を中心に—」平成十年度・十四年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)一一八『古典学の再構築』研究成果報告集VII『伝承と受容(日本)』(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)『古典学の再構築』総括班)、二〇〇三年三月、一二—二五頁。

拙稿「近世仮名法語と近代文学における「底(ノ)」について」、『Dynamis, VOL. 8』(京都大学人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座)、二〇〇四年十月、一六二—一七七頁。

拙稿「近世、近代における「的」の文体的考察」、『Dynamis, VOL. 10』(デュナミス編集委員会)、二〇〇六年十月、一三一—一五二頁。

日本語のレトリックとテキスト

甲田直美 NAOMI KODA



甲田直美（こうだ なおみ）
一九六九年、青森県に生まれる。博士（人間・環境学）。二〇〇〇年学位取得（京都大学）。日本学術振興会特別研究員、滋賀大学教育学部助教授、マサチューセッツ大学Amherst Schoolを経て、現在、東北大学大学院文学研究科准教授。専門は言語学。著書に「談話・テキストの展開のメカニズム」（二〇〇一年、風間書房）。

1. 日本語の「論理」

テキストの構成方法が各言語によって異なることはHinds（一九九七）、Kaplan（一九七二）をはじめとして広く指摘されている。この背景として、説明のレトリックやいわゆる「論理」形式論理の世界の論理ではなく、とよばれるものが、世界共通ではないという事情がある。世界で言葉が多様のように、説明の論理も多様である。

英語と日本語とのテキスト構成の相違、さらには科学論文における英語の重要性から、英語論文の書き方に関する書物は非常に多く出版されている。例えば物理学者のLeggett（一九六六）は日本人が英語の学術論文を作成する際の問題点について次のような主旨のことを述べている。

（１）日本語では、関連ある複数の考えを述べるのが良いとされているようであり、複数の思考を関連させながら本筋へ進む。一つのパラグラフ全体やあるいは論文全体を読んで初めて主張の内容が理解できるように構成されている（図１（Ａ））。

（２）これに対し、英語では、一つの考えと次の考えの連結は読む時点で明らかとなっていないければならず、個々の文はこれ

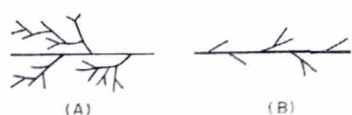


図１ レゲットの樹（Leggett 1966）
（Ａ）日本語の説明の流れ（遠巻き論法）と
（Ｂ）英語の説明の流れ（ずばり核心論法）
左から右へ話が進む様子。日本語では枝分かれが多く、話の本筋から遠のき、文章の羅列に見えてしまう。英語ではいくつかの枝だけを含む。枝の向きにも注意。

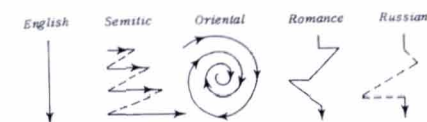


図２ 英語の線状性とアジアのうずまき型（Kaplan 1972）

までに書かれたことだけで完全に理解できるように構成されている。話がそれる場合、脱線が始まる時点で関係が明らかにならなければならない。日本語のように脇道の話を読み終わるときに主筋の話との関係が明らかになるのではない（図１（Ｂ））。

Kaplan（一九七二）は英語と他の諸言語とを対比している。パラグラフ構成において、英語では線状性が好まれ、他の言語では屈折を含むか、渦巻き状に議論が展開されることが図示されている（図２）。

「起承転結」をはじめとする日本語のテキストは、循環的論理構造で、読者依存型のテキスト理解である。日本語の「論理」に慣れていなければ、表現間の連結を読者

に委ねる構成の仕方は論理の心的飛躍と受け取られる。

このような言語教育における図示は、それぞれのテキストの印象を直感的にうまく捉えているように感じられる。また日本語の特徴を考える上でも興味を惹くものである。しかし実際に、この図示を裏付ける具体的なデータが示されているわけではない。以下では、テキストの構造についての実証的研究を紹介する。

2. テキストの構造

Kirsch（一九九八）は、テキスト中の個々の文の解析から、テキスト全体としての高次の意味（マクロ構造）にまとめ上げることをテキストの理解と考えている。読み手はテキストに基づいて、テキストから直接引き出された命題と、ローカルな一貫性を確立するのに必要な過程（例えば代名詞や指示の照応など）を経て得られた、テキストベースの理解像を持つ。さらに読み手はテキストを理解するために繰り返し重要箇所の選択、一般化、構造化というマクロ操作を行い、テキストの全体的な構造であるマクロ構造を頂上に持つ。

テキスト全体の理解像を得るとは、テク

（１）書かれた文章を指す。本稿では用語「テキスト」と「文章」を区別せずに用いる。「テキスト」は「談話」の基底にある抽象的理論的構造物であるとして区別する研究者（van Dijk）もある。

ストの個々の要素を統合し、構造化し再構成することである。この問題に対し、要約テキストの考察が、統合が構成されるプロセスの解明をもたらすと考えられている。テキストのマクロ構造はテキストの要約の直感的な概念として捉えられるからである。甲田・廣田（二〇〇六）では、段階的部分要約と全体要約との相関を得ることにより、ミクロ構造とマクロ構造構築の相関を考察している。我々は、情報が加わることに情報を統合し、構造化しながらテキストを理解していく。そして、加えられていく新しい情報間に関係を持たせ、より大きなテキスト全体の理解像へと発展させていく。要約の生成は、テキストを理解しながら読み手の中で意味ある情報へと情報を編成し、保持しやすい構造を持たせ、そして、その構造を要約テキストとして生成する過程である。

読解ストラテジーもまた、個々の文の入力から、テキストの全体像を得るに至るプロセスを知る手がかりの一つである。Koda（二〇〇二、二〇〇七）では、外国人の日本語習得過程における読解過程の解明、特に、異なる言語間、文化間、さらには日本語習熟度の違いにおける読解ストラテジーの解明を行った。どのような日本語のテキスト構造に外国人日本語学習者がつまづくのか、日本語の母語話者の読解過程との比較・調査を行った。談話・テキストの理解において読み手が、実際に明示されていない情報を付け加えながら、推論を行い、意味を統合して理解する過程は、母国語間、読解するテキストの言語によって

異なっていた。

3. テキスト研究の流れ

テキスト研究は、テキストの静的言語構造を対象とする研究と、テキストの理解のプロセスや理解に用いる記憶や注意などの認知能力を問う研究に大別される。前者はテキストそれ自体が研究の対象であり、後者はテキスト理解を通して観察・実証できる人間の理解過程が研究の対象となる。

テキストの局所的な一貫性は共指示や助詞、接続詞など言語的な明示要素によって強められ、局所的結束性が保証される。なかでも接続表現は、表現間の関係を書き手が明示的に示そうとして用いるものであり、ミクロ構造を構成する重要な手段である。筆者は一九九四年以来公表してきた接続表現についての論文をベースに、『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』（風間書房、二〇〇一年）として出版した。そこでは、これらの語類を二つの方向から考察した。一つは、文脈の整合性を結束性を担う語彙手段に求める言語的知識の研究であり、もう一つは、局所結束性を得るための推論や語用論的知識の研究である。

しかし、テキストの結束性を支える言語手段の分析によってテキストのミクロ構造が解明されつつあるのに比べれば、マクロ構造における言語手段の役割は相対的に小さいものである。マクロ構造には、読み手の推論や関心、背景知識などが複雑に入り込んでいるため、読み手側の要因、読み手

とテキストの相互作用を考慮に入れた読解のデータを得ずには考察が不可能である。単文の理解に増して、テキストの理解は、それを理解する人間の興味や関心、注意の向け方や背景知識等に大きく影響されるため、テキスト研究では、双方からの接近が期待される。しかし、テキストの特性は言語学を中心として、読み手側の特性は心理学等の分野で行われ、分野間の研究手法の違いから別個に論じられることが多かった。現在までの言語研究では、専ら言語の明示的表現内容に関してのみ目が向けられていた。これらの記述的な研究は、「理解された」文脈の中での解釈を前提としており、すでに成立した理解の中での言語的直観に頼っている。このため、どうテキスト理解が成立するのかの諸条件はまだ解明されていない。そこで筆者は、二〇〇一年以降、読み手側の特性に関する読解時間や理解、記憶を指標として分析を行ってきた。

4. 情報の更新と論証のタイプ

テキストの構造と共に、解明が待たれる課題の一つは、テキストが読み手へ及ぼす効果である。甲田（二〇〇六）では、テキストにおける論理構造の違いが既有的情報や信念にどのように影響するか、どのような論理構造が理解や学習が容易であり、効果的コミュニケーションにつながっているのかについて明らかにした。さらに、人々が持つ先行信念や論争的な問題に対する態度が、情報の更新にどのように影響するかを、理解、証拠の評価、事後の信念の変化

を用いて検討した。読解前後の信念差を対応のあるデータとして採取し、テキストの特性として論証方法が理解に影響を与えることを実証した。また、テキスト理解がどのような個人の特性と相関があるかを見極めるため、受容スタイルとの相関を調べた。

読了後、テキストの説得性について評価を求める項目で、実際の信念の変化とは別に、どちらの題材でも因果的説明の仕方が高く評価された。分析的読みと通常の読みでは異なる理解をしていた。これは、テキストを読んで説得性を分析する際の判断と読み手の受けた影響が一致していないことを表している。分析的に考えれば演繹的説明の仕方を高く評価するが、実際に読み手の気持ちが変わったのは帰納的説明の仕方であった。これまでの研究でアジア圏では帰納的説明が好まれる (Nisbett 二〇〇三) という文化社会心理学における見解について再考される余地がある。

5. テキストにおける言語差

テキストの読解は、単なる情報取りや情報の受け渡しに終わるものではなく、そのテキストに含まれる議論の構造や用いられている文連鎖の論理のステップの理解をも含むものである。もしテキストの読解や作成が単なる要点的把握・整理で済むならば、なぜ、外国人日本語学習者が日本語特有の「論理（あるいは文化圏内で論理と思われる疑似論理）」の理解に困難が生じ、議論や話の流れに説得力を感じない（非論理的と見なすか流れについていけない）の

かという問題に答えを与えることは出来ない。

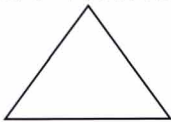
テキストで用いられる論証の仕方がどのように読み手の情報の更新に寄与するか、どのような説明方法や議論が効果的であるかは、各言語における「自然な」文連鎖への認識の違いに左右される。各言語使用者がもつ信念や情報が、どのような議論に説得されやすく、逆にどのような議論では信念や情報の更新が起らないか—テキストの読み手への効果—は、各文化圏や言語によって一様ではない (甲田二〇〇七d, e)。異なる言語間、異なる文化間においては、「自然な文連鎖」と考えられているものに違いがあり、各言語間ではテキスト構造の嗜好性も異なる。

このような言語間における違いは局所的構造においてもみられる。甲田・井上 (二〇〇一、二〇〇二) では、連文における因果関係の強さをレベル1～4の連続的に変化させた場合の理解や記憶への影響について、Myers et al. (一九八七) の問題点をふまえ、日本語に関して実験を行った。二文間の因果関係が強いほど読解時間は減少し記憶表象の形成も良いものとなった。レベル2、3のやや関連づけられた文の対において記憶がもっとも良かったという英語における結果は認められなかった。欧米における言語で蓄積されているデータからの知見は、必ずしも汎用的ではない。言語差のみならず、理解の仕方についても再考の必要がある。

6. テキスト理解の三要因

テキストの理解には、テキストの要因、読み手の要因、読み方要因 (甲田・天野二〇〇五) の三者が関わっている (甲田・印刷中)。テキストの要因としては、テキストのジャンル、長さ、難易度、話題等が、読み手の要因としては、読解のスキル、リーディングスパン、年齢、動機、文化的背景が存在する。読み方要因としては、読みの目的、制限時間の有無、読むことに伴って実行される課題 (後で質問に答える、考えを口に出しながら読む等) が存在する (図3)。本稿での読み方要因は、読解における推論生成の実験の遂行にあたっては van den Broek, Fletcher and Ridsen (一九九三) にあるように、読みの方向付け (指示、目

読み手：スキル、リーディングスパン、年齢、動機など



テキスト題材：ジャンル、長さ、難易度、話題など

読み方：目的、読解時間、課題の種類など

図3 テキストの理解を決定する三要因

標など)と読みを測るタスク(プロトコル、記憶量、質疑応答、語彙決定など)に区別することもできる。これらの要因が複雑に絡み合って読解に影響している。データの採取では、それぞれの要因のうち、どの要因が理解のどの側面に影響を与えているのか、読みの理解モデルについての全体的な見通しを得ていく必要がある。筆者はこれまで、テキストの特性に着目した言語学的分析と、読み手の読解プロセスを探る言語—心理学的分析の二方向から研究を進めてきた。どのようにテキスト理解が成立するのか、それぞれの要因の精査及び関連の研究が、今後も望まれる。

【参考文献】

- Hinds, J. (1997) Reader versus Writer Responsibility: A New Typology. *Writing Across Languages Analysis of L2 Text*.
- Kaplan, R. B. (1972) *The Anatomy of Rhetoric: Prolegomena to a Functional Theory of Rhetoric*. The Center for Curriculum Development, Inc.
- Kintsch, W. (1998) *Comprehension: A Paradigm for Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 甲田直美 (二〇〇一)『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房。
- 甲田直美・井上毅 (二〇〇一)「連文の理解過程における因果関係の強さの影響」『第65回日本心理学会発表論文集』 p.472.
- 甲田直美・井上毅 (二〇〇二)「連文の理解過程における関連性の強さと接続詞の効果」『第66回日本心理学会発表論文集』 p.817.
- Koda, N. (2003) The Interrelationship of Reading Comprehension Processes and Summary Protocols for JFL Learners./ 日本人学習者における読解過程と要約文の相関。Seiichi Makino (ed.) *The 11th Princeton Japanese Pedagogy Workshop Proceedings*, pp.87-91.
- 甲田直美・天野碧 (二〇〇五)「文章記憶の自由再生における分散効果の研究」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ 人文科学・社会科学』 54, pp.25-32.
- 甲田直美・廣田卓也 (二〇〇六)「説明的文章の要約作成と文章理解」『パイディア』 14, pp.127-134.
- 甲田直美 (二〇〇六)「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果」『日本心理学会第70回大会発表論文集』 p.961.
- Koda, N. (2007a) Balancing Contextual Effect with Processing Effort: Assessment of Relevance Theory. *Culture* 70-1/2, pp. 387-400.
- Koda, N. (2007b) Connective Interference and Facilitation: Do Connectives Really Facilitate the Understanding of Discourse? *The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University*, 56, pp.29-42.
- Koda, N. (2007c) Cultural Thought Patterns: A Case Study of Arabic and Japanese. Presented at International Symposium on Comparative Literature and Linguistics, ESCL: Egyptian Society of Comparative Literature, Egypt.
- 甲田直美他 (二〇〇七d)「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果—アラビア語母語話者の場合—」『日本心理学会第71回大会発表論文集』 p.181.
- 甲田直美他 (二〇〇七e)「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果—中国語母語話者の場合—」『日本教育心理学会第49回総会発表論文集』 p.600.
- 甲田直美 (印刷中)「テキスト理解の規定因—読み手の受容スタイルと論証パターンから—」『山梨正明教授還暦記念論文集』 ひつじ書房。
- Leggett, A. J. (1966) Notes on the Writing of Scientific English for Japanese Physicists, 『日本物理学会誌』 21, pp.790-805.
- Myers, J. L., Shinjo, M., & Duffy, S. A. (1987) Degree of Causal Relatedness and Memory. *Journal of Memory and Language* 26, pp.453-465.
- Nisbett, R. (2003) *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently... and Why*. Free Press.
- van den Broek, P., Fletcher, C. R. & Risden, K. (1993) Investigations of Inferential Processes in Reading: A Theoretical and Methodological Integration. *Discourse Processes*, 16, pp.169-180.

オーストラリアとタイにおける日本語の高等教育事情

チャワリー・サウェッタナン

CHAVALIN SVETANANT



Chavalin Svetanant (チャワリー・サウェッタナン)
タイ国出身。二〇〇三年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後
期課程修了。京都大学博士(人間・環境学)。タイ語と日本語の比
較研究を進める傍ら、タイ国チュラーロンコーン大学、続いてオ
ーストラリア国マッコーリー大学で日本語教育に当たる。

二〇〇六年国際交流基金海外日本語教育
機関調査によると、オーストラリアにおけ
る日本語学習者は三六万人にも達する大
きな規模になったが、そのうち九六%が
初中等教育における学習者であり、高等教
育、いわゆる大学における学習者は一万
人にも及ばなかった。一方、タイでは初等

式などが違っているということを断つてお
きたい。

まず、日本語教育におけるそれぞれの変
遷から調べよう。国際交流基金が提供した
日本語教育実施状況情報によると、次のよ
うな状況が記載されている。

教育における学習者は極めて少なく、そ
れより中等・高等教育段階における学習
者の増加が顕著であり、同じく二〇〇六
年において約七万人の日本語学習者のう
ち、高等教育における学習者数が二一、六
三七人、つまり三〇%以上も占めている。

このように、オーストラリアとタイでは、
日本語教育に関するそれぞれの背景や特徴
においても、学習者の目的や授業の在り方
などにおいても、様々な面で異なっている
のである。過去四年間近くタイの大学に日
本語教師として勤めていた経験と、現在
オーストラリアの大学で日本語を教えてい
る経験を踏まえて、オーストラリアとタイ
における日本語の高等教育の現状と課題に
ついて報告したい。

なお、本稿ではオーストラリアとタイに
おける日本語の高等教育を対象にして考察
するつもりであるが、それぞれの地域・教
育機関によって教育方針やその在り方・形

オーストラリアの日本語教育の端緒は、

連邦が樹立されて間もない一九一七年に開
設されたシドニー大学日本研究講座にある。
その翌年には、シドニー市内の公立男子校
フォート・ストリート高校でも日本語教育
が始められた。今日の隆盛の基礎となる取
組は、日豪の国交を途絶えさせてしまった
第二次世界大戦が終わり、通商協定が締結
(一九五七年)されてお互いが再び扉を開
いた後、オーストラリアの白豪主義が撤廃
され、双方の経済交流が活発化する七〇年
代以降、徐々に制度化されてきた。八七年、
現行の外国語教育の基礎となる国家政策が
始動した。

一方、タイにおける日本語教育の変遷は
以下の通りである。

戦後の本格的な日本語教育は、一九六〇
年代中頃、タマサート大学およびチュラー

ロンコーン大学に日本語講座が設けられ
たことによって始まり、大学(とくにバン
コクの総合大学)を中心に進んできた。一
九八〇年代になると、バンコクの総合大学
の卒業生の中から日本語教師になる者が増
え、徐々に他の総合大学へと日本語教育は
広まった。また、一九八一年には、後期中
等教育(高校)の第二外国語の一つ(八つ
の外国語から一つを選択)として正式に日
本語が加えられたことにより、中等教育段
階でも日本語教育が広まり始めた。一九八

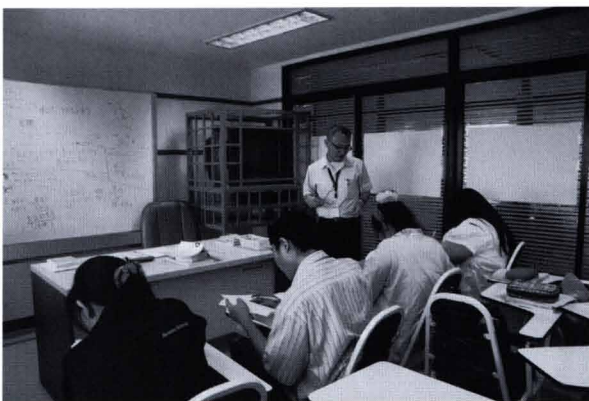


写真1 タイの大学での日本語教育風景(1)

(1) <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2006/australia.html>
国際交流基金ホームページ
(二〇〇八年六月現在)



写真2 タイの大学での日本語教育風景(2)

○年代後半から、高等教育では総合大学だけでなく、各地域にあるラチャパット大学(各地の教員養成大学から発展した地域密着型大学)でも日本語講座開設が増える一方、一九八〇年代後半には、タマサート大学、チェラーロンコーン大学に大学院が設置された。また、日本語を教える中等学校(主に後期課程)の増加も著しい²⁾。

それぞれの変遷の次に、現在クラスにおける学生数についても触れておこう。タイでは、語学のクラスに対して受け入れる学生数は、多くても二五名までとされる。特に日本語専攻をしている学生向けのクラスには、学生数が非常に限られ、一つのクラスにおいて平均一〇名から一五名までとされることが多い。また、少数人のクラスであるため、ほとんどの場合教師が学習者に



写真3 オーストラリアの大学での日本語教育風景(1)

文法や必要な項目を確認しながら一対一感覚で学習者と直接触れ合える演習のような形式が行われている。

しかし、オーストラリアにおける日本語のクラスはかなりオープンである。受け入れられる学生数を制限しないため、人気のあるクラスには学生が五〇人を超える場合もある。その結果、タイで行われるクラスと違って、大勢の学習者のためにまず講義形式で科目の内容や文法などを教え、その後ペアワークやグループワークなどのアクティビティーを導入して学習者を練習させることが多い。

それから、学習者自身の目的においてもかなり違いが見られる。オーストラリアでは、日本語を専攻とせず、むしろ会計学・経済学・工学などといった自分の専攻を補完するために勉強する学習者が多い。そ



写真4 オーストラリアの大学での日本語教育風景(2)

れに従って、大学で日本語を勉強する目的は、日本語を完璧にマスターするというよりも、将来自分のキャリアにとってある程度日本語によるコミュニケーションができるようになることである。また、オーストラリアの高等教育には、その目的を達成させるために、「ダブルデグリー」(Double Degree)という特別なプログラムが設置されている。すなわちある分野で学位を進めながら、その同時に別の分野の勉強もして一定期間に二つの学位を取得できる特有の履修形態である。日本語と一緒に組み合わせる人気のある専攻は、たとえば法学・商学・経済・ビジネスなどである。

それと反対に、大学におけるタイ人の学習者には上級レベルの日本語をマスターできるように、日本語を専攻して勉強する者が多いように思われる。勿論、経済学や会

(2) <http://www.jpl.go.jp/j/japanese/survey/country/2006/thailand.html>
国際交流基金ホームページ
(二〇〇八年六月現在)

計学などの専攻に併せて勉強するという学習者もいるが、「日本語」という専門知識を活かし、プロの通訳者、翻訳者、日系企業の正社員、または日本語教師や日本研究者を目指す学習者の方が多数である。

さて、ここで筆者の体験から学習者の特徴について少し触れておきたい。タイの大学生が、中学生や高校生のように見えるほど教師の言うことを疑問を持たず、受動的かつ素直に受け入れて何でも従うのに対して、多文化的なオーストラリアの大学生は主体性が強く、自分で論理を組み立てたり授業のやり方に対しても理屈や議論を求めたりすることが一般的である。また、成績によって起動されるモチベーション (motivation) は、タイ人の学習者の場合、何よりも評価の高いものであるのに対して、オーストラリアの学習者 (特に西洋系) の場合、関心が低く、希薄であるように思われる。

続いて、授業の在り方・形式について述べよう。オーストラリアでの日本語高等教育では、何と言っても学習者に実践的な日常コミュニケーション能力をつけさせるため、ビジネスにあまり必要とされない文学や言語学上の知識を与えるよりも、学習者の興味をかきたてながら会話・聴解・読解などといった様々な語学のスキルの面白いトピックを選んで、アクティビティー中心の日本語学習コースが行われている。さらに、日本に対する関心を広げるため、漫画・アニメ・ドラマなど世界中によく知られている日本のポップカルチャーも積極的に紹介されている。

ところが、タイにおける日本語の高等教育では、できる限り母語者並みに社会経済の状況に適応した生活や仕事ができ、また日本への進学のための知識を習得するため、学習者に上級レベルの日本語を要求し、また文学や言語学などの専門知識も強調されている。日本文化において現代文化のみならず、伝統的な文化に触れる機会も与えようとする姿勢である。実用的な会話やビジネスの授業も設けているが、ほとんどの授業では文法・作文・読解・文学史・文化史・翻訳などを中心として力を入れている。

また、勉学以外の日本語教育に関する国際交流についても異なった形式が行われている。すなわち、どちらの大学も日本に留学したいという在学中の学生を援助するプログラムを積極的に実行しているが、タイでは主に日本政府や日本の大学からの奨学金という形に基づいた支援をもらっている

のに対して、オーストラリアではほとんどの場合、単位互換制度または当大学からの補助金によって行われている。

ここで、筆者は最近オーストラリアの大学の引率として沖縄国際大学によって開催される日本語・日本文化研修プログラムに参加する機会を与えられたので、それについて少し記しておく。このプログラムは、沖縄国際大学の大きな協力を得て、毎年の夏に三週間ほど海と青空のきれいな沖縄で行われているが、今年は台湾の大学、韓国の大学、そしてオーストラリアの大学からの学生が合計三〇名参加した。その三週間の間には、レベル別の集中日本語コース以外にも、平和祈念資料館や勝連城跡・首里城など沖縄の名所を訪れて沖縄の歴史を勉強させたり、泡盛工場・エイサー芸能・お茶会・着物の着付け・書道など日本文化を体験させたりする計画も用意された。さ



写真5 沖縄国際大学での日本語・日本文化研修開講式

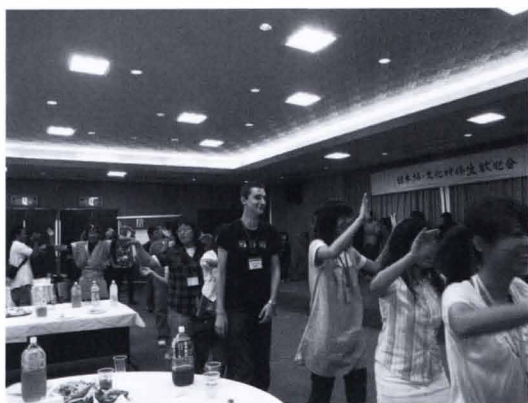


写真6 沖縄国際大学での日本語・日本文化研修生歓迎会

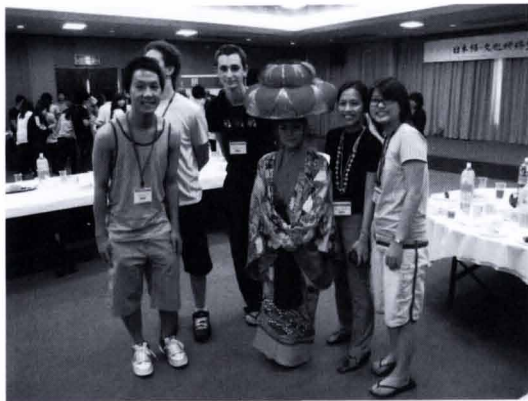


写真7 沖縄国際大学での日本語・日本文化研修生歓迎会

らに、特別研修プログラムとしてホームステイや小中学生との交流・沖縄のエコツーリズム体験などの課外活動も設けられて、日本語だけでなく、地元の歴史と伝統文化また日本人の本来の姿に触れる機会も提供され、引率の筆者にとっても研修生たちにとっても実に充実した三週間だった。

それでは、本題に戻って、最後に日本語・日本文化を教える側の教師の現状を見てみたい。オーストラリアでは、日本語を専攻とする学習者や大学院まで進学する学習者が非常に少ないことに併って、日本語教育に携わる人材もかなり不足しているようである。大学における日本語教育は、不思議なことに地元の卒業生よりも、非常勤講師を含めて英語ができる日本人の教師を採用することが多い。その上、オーストラリアでは「日本語学」というより「日本研究」・「アジア研究」という専門家の方が



写真8 特別研修プログラムの一環としてのエコツーリズム体験

圧倒的に豊富であり、たとえば地元の卒業生が教師になったとしても、日本文化や日本史など日本語教育を主としない科目を担当することが多い。

一方、タイでは、ここ数年会計学や工学などの専門と一緒に日本語を勉強したいという学習者が急激に増加したといえ、日本語を専攻してマスターしたいという学習者の状況も今までと変わらず維持されている。それゆえに、日本語のカリキュラムも盛んになって徐々に発展し、さらに日本の大学から言語学や日本語教育学の修士号・博士号を取得して帰国した地元の卒業生が大学の教員となつて、新しい専門知識やテキストを取り入れたり、様々な教授法

を実行したりすることによって、よりよい方向へと進んでいるように思われる。ただし、このような状況はバンコクの名門大学の日本語学科に限られ、残念なことではあるが給与面での官民格差が大きいこともあるため、特に地方の大学など多数の日本語教育機関で教師の不足が今もなお大きな問題となっている³⁾。

以上、筆者の、京都大学大学院人間・環境学研究科卒業後の経験を踏まえて考察したオーストラリアとタイにおける日本語の高等教育の事情である。

(3) 佐久間勝彦(一九九九)「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題——タイでの聞き取り調査結果を中心に——」世界の日本語教育第五号、国際基金日本語国際センター。

これからの日本語における

漢字のあり方

阿辻哲次 TETSUJI ATSUJI



阿辻哲次（あつじ てつじ）
京都大学大学院人間・環境学研究科教授、一九五一年大阪生まれ、
京都大学文学部助手、静岡大学人文学部講師、助教授、京都産業大
学外国学部助教授、京都大学教養部助教授、同総合人間学部助教
授を経て、現職。専門は中国文化史。主著に『漢字学―「説文解字」
の世界』（東海大学出版会、一九八五年）、『漢字の字源』（講談社、一
九九四年）などがある。

I 漢字の総数

大学のホームページにメールアドレスを掲載して、これまでに漢字に関する雑文をいくつか書いてきたからだろう、面識のない方から漢字に関する質問をメールでうけることがしばしばある。そんな質問のなかに、「私の漢和辞典には一万字くらいしか載っていないが、友人が買った少し大きな辞典には三万字も載っている。一万字では足りないのだろうか？」とか、「漢字の検定試験を受けたいが、いったいどれくらい漢字を覚えたらいいだろう？」という趣旨のものがあつた。

漢字はいったいいくつあるのか、その総数は、「日本語で使われる単語はいくつあるのか」という問いと同じように、永遠に正解を確定できない問題である。それはもちろん理由のあることで、漢字は現在まで一貫して表意文字として使われてきた。表意文字にはそれぞれの文字に固有の意味がある。それを逆に考えれば、それぞれの文字は特定の事物や概念を表すために作られたということになる。

私たちのまわりには事物や概念がいわば無限に存在する。それらの語彙を文字で書

く時に、表音文字ならたとえば「やま」とか「mountain」のように数十種の文字の組みあわせであらわすことができる。しかし表意文字では原則的に、それぞれの事物や概念を示す個別の文字を作るしか方法がなく、漢字はそれを「山」という形であらわした。語彙が無限にあるかぎり、漢字の数が時代とともに増えたのは、表意文字としての宿命であつた。

かくしてこれまでに膨大な量の漢字が作られてきた。一般的な漢和辞典に収められているのはだいたい一万字前後で、現実にはそれだけあれば充分なのだが、『大漢和辞典』には約五万字が収められているし、中国からはそれをしのぐ『漢語大字典』があり、さらに巻頭に「当今世界収漢字最多的字典」と大きく朱書した『中華字海』には、なんと八万を超える見出し字が収められているという。

しかしそのように膨大な量の漢字のすべてを、過去の中国人や日本人が実際に使いこなしてきたわけではない。漢字の総数とは、これまでに存在した漢字を通時代的に網羅した、いわばその和集合にすぎない。しかし実際にはそれらのほとんどは著述や記録に使われたことがなく、いつかの時代に編纂された字書の片隅に姿を現し、それ

ゆえに後代の字書に引き続いて収録されただけの、実際にはまったく使われない「死文字」なのである。漢字だけにかぎらず、すべての辞書・字書においては総収録語数の多さが、全体のできの良さと認識される傾向があつて、いきおい、新しく作られる字書は前代の字書に収録される文字をすべて取りこむのである。

漢字字書は世に存在するあらゆる漢字をすべて網羅するべきものである、との認識にたてば、字書はどのような「僻字（へきじ）」（めつたに使われない漢字）も当然収めなければならぬ。これまでになかの字書にたった一度しか姿を見せない漢字であつても、過去の文化遺産であることはまちがいないから、字書がそれを取りこむことに、まったく意義がないわけではない。

しかし誤解を恐れずにいえば、そんな意図で大量の漢字を収録して作られた字典を使いこなすのは至難の業であり、そこから自分に必要な漢字を探し出すだけでも、慣れていない人はたつぷり苦労させられるにちがいない。もちろん最近のものには便利な索引がついているから、漢字の検索自体はそれほど難しくはないだろう。しかし索引を駆使してようやく引きあてても、そこに記されている意味や用例、熟語の解釈が

正しいかどうかを検証しようとすれば、たちまち別の困難に直面する。そんな僻字の出典として引かれる文献は特殊なものであることが多く、かなりの量の漢籍を所蔵する大学か図書館でしか見ることができないものだ。そうすると、解釈の可否を検証するために原典にあたるという、考証的研究では当然必要な手順をふめないから、結局「孫引き」するしか手がなく、信憑性の面で大きな不安が残る。要するにこれらの大きな字書が必要とするのは、漢字に深くかわる専門家か、あるいは「鬼面人を驚かす」ことに強い興味を示す好事家くらいである、といっても過言ではないだろう。

とまれ、世間にはたくさん漢字を収めているのがあるいい字典であるという観念がある。その点で『大漢和辞典』や『漢語大字典』、『中華字海』などが社会で一定の評価を受けているのだが、しかし字書の良否をさめる基準は、収録字数の多寡にあるのではなく、実際に必要な字種と語彙をいかに過不足なく、かつ正しい解釈のもとに取りこんでいるか、という点にこそある。

大量の「死文字」を取りこんだ結果、字数がいたずらに多くなることは、漢字字書にとってむしろ欠陥ともなりうる事象であって、漢字字書では本来に必要な漢字だけを厳選して収め、それに対する的確な注解がどこまでいなければならない。それこそがよい漢字字書の条件なのである。

Ⅱ 漢字の規格

本来に必要な漢字を選び、それに適切な

処置をほどこすことは、字書だけにかぎった話ではなく、同時に、日常生活で使うべき漢字の目安を策定する過程においても要求される原則である。

いま私たちの目の前には、数万にも達する膨大な量の漢字が存在する。そして日本語がこれからも「漢字かな交じり文」で表記されるかぎり、私たちは毎日の生活において一定量の漢字と無縁では絶対にありえない。

だがそれでは、大量の漢字のうち、いまの一般的な日本人にとっていったいどれくらいの漢字が必要なのだろうか。それはもちろん個人の職業や環境、あるいは文化的な嗜好によってレベルが異なるが、他の事象と同じように、この領域においても、社会全体のコミュニケーションを円滑に機能させるために、標準的な規格が設けられるべきことはいまでもない。

戦後の国語改革の一環として、漢字制限の目的をもって定められた「当用漢字表」（千八百五十字を収める）が定められたのは一九四六年のこと、それが制限派と擁護派の激しい対立を経て、三十五年もの時間を経過したあと、一九八一年に「常用漢字表」（千九百四十五字）という形に「バージョンアップ」された。当用漢字から常用漢字への改訂に際しては、表に収められる収録字数が九十五字増加したが、そのことよりも、当用漢字が漢字制限であったのに対して、常用漢字では漢字使用の「目安」と規定されたことが、さらに大きな変革であった。

社会生活で使われる目安としての漢字規

格を策定するにあたって、まっさきにおこなわれるべきことは、本来に必要な漢字を、大量の漢字のなかから選び抜くことである。しかしこの「精選」というプロセスはまことに難しい。もしこの作業を委託された「漢字選定委員」が十人いたとしたら、おそらく十種類の異なった文字集合が作られることだろう。

しかし漢字を精選する原則はあくまでも、それぞれの漢字が現代日本でどのように使われているか、その現状を客観的かつ多角的データによって分析し、それに基づいて各字に対して重みづけをおこなう、というものでしかないだろう。分析のための資料として想定されるのは、近年に刊行された書籍や雑誌・新聞などでそれぞれの漢字がどれくらいの頻度数で使われているかという調査や、役所やマスコミが定期的におこなう各種のアンケートなどであって、精選作業はそれらに頼らざるを得ず、そうして選ばれる結果は、どうしても最大公約数でしかありえない。しかしそれは規格というもののもつ宿命である。

かつての「当用漢字表」や「常用漢字表」策定の段階でも、もちろん同様の認識があったにちがいない。しかしそれがどのようなものであったにせよ、二〇一〇年春を指して文化審議会国語専門部会が現在進めている「常用漢字表」改訂作業に関しては、過去の規格策定段階には存在しなかった大きな相違点がある。

それは、いまは電子機器を使って漢字がいつも簡単に書けるようになってきているというこで、この事実を看過して現在の常用

性の分析はありえない。

「常用漢字」が制定されたのはもう二十五年も前のことになる。時代がかわれば「常用」される文字に変化が起こるのは当然のことだ。いまでは「拉致」や「斬新」、「僧侶」、「俳諧」、「冥福」など表外字（常用漢字表に入っていない漢字）を含んだ多くの語彙が、新聞やニュースの字幕に使われているし、それに違和感を覚える人もほとんどいない。

いっぽう重さの単位をあらわす「匁」は常用漢字だが、いまだき買ひ物をするのに匁という単位を使う人はまずいない。「匁」や「劬」も常用漢字だが、「匁」は現実には「戸籍謄本」にしか使わない。「謄写版印刷」はすでに前世紀の遺物となっていて、それを「ガリ版」といいかえても、もはや学生諸君には通じない。「劬」も「弾劾裁判」くらいしか使われず、どちらも一般人が「常用」する漢字と考えるにはいささか無理があろう。

現行の常用漢字には、時代のずれによるこのような不具合がある。それだけでもこのあたりで「バージョンアップ」するべき理由となるが、さらにそんな時代の変化よりももっと大きな問題として、電子機器の普及によって生じた、既製の規格と現実との乖離がある。

かつて漢字は、タイプライターなどの機械では書けない文字であった。しかし情報科学分野を中心とするめざましい技術の発展によって、一九七〇年代末からは、コンピュータで多くの漢字を処理できるようになり、それがさらに、機械の高機能化と

低価格化とともに、驚くべき普及を果たした。

このような状況に対応して、通産省（当時）が中心になって、「情報交換用漢字符号系」（通称「JIS漢字規格」）が制定された。それははじめて作られたのは一九七八年、すなわち常用漢字が制定される三年前のことである。このJIS漢字規格によって、六千五百あまりもの漢字が機械で処理できるようになったが、その数は実に常用漢字の三倍強にあたる。

しかし常用漢字とJIS漢字はそれぞれ別の組織で策定され、おそらく別々の役割をになうものと考えられていたのだろう、制作段階で両者がすりあわされることはまったくなかった。極言すれば、いまの漢字をめぐる種々の問題はここからはじまったといえる。

当時の関係者は、まさかこれほど急激に、多くの人が機械で漢字かな交じり文の日本語を書く時代がやってくるとは思わなかったのだろう。しかしそんな認識とはうらはらに、現実には漢字を扱えるコンピュータがどんどんと小型低価格化し、社会の隅々にまで普及した。

さらに携帯電話の普及がそれに拍車をかけた。いまの大学では電子メールを使わないとまともな学生生活を送れないようなシステムになっているし、電車の中や街角で立ったまま電話をあやつってメールを

カタ—カワ

確	カタ	確定、確認、正確	
	たしか	確かだ、確かさ	
	たしかめる	確かめる	
獲	カタ	獲得、捕獲、漁獲高	
	える	獲る、獲物	++得る
嚇	カタ	威嚇	
穫	カタ	収穫	
学(學)	ガク	学習、科学、大学	
	まなぶ	学ぶ	
岳(嶽)	ガク	岳父、山岳	
	たけ	〇〇岳	
楽(樂)	ガク	楽隊、楽器、音楽	
	ラク	楽園、快楽、蘇楽	神楽(かぐら)
	たのしい	楽しい、楽しさ、楽しげだ	
	たのしむ	楽しむ	
額	ガク	額縁、金額、前額部	
	ひたい	額	
掛	かける	掛ける	++懸ける、架ける
	かかる	掛かる	++係る、懸かる、架かる
	かかり	掛	++係
渴	かた	干渴、〇〇渴	
括	カク	括弧、一括、包括	
活	カク	活動、活力、生活	
喝(喝)	カク	喝破、一喝、惡喝	
渴(渴)	カク	渴望、渴水	
	かわく	渴く、渴き	++乾く
割	カク	割愛、割拠、分割	
	わる	割る	
	わり	割がいい、割合、割に、五割	

ガイ—カク

慨(慨)	ガイ	慨嘆、憤慨、感慨	
該	ガイ	該当、該博、当該	
概(概)	ガイ	概念、大概、概して	
垣	かき	垣、垣根	
各	カク	各自、各機、各位	
	おのおの	各	「各々」とも書く。
角	カク	角度、三角、隅角	
	かど	角、街角、四つ角	
	つの	角、角笛	
拡(擴)	カク	拡大、拡張、拡声器	
革	カク	革新、改革、皮革	
	かわ	革、革靴	++皮
格	カク	格式、規格、性格	
	コウ	格子	
核	カク	核心、核反応、結核	
殼(殻)	カク	甲殻、地殻	
	から	殻、貝殻	
郭	カク	城郭、外郭、輪郭	
覺(覺)	カク	覚悟、知覚、発覚	
	おぼえる	覚える、覚え	
	さます	覚ます、目覚まし	
	さめる	覚める、目覚め	
較	カク	比較	
隔	カク	隔離、隔月、間隔	
	へだてる	隔てる、隔て	
	へだたる	隔たる、隔たり	
閤	カク	閤議、閤僚、内閣	

書いている人を見ると、ほんとうに「寸暇を惜しんで」という感じがする。電話で話をするのはおつくうだけれども、メールなら相手の状況を気にすることもなく、簡単にメッセージを伝えることができる。夫婦

げんかの仲直りを携帯電話のメールでおこなったという笑えぬ実話もあるくらいだ。

かくして、コンピュータを使って漢字かな交じり文の日本語を書くのがきわめて普通の行為になった。だれもそれを特別のこととは思えない。そこでは、常用漢字の三倍強もの漢字が気軽に使えるのだ。そして大多数の人は、自分が使っている漢字が常用漢字に入っているかいないかなどまったく意識しないし、そもそも常用漢字の存在すら知らない人の方が、世間には圧倒的に多い。そんな人々が、パソコンやケータイで、きわめて気軽に漢字を使って文章を書きまくっているのだ。

電子機器で日本語を書くようになってから、漢字をめぐる状況は大きく変化した。その最大の特徴は、難しい字形の漢字でも簡単な操作でたやすく書けるようになったことだ。もともと漢字は覚えにくく、書きにくい文字だった。それがいまでは「憂鬱」であれ「顰蹙」であれ「蹂躪」であれ「穿鑿」であれ「韜晦」であれ「鑿鑿」であれ、ことばさえ知っていれば、キーをいくつつか押すだけで簡単に画面に表示でき、ボタン一つできれいに印刷までできてしまう。

現代の日本人は、機械を筆記用具とするかぎり、漢字の書き取り能力も、書写能力の美醜も問われないことが当たり前になった。携帯電話のメールは、そもそも最初から、印刷されるということを想定すらしていないのである。

これは日本人が漢字を使うようになってからはじめて経験することなのだが、そんなことはまったく意識されず、議論の対象

にもならなかった。人々はこうして漢字に対する敷居の高さを克服することとなった。

だがいつでもどこでも身の回りにパソコンや携帯電話があるわけではないから、いかに文明が進展しようとも、いつの時代においても、文字を手で書くという行為は絶対になくならないし、それが文字文化の中で非常に重要な要素を構成することもまちがいない。どれほどコンピュータが進歩しても、文章の読み書きが国語力の基本であることはかわらないし、そのための基本教育がおろそかにされることは決して許されない。

現在の小学校では、学習指導要領によって六年間を通じて一〇〇六種類の漢字を学習することになっていて、それが学年別に配当されている。新しい常用漢字の制定に連動して、この教育漢字についても、いずれ字数の見直しや字種の入れ替えなどがおこなわれるのだろうか、しかし微細なちがいはともかくとして、小学校で学習する漢字は、いつの時代においても、手で書けないと社会生活に支障をきたす可能性が大きい基本的な文字群である。さらに「歳」や「井」、「鍋」、「廃」など、日常生活では頻繁に使われる漢字が教育漢字には入っていないから、小学校で学ぶ漢字だけ書ければ十分に用が足りるというわけでもない。だからこれからも、基本的な漢字はいつでも手で書けるように学習することが不可欠であって、学校から書き取りの試験がなくなる日は永遠にやってこない。

ただ手書きの時代には大きな労力を必要とした複雑な漢字が、いまは機械によって

簡単に書け、きれいに印刷までできるようになったことに対して、客観的事実としてはつきりと目をむける必要があるだろう。

これまでは必要な漢字をすべて手で書かねばならなかった。しかしこれからは、かならず手書きで書けなければならない一群の基本的な漢字群と、正しい読み方と使い方を把握さえできていれば、必ずしも手で正確に書けなくてもよい漢字群、というように、漢字全体を二層の構造にわけ、そのどちらをも常用漢字という枠で包括することを視野にいれるべきであろう。

今年は『源氏物語』が書かれて一千年になるらしく、テレビや雑誌がさかんにそのことを取りあげているが、『源氏物語』は日本語で書かれた最古の作品ではなく、それよりずっと前から日本語による記録は存在する。すなわち日本語は千年を優に超える記録の歴史をもっているわけで、それは世界でも屈指の、長い時間にわたって使われ続けている表記システムなのである。その日本語の表記において、いま史上空前の変化がおきている。それに連動して、二十五年以上も前に定められた漢字の規格が示す「常用性」が、時代に即応せず、大きくゆらぎはじめてきたのは当然である。

文字は文化の根幹に位置するものである。私たちを取り巻く文字の学習と記録環境がより便利で合理的なものになるように、漢字を含む文字文化全体に対して、各方面からの積極的な対応と提言を期待したいものだ。

環境税の二重の配当について

浅野耕太 KOTA ASANO



浅野 耕太（あさの こうた）
一九六二年高知県生まれ。京都大学農学部農林経済学科卒業。京都大学博士（経済学）。京都大学農学部助手、地球環境学、人間・環境学研究科助教授・准教授を経て、現在人間・環境学研究科教授。専門は環境経済学。近刊に「環境経済学講義」（有斐閣 共著）がある。

1. はじめに

環境を守ることとは、企業や家計の意思決定に環境配慮を組み込み、それら主体の行動に制約を課すことになるので、企業や家計の経済活動の集計である経済成長の阻害要因になるといわれることが多い。とりわけ環境を守るための強力な手段である環境税については、産業界や財界は国際競争力の低下につながる可能性を強調し、反対の合唱を行うことは、現在行われるようになってきた炭素税の議論に見られるように、ある種典型的な光景である。ポーター仮説^①や誘発的技術進歩仮説^②はそのような一種の言い訳の妥当性に疑問符を突きつけるものであるが、さらに一歩進んで、環境税を導入することが企業や家計のインセンティブ構造を変え、環境を良くするだけではなく、それ以外のメリット、二重の配当（double dividend）をもたらす可能性があり、そのことが常に国民が高い関心を寄せる税制改革上の論点としても見逃せないという議論が近年注目されている。

2. 二重の配当という考え方

二重の配当という考えは、環境にかかる外部不経済を補正するピグー税^③の収税をもっとうまく活用することができないかという疑問に一つの源がある。外部性として企業や家計の考慮に入らなかった環境影響について、それを税の形で値段をつけるというアイデアは斬新なものであった。意思決定の外部ではなく、内部に環境を取り込む手段として、外部性を税という形で可視化することによって、シグナルの役割を果たさせ、家計や企業のインセンティブをとおして、社会の厚生を高めるというこの考え方を提唱したそのひとこそ、新古典派経済学の大成者マーシャルの後継者としてケンブリッジ大学の教授職を継いだピグー



写真1 環境税の生みの親
ピグー（1877-1959）

であった。写真1 環境税の生みの親ピグー。彼にちなんで命名されたこのピグー税は環境影響に一種の値札をつけることで、この外部性の内部化の役割を果たすとともに、一定の収税をもたらす機能を持っている。

一方、公共政策の実現するために必要な財源の調達には、悪名高い人頭税を除くと、収税負担に加えて、死荷重と呼ばれる厚生損失をもたらすことが知られている。これは、税のない世界で最適な行動をとっていた企業や家計に財源調達のために税を課そうとすると、企業や家計の側に税負担を回避しうる可能性がある場合、税のない状態で最適な行動をとっていたにもかかわらず、税が課せられた途端、正しかったこれまでの行動を歪めてでも税を避けようというインセンティブが生じてしまい、最良の状態から乖離してしまう結果である。人頭税の場合、人間は自分の頭数を変えることができないことがポイントであり、同様に企業や家計は行動によって変えることのできないものに課される税を回避できず、それに付随して自己の行動を歪めるといことがないのである。すなわち、人頭税は厚生損失をもたらさないで、経済効率の観

① ハーバード・ビジネススクールのマイケル・ポーターの唱えたもので、環境規制の強化が技術進歩を促進し、規制遵守費用の相殺以上に、生産性を向上させ企業の国際競争力を高めようという仮説。日本の自動車排ガス規制がその実例に挙げられることが多い。

② 誘発的技術進歩仮説とは、生産要素の相対価格の変化の下で、価格の上昇した生産要素を節約するような技術進歩が起るとする仮説。七〇年代のオイルショックにおいて、実際に石油の投入を節約する技術進歩が起ったことが知られている。

円以上がかかるのである。(写真3 所得税の確定申告書)アメリカの賃金所得に関する実証結果では一〇〇ドルを新たに徴収するためには、一四〇ドルかかるという推計結果が得られている。すると一〇〇ドルに対しその四〇%にあたる四〇ドルが厚生損失になる勘定となる。全く非効率な話である。これこそが家計や企業の最適行動を税が攪乱することによってもたらされる死荷重である。もし、いまだここに余った財源があ

そうすると国民に求める公共政策を実施するための財源調達には、厚生損失を伴う税を活用する必要がある。わかりやすくいうと、財源を一〇〇円調達するために、人頭税であれば実際の徴税費用を無視すると社会の負担は一〇〇円しかからないが、厚生損失を伴う消費税、所得税、法人税によって同じ金額を調達するためには一〇〇

点からは望ましい。しかし、残念なことに歴史に試されてきた税負担の根拠とされる自然な原則である能力説や利益説のいずれによつても人頭税を合理化することは難しい。世界各地に人頭税を呪う遺物が残されていることから、現実にはこの税は適用の極めて難しいものであることが傍証されよう。〈写真2 宮古島の人頭税石〉

写真3 所得税の確定申告書

「1629年から旨里王府の支配を受けた宮古の悲惨な歴史を伝える遺跡の一つ。悪名高い税制は、15歳から50歳まで、この石を越える背丈となった者に男性は粟、女性には宮古上布の納付が義務付けられた。容赦ない苛税は、明治36年まで島民を苦しめた。」
宮古島市のHPから写真とともに抜粋

(3) アダム・スミスに端を発し、ビグナムに受け継がれた考え方で、税を負担する能力がある人が払うべきという考え方。

(4) アダム・スミスからヴィイクセルやリンファンデルに受け継がれた考え方で、税によってもたらされた公共政策によって利益を受ける人がその対価として払うべきという考え方。

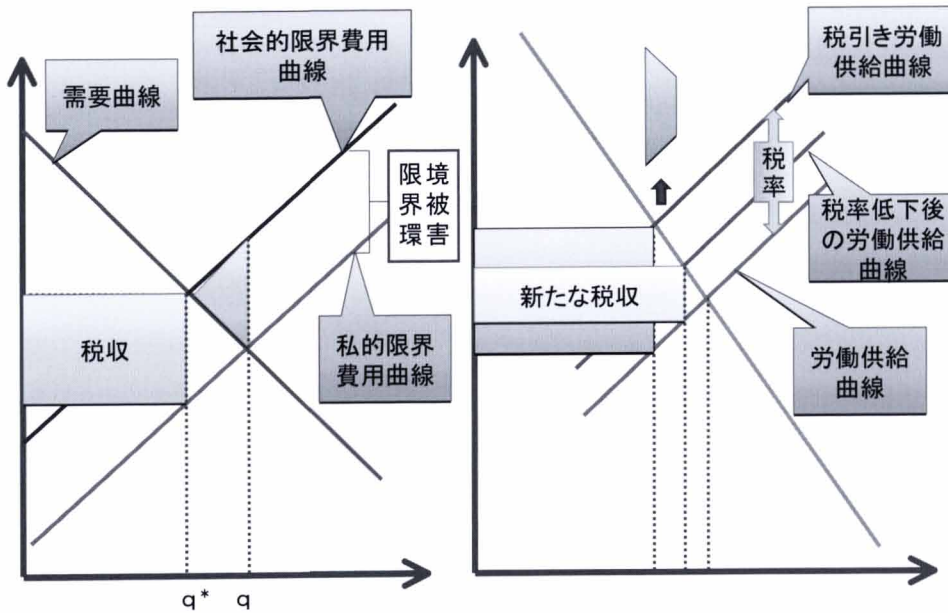


図1 環境被害を与える財の市場と労働市場

失を伴う税の削減に使えるのではないかと考えられるようになってきた。

3. 二重の配当論の根拠

これまで言葉で説明してきた二重の配当を図で確認しておくことは理解を深める助けになる。図1には、生産過程において周辺地域に環境被害を与える財の市場と

一般の労働市場を図示した。ともに縦軸は価格であり、横軸はその財の数量あるいは、雇用量である。財の生産が周辺地域に環境被害を与えていることは、その財の供給曲線となる企業の私的限界費用曲線が社会的限界費用と乖離していることで表現されている。この両曲線の高さの差が、追加的に生産を増やしたときに周辺地域に環境被害がどの程度及ぼされるかを示す限界環境被害を表している。ピグー税

は、この限界環境被害を税として課すことによって、私的限界費用曲線と社会的限界費用曲線の乖離をなくし、そこに存在していた外部性を内部化し、社会的に最適な状態を実現しようとするものである。このとき、環境被害を考慮すると過大であった財の量が q から q^* に減少し、経済全体で社会厚生がピグー税がなかった場合より三角形の面積分大きくなり、このとき消費者余剰と生産者余剰から環境被害を差し引きした経済余剰が最大化されている。これを確かめることは読者の宿題としよう。このとき、同時に四角形の面積分だけ税収が確保されている。

次に労働市場に目を転じよう。政府は福祉の向上を目指し公共政策を実施するために一定の税収が必要である。こ

れを労働市場での課税でまかなおうとすると図中の税率を労働者に課す必要があり、そのときの税収は四角形の面積となる。既に説明したように人頭税以外の税は厚生損失をもたらす。この場合、労働に税が課されることによって、同じ賃金でも手取りが減ることになり、働くことよりむしろ、余暇を楽しむことが以前より魅力的になってしまふ。ここでもほとんどの最適行動が攪乱されることになる。そのときに生じる厚生損失、すなわち死荷重は図中の税収の右の三角形で示されている。ここで先ほどのピグー税の税収を思い出そう。この税収があれば、四角形の面積の一部を削減することがができる。ここでピグー税の税収と労働市場におけるより低い税率で上げた税収によって、元の税収を表す四角形の面積と等しい必要財源をちょうどまかなうことができる。図の台形の面積分だけ死荷重を減少させることができる。ここにふたつの配当の姿が明らかになった。環境税を課し、その税収を厚生損失を伴う税の税率の削減に活用できれば、環境被害を与える財市場での三角形の面積分の第一の配当とともに、労働市場において台形の面積分、厚生損失を削減するという第二の配当が得られるのである。環境税のこのふたつ目の作用を税収還流効果 (revenue-recycling effect) と呼ぶ。

4. 二重の配当論への挑戦

一石二鳥を具体化したかのような環境税のこの働きについて、当初の熱狂を冷ます

かのように、一九九四年の Bovenberg and de Mooij 論文をはじめ、これまで説明してきた二重の配当の存在を疑問視する論文がいくつか主要学会誌に掲載されてきた。その背景には、これまで見てきた二重の配当論が各市場間の相互依存関係を無視していることと、最適物品税のルールと二重の配当論が直感的に矛盾しているように感じられることがあった。

前者から説明すると、これまでの議論は環境被害を与える市場での価格上昇が他市場へ波及する影響を考慮に入れていない。例えば、日本で近年盛んに議論が行われている地球温暖化対策としての炭素税が実施されると、課税対象の物品価格は軒並み上昇する可能性が高い。確かに、環境被害を与える財の市場が小さく、またそれが他市場と独立していれば、他市場への波及を考慮する必要なくこれまでの議論で十分である。しかし、財の市場が小さければ、財源調達に足しにはならないし、いま関心を集めている環境税は化石燃料など経済の血液ともいべき財をターゲットにしている。そこで、他市場との相互依存も緊密であろう。一般に、市場はそれぞれ相互依存の関係にあり、財間の代替関係・補完関係に⁽⁵⁾応じて、ある市場の価格変化は他市場に影響を及ぼしていく。

いま仮に、環境被害を与える財と余暇とが代替関係にあるとする。すると、環境被害を与える財の価格の上昇は、余暇をより魅力的にすることになるので、一日の時間制約のもとで結果として労働供給を減少させることになる。すなわち、労働供給曲線

は左にシフトする。こうなると問題が生じる。このときピグー税による価格上昇によって、労働市場では厚生損失をもたらす税の死荷重は一層大きくなっているのである。図2はそのことを示している。ピグー税によって、環境被害を伴う財の価格が上昇すると、(その財を価値基準財として)労働の実質賃金が低下したとみなすこともできるので、図においてはシフトした労働供給曲線を実質賃金低下後労働供給曲線と呼んでいる。一目瞭然に、労働供給曲線のシフトに伴って、厚生損失は台形の面積分拡大している。環境税のこの第三の作用を税相互効果 (tax interaction effect) という。この効果が大きいと先の二重の配当を考慮しても、環境税の導入が全体の社会厚生をさげる可能性がある主張されているのである。

このことを一方で強く示唆する

のが、最適物品税のルールである。ある税収を確保するための最善の方法は先に応じた人頭税であるが、これが現実に使えず、物品税を使わざるを得ないという次善の状態においては、税を逃れ、ほかに振り替えられる可能性が高い財、すなわち価格弾力性が高い財よりも、それが低い財に課税するほうが死荷重は少なく済みますことができることが知られている。このことは図3に図示されている。ここでも同様に縦軸に価格、横軸に数量をとって、財の需要曲線が

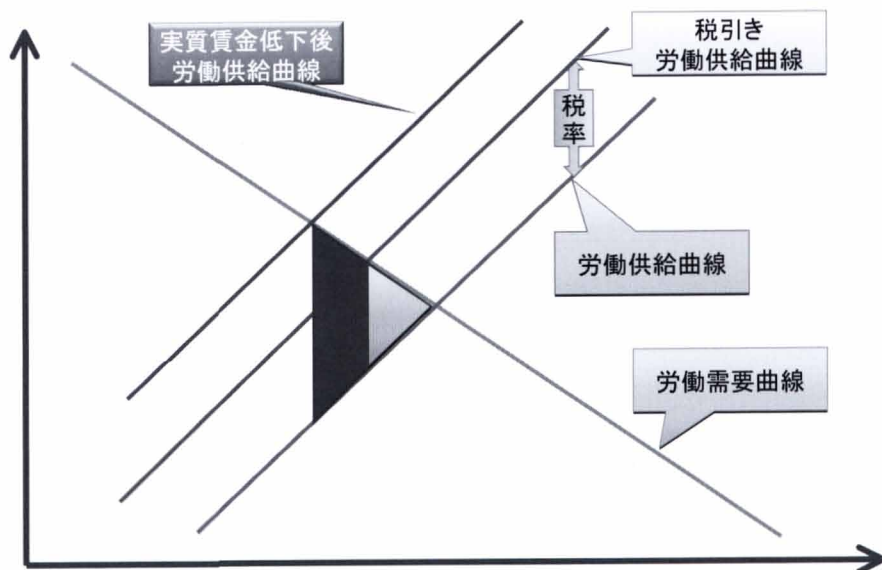


図2 余暇が魅力的になった状態の労働市場

図示されている。左側のフラットな需要曲線は価格弾力性が高い財、右側が低い財である。同じ税率で比較すると、図からも明らかのように、右側の方が、税収は大きく、厚生損失を表す三角形の面積は小さくなるのである。⁽⁶⁾このことは価格弾力性が大きい財ほど税により大きく攪乱され、最適行動からの乖離が大きくなることから直感どおりである。一般に財の集計範囲が広くなればなるほどその財についての需要の価格弾力性は小さくなる。このことは、価格

(5) 身近な例を挙げると、食後のコーヒーと紅茶は代替関係にあり、コーヒーと砂糖は補完関係にあることが多い。代替関係にある財どうしで、どちらかの財の価格が上昇すると、もうひとつの財の需要は増加する(需要曲線は右にシフトする)。補完関係の場合は、逆に減少する(需要曲線は左にシフトする)。(6) 図3では、単純化のために当該財の供給の価格弾力性が無限のケースを考えている。

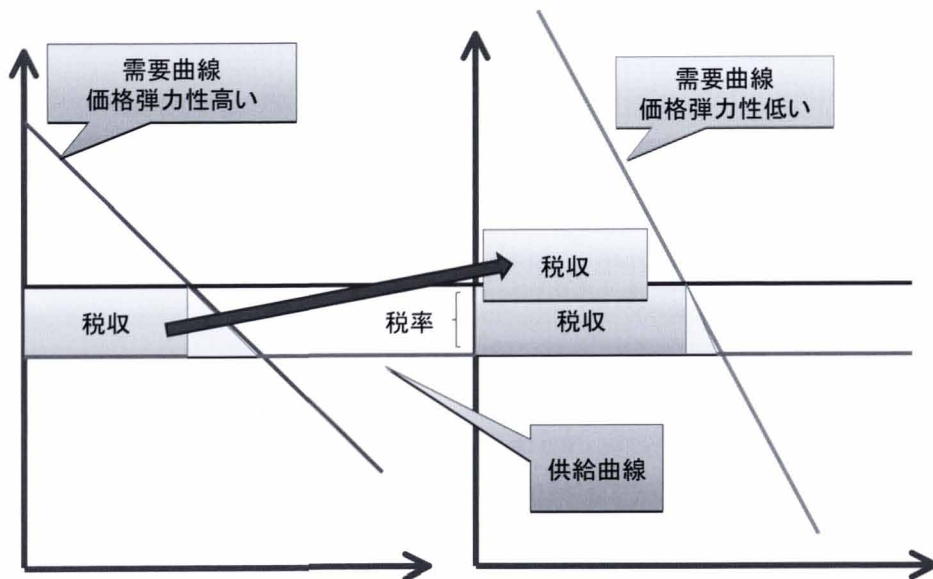


図3 需要の価格弾力性と死荷重



写真4 夭逝した天才 ラムゼー (1903-1930)

りやすくなるのである。そのため、環境税以上に、税収還流効果が期待できない他の政策手段においても対象となる市場の他市場への波及影響が結果として重要になってしまっている。このことは経済の一部分に集中していた従来の議論では全く抜け落ちてい

と矛盾するように感じられていたのである。〈写真4 夭逝した天才 ラムゼー〉このことから二重の配当は経済全体を考えたときに本当にプラスなのかどうか問われているのである。

5. 二重の配当論の意義

この二重の配当論の現状をどう解釈すればいいであろうか。現在も様々な前提の下で二重の配当論の検討が進み、成立や不成立の様々な条件が明らかになっている。今の議論からいえることは、環境税の可能性を十分に生かすためには、環境税には三つの作用があり、それぞれの分配上の影響も異なることから、その帰着を定量的に捉え、実証的に議論を進める必要があるということ

である。

このことも関連し、環境税の二重の配当の議論は、環境保全のための政策手段選択にも新たな光をあてることになる。それは次のようなことである。環境被害を与える財の市場で、環境税以外の政策手段をとって、例えば、直接規制や自主規制などで図1の q が達成されたとなると、需要曲線の形状から、この財の価格上昇は回避である。するとこの財と余暇が代替関係にあるという想定が変わらなければ、やはり図2において労働供給曲線の左シフトが起こり、厚生損失は一層拡大する。これは環境税の場合の税相互効果に当たる作用である。ここで問題になるのは、この場合、環境税の場合と異なり、税収が調達できないので、税収還流効果は存在しないということである。すると、これらの政策手段の下では、環境は良くなったが、生活はぐっと貧しくなったということが、税の場合よりもずっと起こりやすくなるのである。そのため、環境税以上に、税収還流効果が期待できない他の政策手段においても対象となる市場の他市場への波及影響が結果として重要になってしまっている。このことは経済の一部分に集中していた従来の議論では全く抜け落ちてい

変化が食料全体とある特定の食品に起こったときのそれぞれのケースを考えてみれば容易に理解できよう。

ケンブリッジ大学の哲学者兼経済学者のラムゼーによってこのルールは確立された。環境税が税の徴収を助けるという二重の配当論は、本来環境税よりも回避がより困難な課税ベースの広い労働所得への課税が好ましいはずとするこの最適物品税のルール

た視点である。常に環境保全のための政策手段が経済全体にどのような帰着をもたらすかの事前の検討が必要ということである。同様のことは排出権取引においても、初期の排出権を無償提供する場合には税収還流効果が存在しないので、同じ議論が当てはまる。

また、一部のシミュレーション研究を除けば、議論の多くは静学的枠組みで行われている。そのため、誘発的技術進歩仮説やポーター仮説がもとと対象とし、厳密な証明は難しそうであるが、現実にはその吟味が待たれる、動学的な効率性の視点からの考察はまだ不十分である。今後はこの方面での研究が一層進むことを期待したい。

【文献】

- Boyerberg, A.L. and R.A. de Mooij (1994) "Environmental Levies and Distortionary Taxation," *American Economic Review*, Vol. 84, pp. 1085-1089.
- Parry, I.W.H. and W.E. Oates (2000) "Policy Analysis in the Presence of Distorting Taxes," *Journal of Policy Analysis and Management*, Vol. 19, pp. 603-613.



コラム「お国の食べ物」 ブルガリアはヨーグルトだけではない！ ティナ・ベネヴァ（人間・環境学研究所 修士生）

日本でヨーグルト菌と力強い相撲力士がよく知られているブルガリアは、ヨーロッパでは美味しいワイン生産地としても有名である。

私は、物心がついたときから、実家でワインを造ったり飲んだりしていた。大学生になつてパーティーに行くようになって、初めて店で買ったワインを味わった。そのとき、「どうしようもないワインだ！」と不思議に思ってしまった。貧乏な大学生が安いワインしか買えなかったかもしれないが、そもそも自家製のワインの味はユニークでブランドワインとは比較しにくいものだ。

ぶどう園の手入れをすることは、決してワインを飲むより簡単でも愉快でもなく、ロマンチックとも言えない。ブルガリアには「ぶどう園の手入れをしたことがない人はワインの本格的な味がわからない」という諺がある。

父親は、出身地の北ブルガリアに五〇〇平方メートルのぶどう園を持ち、毎年ワインを造る。四月上旬に、ぶどうの枝を刈り、根元に盛土をし、色々な手入れが始まる。ぶどうが成熟するには、葉っぱが大きくなると定期的に刈ることが必要になる。ぶどうは太陽が当たると、乾燥して甘くなり、雨の多い年は甘くなくてみずみずしくなる。毎年、父は太陽と雨のバランスがよくなることを願う。

夏のきつい仕事は、一〇月上旬ごろに始まるぶどう狩りの時期になると報いられる。人手がいるので、私の家族は全員集まつて手作業で収穫する。ぶどう園に着いたら、父に質の一番いいぶどうを嫌になるほど食べさせられる。取ったぶどうをビニール袋や木箱に入れ、家まで運ぶ。弟と父がぶどう絞りを行い、ぶどう汁を樽に入れ発酵させる。二三月にワインが出来上がり、父の好みでクリスマスになつてから飲むことにする。

四季のあるブルガリアには、ワインと飲酒に関わる原則が山ほどある。例えば、赤ワインは「寒く感じる月」、つまり九月から四月までの間だけ飲み、他の月は白ワインにふける。赤ワインはいつも室温で飲む。でも、飲食が好きなブルガリア人にとって一番大事にしている原則は「ワインはいつも食事と！」と「乾杯はアルコールのみ！」である。

筋肉同士の助け合い

神崎素樹

MOTOKI KOUZAKI



神崎素樹（こうざき もとき）

1970年、佐賀県生まれ。1999年、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。東京大学博士（学術）。東京大学大学院総合文化研究科助手を経て、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門分野は、神経生理学。

「協働筋」という解剖学用語は知らなくとも、ふとももは複数の筋によって構成されていることはたぶんご承知でしょう。ふとももに限らず、ふくらはぎ、二の腕、腹筋、背筋などもそうである。協働筋とは、その字のごとく協力して働く筋の集合のことである。たとえば、ふとももの前側にある筋群は大腿四頭筋と呼ばれている。四つの筋によって構成されていることは予想に易い。四つの筋は最終的には一つにまとまり腱を介して膝下の骨に付着している。ちょうど一房のバナナのような形をしている（図1）。膝関節をまたいでいるから、大腿四頭筋が活動すると膝が伸展する。ボールを蹴るように膝を伸ばしたり、椅子から立ち

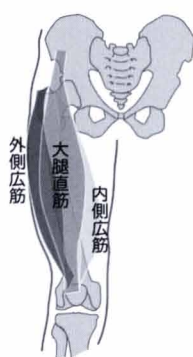


図1 大腿四頭筋。外側広筋、大腿直筋、内側広筋、およびその深層にある中間広筋によって構成されている。

上がるときにふとももの前側を触るとこれらの筋が働いていることが実感できる。大腿四頭筋は、大腿直筋、外側広筋、内側広筋、その深層部にある中間広筋のことであり、これらが膝伸展の協働筋というわけだ。一つの関節運動を起こすためになぜ複数の筋が必要か？との疑問はそれほど重要ではない。テントを張るときに一本のロープではなく、数本のロープを様々な方向に固定すれば、テントはより安定する。それと同様に、関節の回転運動を安定させるためには、違うベクトルを持つ複数の筋の存在は必然的であるからだ。協働筋が自由度を持ちつつ、関節の安定性を高めるといふ力学的意義については容易に理解できる。協働筋の存在や機能について、これ以上の議論は不要のようである。現に、二足歩行ロボットはアクチュエーターがヒトの筋肉に相当するが、協働筋の変数が無くともヒトの動きを立派に再現することができる。協働筋は、関節運動の力学的安定や限られた容積の中に筋を小分けに納めるだけの存在にすぎないのである。協働筋の存在意義はその程度のことなのだろうか？もっと重要な意義があるに違いない、と考えるようになったのは次に示す一見奇妙な現象を偶然発見してからである。

椅子位で膝伸展運動を疲労困憊まで行う。

その時に膝伸展の協働筋個々から筋電図を取得する（図2）。協働筋それぞれの筋電図の時系列は一樣に増加し続ける。ある筋は活動せず、または、ある筋のみが活動するという戦略はとらない。筋疲労が生じた場合も、協働筋すべてが活動し続ける。これは、疲労により低下した筋収縮能力を補うため協働筋すべてが活動水準を高めた結果である。ところが、最大に力を発揮できる出力の二・五％という極めて低強度運動を長時間（この場合一時間）行ってみる。すると、図3に示しているように、協働筋個々は、活動と休息を繰り返す。よく観察してみよう。ある筋が活動すると他の筋は休息する。あたかも、協働筋内で相談しながら休息を取り合うようなストラテジーを示すのである。まさに、筋肉同士の助け合いである。この現象を発見した十数年前の興奮が今も鮮明な記憶として残っている。発見というと聞こえはよいが、実験機器の取り扱いを熟知していなかった当時大学院生であった私のオシロスコープ操作ミスが偶然このような現象を生み出したのである。オシロスコープのゲインを四分の一に設定ミスをしたために、二・五％という半端な数字となったわけだ。驚くことに二・五％よりも少しでも運動強度が高かったり、低かったりすると、この不随意的な奇妙な現象は発現しないから、本当に偶然である。そして、この奇妙な現象こそ自分が人生をかけてもいい問題だとインスピレーションを感じ、協働筋の不随意的な筋肉同士の助け合いについてのメカニズムとその意義を研究しようと決心し、今に至っている。



図2 椅子位にて膝関節伸展を行う様子。外側広筋、大腿直筋、内側広筋に筋電図の電極を装着し、それぞれの電気的活動を導出する。なお、中間広筋は深層部にあるため取得不可能である。

（1）筋肉の微少な電気信号を誘導・記録したもの。筋肉は電気的信号が力学的出力に変換されることにより力を発揮するから、筋への電気的活動を反映する筋電図の振幅の大小は筋の活動レベルを表す。

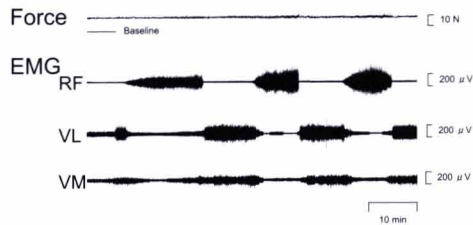


図3 2.5%強度の膝関節伸展を1時間行ったときの発揮張力 (Force) と大腿直筋 (RF)、外側広筋 (VL)、内側広筋 (VM) の筋電図 (EMG)。

私は小さい頃からビートルズを聞き続けてきた。ビートルズは四人の個性的な青年により結成され、そのリーダー的存在である

特殊な条件下であるが、協働筋に筋肉同士の助け合いが存在することは解った。仮説もなければ、バックグラウンドも無い。メカニズムを探る手がかりがないのだ。とにかくありとあらゆる人のデータを取った。生理学の実験結果には個体差が存在するから、その差からなにかヒントが得られるばよい。のべー〇〇を超えるデータを眺めると、筋肉同士の助け合いがうまくいく人とそうでない人が見えてきた。最終出力である張力の変動が、どうも両者で異なるのである。前者は、発揮張力の変動の振幅は大きくかつ周期的であったのが (図4の赤色矢印)、筋の活動が移行すると、振幅が小さくカオス的な振る舞いをする (図4の青色の矢印)。後者はそのような変化はみられずとも張力の変動が小さい。大集団のデータを概観すると、どうも張力変動の大きな振幅の発現と消失が関連しそうである。張力変動は最終出力変数であるから、その背後にあるメカニズムの追求にはほど遠い。

ジョンレノンがグループを統制し数々の名曲を生み出した。しかし、彼がリーダーを放棄するとグループとしての活動が衰退し、ついには解散したのである。大腿四頭筋も四つの筋の集合であるが、このビートルズに例えたようにリーダー的な筋は存在するとは考えられないだろうか? 「自由度の削減」という運動制御の観点からいえば、ある筋が四つの筋の変化を効率よく制御することは理にかなっている。さて、協働筋内の筋肉同士の助け合いをコントロールしている筋を特定するために協働筋それぞれに振動刺激を与える。ピンポイントでマッサージすると考えればよい。振動刺激を与えると上述した張力変動の周期的成分の起源を活性化することができると、大腿直筋に刺激を与えた場合、これまで筋肉同士の助け合いが上手く機能しなかった者も筋活動のバトンタッチが見事に達成できるようになった。そもそも助け合いができていた者は、その頻度がきわめて多くなった。ところが、他の筋 (外側広筋や内側広筋) にこれを適応しても、筋肉同士の助け合いには影響を与えなかった。すなわち、大腿直筋が協働筋の筋肉同士の助け合いをコントロールしていることが解った。複数の人間が行動をとるとき、それぞれがバラバラに行動しては上手く機能しない。やはりリーダー的人物の存在が必要である。一見奇妙な現象は筋肉にも協働筋全体をモニターしコントロールする筋が存在することを意味している。冗長な人の行動を制御する神経系は莫大な自由度を持たなければならぬが、協働筋内のリーダーの

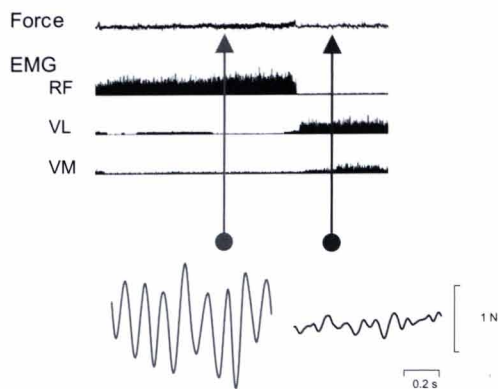


図4 筋肉同士の助け合い近傍の発揮張力の変動と協働筋の筋活動。

存在は、その自由度を軽減するという意義がある。筋肉同士の助け合いには個体差がきわめて大きいことを述べたが、この差は、筋疲労の軽減に関連することも解ってきた。筋疲労という生理学においても筋肉同士の助け合いは合目的に機能するのだ。これまで、特殊条件下における奇妙な現象について述べてきた。この現象のメカニズムや意義なりが明らかになったとしてもはたして世の中に役に立つのであろうか? 答えは限りなくノーである。それを追いつめている私は研究者として失格であろう。有名な登山家は、なぜ (危険を冒してまで) 山に登るのか? の質問に、「そこに山があるから」と答えた。なぜ役にも立たないことを研究するのか? の問いに、私もこう答えるだろう。「そこに一見奇妙で興味深い現象があるから」と。サイエンティストもそれでいいのでないか。

総人・人環での私の 哲学研究

戸田剛文

TAKEFUMI TODA



戸田剛文（とだ たけふみ）

1973年、奈良県生まれ。1993年京都大学総合人間学部入学、2005年京都大学大学院人間・環境学研究科修了（人間・環境学博士）。現在、同准教授。専門は哲学。主要著作は『パークリ―観念論・科学・常識』（法政大学出版局、2007年）、『知を愛する者と疑う心』（佐藤義之・安部浩と共編著、見洋書房、2008年）、（翻訳）パークリ『ハイラスとフィロナスの三つの対話』（岩波文庫、2008年）。

これまでの研究

私は、平成五年に、本学に最も新しい学部として総合人間学部ができたときに入学してきた。その後、人間・環境学研究科に進学し、助手を経て、現職として現在もここに籍を置いている。つまり、大学入学以来、ずっとここで学び続けていることになる。私は哲学を専門としている。一番新しい学部で、一番古いと言ってもいいような分野に携わっているわけで、自分としては、それもなかなか面白いことだと思っている。そして、この哲学を研究していく上で、ここに籍を置いていたことは、私にとってとても幸運なことだった。それは、哲学という学問のもつ性格によるところのものも大きい。（その点は、また後で述べる。）

哲学という学問を一言で説明することは難しい。テーマが特に限定されているわけでもなく、研究方法も人によってさまざまだからだ。だから、現代では、たんに「哲学」という言葉ではなく、科学哲学だとか、言語哲学だとか、倫理学、あるいは、認識論とか存在論とかいうように、自分の研究カテゴリーを説明することが普通かもしれない。そういったカテゴリーで言うと、私が学生、教員を経て、これまで研究してきたことを言い表すならば、「認識論」あるいは「近代イギリス経験論」とか言ったことになるだろう。（ここで使っている「あるいは」という言葉は排他的なものではない。）特に、アイルランドの哲学者、ジョージ・パークリの思想の解明を中心に行ってきた。パークリという哲学者は、「観念論」という立場を主張した哲学者として知られている。そしてそれは、世界のあらゆるものは、心と、心の中に存在するものでしかないという考え方だ。少し違う言い方をすると、われわれが見たり触ったりできるさまざまなものは、神が私たちの心の中に生み出した「観念」だというものである。この映画『マトリックス』を思わせる世界観を提示したために、彼の哲学は、彼の存命時から大いなる批判にさらされ続けた。その理由を極めて簡単に言うならば、彼の哲学は私たちの常識的な信念とあまりにもかけ離れているということである。だが、面白いことに、彼は、彼自身こそが常識の擁護

者だと考えていたのだ。そしてそういった彼の思想に見られる「もつれ」を解きほぐし、私なりの説明を加えることが、私のこれまで行ってきた主な作業である。

ときどき、日本の哲学者は、自分で哲学をしないで、哲学者の思想を研究する（やや非難をこめて）言われることがある。哲学者の思想を研究するということは間違っていないのだが、自分で哲学をしないというのは間違っている。先ほどのパークリを研究する場合でも、彼の理論の中で、当時の科学的なものの考え方、宗教的なものの考え方、常識的なものの考え方がどのように絡み合っているのかを考える必要があるし、彼より前の時代が彼に与えた影響なども考慮に入れなければならない。そして、そういったいろいろなものの連関は、当然、今の時代でもあるのだし、われわれの時代を考える上でも大きな手がかりを与えてくれる。また逆に、誰かの思想を「解釈する」ということは、解釈するものが持つ、ある種のフィルターが介在し、自分自身の世界観・価値観と解釈はどうしても切り離せない。つまり、こちらがそもそも哲学をしていないと、解釈すらおぼつかないということになる。また、時代や文化が現代のわれわれとは異なる過去の哲学者の著作を読むことは、それらの違いがどのような変化を生み出すのか、あるいは生み出さないのかといったことを考えるヒントにもなるだろう。こういった研究が、この世界で生きる人間の人間性（そういったものがそもそもあるのかどうかも含めて）の理解に役立つのではないかと、私は考えている。

ハイラスとフィロナスの 三つの対話

パークリ著

戸田剛文訳



「ねえ、ハイラス」経験論者パークリを代弁するフィロナスは論戦を挑むハイラスに向きあう。知覚の原因物質が外界に存在することを否定し

一切は心の中の観念とする（非物質主義哲学）をいかに世間に納得させるか。『人知原理論』『視覚新論』と三大名著をなす対話篇は英文学史に残る名文で書かれた。1713年刊、絶好の哲学入門書。



青618-2
岩波文庫

ハイラスとフィロナスの三つの対話

与えてくれる哲学者は、まだまだいる。今は、パークリの少し後に出てきたトマス・リーランドというスコットランドの哲学者に注目している。彼は、パークリ以上に常識ということとして知られており、むしろ、そのために長らくあま

書いたようなことから理解していただけると思う。もちろん、一度にいろんな分野に手をつけるわけでも、つけられるわけでもない。ただ、理系・文系を問わず、いろいろな人々が周りにいる環境であり、学生にしても自然科学から文学まで、さまざまな専門の学生が授業に出てきてくれており、いろいろな意見と言ってくれる環境は、とても有意義だと思う。

最後に、過去の哲学書を見てみると、当時は知名度もあり、それなりに名前が出てくるにもかかわらず、ほとんど現代では研究されていない哲学者もかなりいる。また、日本の哲学受容はわりとアンバランスところもあり、海外ではよく研究されているが、日本ではほとんど研究されていないという哲学者なども多い。（たとえば、デイヴィッド・ハートリやジョン・ノリスなどは前者であり、リードやパークリは比較的后者に近い。）文化としての哲学のすそ野をさらに広げるためにも、そういった哲学者や哲学書の紹介も積極的にしていきたいと思う。もともと天の邪鬼なところがあるので、特にそういう哲学者に出会うとむずむずするのだが、歴史の審判によって明暗を分けることになった哲学者たちのいづれをも検討し、その明暗を決定した原因を探ることは、われわれの知の営みを理解する上でも役立つことと思う^①。

今後の課題

今言ったような、パークリについての研究は、昨年末から出版という形で公開している。少し宣伝めいた感じになるが、二〇〇七年末に、パークリ哲学の全体像を論じた『パークリ——観念論・科学・常識』を法政大学出版局から、パークリ自身の著作である対話形式の哲学書『ハイラスとフィロナスの三つの対話』の翻訳を岩波文庫として出版した。特に後者の方は、パークリ自身の哲学に限らず、哲学の入門書としてラッセルなどお勧めの本なので、哲学に関心のある方はぜひ一読ねがいたい。

今後の予定としては、やはり、科学や常識がどのような関係にあり、われわれがそれらとどのように付き合っていくのかということを考えていきたい。そういった問題を考えるにあたって、興味深いヒントを

この文章の最初で、私は自分が籍を置いていた学部・研究科にいたことが私にとって幸運なことだったと書いた。それは、今

① この文章を書く機会を与えていただいたから、この雑誌のバックナンバーをばらばらと見ていると、二二号のインタビューで、総長の尾池先生が地震を研究対象にされるようになった経緯について話しておられた。尾池先生がその道にすまれたのには、天の邪鬼精神が一段落ついていたようである。なんだかうれしかったので、ここに記させていただく。

文明化のペシミズム

道旗泰三

TAIZO MICHIHATA



道旗泰三（みちはた たいぞう）

1949年大阪生まれ。京都大学大学院文学研究科ドイツ語・ドイツ文学専攻修士課程修了。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は、ドイツ文学・思想。著書『ベンヤミン解説』（白水社）。最近はフロイト翻訳全集（岩波書店）なども手がけている。

いずれさほど遠くないうちに、われわれの文明は地球的規模で決定的な崩壊にいたるだろうといった暗澹たる思いは、日々のとりとめないお喋りと気晴らしに繰り返して掻き消されながらも、いつのまにやら、われわれの日常にこびりついて離れない通奏低音になりきってしまったような気がする。われわれは、人類全体がどこかある破滅の奈落に向かって流れてゆくを知っているがゆえに、つかのまの生を気散じと饒舌で埋め尽くそうとしているのかもしれない。ベケットの描くあの仮借ない終末のヴィジョン、陰鬱な人類崩壊のイメージが、いささか倒錯的な滑稽さと甘美さをもしつつ、今さらのごとく迫ってくる。死に遅



「メエルシュトレームに吞まれて」(H・クラーク画)
『ポオ全集2』(東京創元社)より

れた者たちの分裂病的モノローグ、ドラマ缶（棺）と砂穴（墓穴）から打ち出される無意味きわまる饒舌の一斉射撃、来るはずのないものをなお待ち望み、すでに来ているものを受け入れられない死に損ないたちの果てることなき暇つぶし、地下の核シェルターのごときでの出口なき密室劇、外は一切が死に絶えたいちめんの鉛色、世界と人間の無意味性と無根拠性……

人類が延々と築いてきた文明は、さしずめ、ポオの描くあのメエルシュトレームの大渦、ないしはそれに引き込まれたちっぽけな漁船のようなものかもしれない。黒々とそそり立つ底なしの漏斗の内側の壁面に危うげにひっかかり、めくるめく回転しながら、刻一刻、逃れようもなく虚無の淵へと引き寄せられてゆくよるべき船のイメージ。ポオはこのカラストロフの渦の中心を、まるで絶滅の快ないしは別世界への希望でもあるかのように、さんと月光の降り注ぐ、雄大な虹のかかる底なしとして描いた。月の光は深い淵のどん底まで照らし出しているように見えました。だが、そこには濃い霧がすべてのものを立ちこめ

ているので、まだなんにもはっきりと見わけられません。そしてこの霧の上に雄大な虹がかかっているのです」。

とはいえ、文明のただなかにいるわれわれとしては、虚無からのこうした甘美な誘いにうっとり身をまかせているわけにはいかない。ポオの主人公の漁師にしてもそうである。彼は、小さな円筒形の物体が落下してゆく速度が遅いことを見てとるや、己れの身体を水樽に縛りつけ、船を見捨てて、ひとり海中へと身をおどらせる。そして、恐怖のあまり忽ちにして白髪の老人となり果てながら、危機一髪、渦が鎮まるまでの時間稼ぎに成功するのである。われわれもまた、成功するかどうかは別にして、身体を縛りつけるこの水樽のごときものを、どこかに探し当てねばならないのかもしれない。

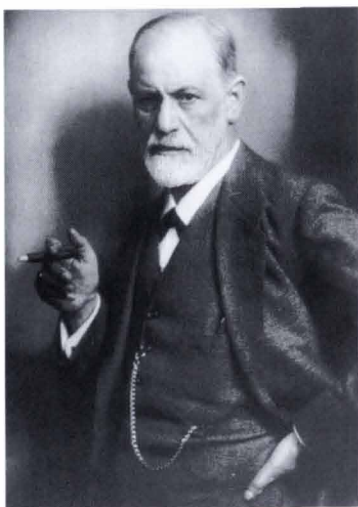
ポオのアレゴリーを引き継ぎつつ、以下ここでいくつか紹介的に取り上げてみたいのは、そのような類いの大渦と救いの水樽にまつわる思考の具体的ありようである。人類の文明化なるものを、進歩ならぬ退歩、衰退、崩壊、虚無への大渦としてとらえ、いわばペシミスティックな没落史観にとらわれつつも、ぎりぎりのところで救難用の水樽を探し当てようと思案した者たちは、太古以来数多い。やや恣意的ではあるが、ここではとりあえず、二十世紀のこの種の系列の代表ともいえるフロイト、アドルノ、ベンヤミンに照準を合わせ、そのペシミスティックな文明観とその乗り越えの試みのほんの核心だけでも切り取ってみたいと思う。彼らそれぞれの診断と処方箋

——それらはどこかでひとつにつながっている——が、今のわれわれにとってそのまま有効とはいえないにせよ、もしかして、新たな思考を紡ぐためのわずかばかりの刺激にでもなれば、という思いからである。

フロイト

精神分析の創始者フロイトにとって、文明を自己崩壊へと引きずり込むメエルシュトレエムの渦とは、さしずめ、人間の生物学的欲動の衰退と変質というゆゆしき事態であった。

よく知られているように、晩年のフロイトは、人間のもっとも基本的な欲動を、生をどこまでも拡大せんとする「生の欲動（エロース）」と、いつもこれと融合しながら、生の緊張と喧騒を忌避し、これを破壊して生以前の無機物の状態へと戻ろうとする「死の欲動」の二つに分け、生命現象なるものを生と死のこの二つの欲動のあいだの緊張に満ちた角逐ないし均衡として解釈した。もともと内に向けられた自己破壊の欲動である「死の欲動」は、「エロース」



フロイト (M・エヴァンス撮影)
Peter Gay "Freud – a life for our time"
(W.W. Norton & C.) より

によって外に振り向けられ、外界に対する破壊欲動となつて、生存闘争のための必然的暴力として「生の欲動」に奉仕させられる。これが生物としての人間の生のありようであるが、この生の均衡が文明化の過程のなかでとどめようなく崩れてゆくというのがフロイトの文明論の大枠である。

思い切つて図式化すればこうなる。文明はまず、「エロース」の代表格としての性欲動を飼ひならすことから始まり、この見境を知らない性欲動の発現を、生殖へと限定し抑えこむとともに、昇華を通してこれを思考活動や社会的労働に振り向ける。こうした性欲動の抑圧と昇華は、一方でそれ自体が文明病としての神経症を増大させる結果をもたらしとともに、その弱体化が「死の欲動」の破壊的エネルギーを相対的に増大させることになる。文明は、共同体の秩序や倫理の保持のために、この増大する破壊欲動を、法や道徳を通して強圧的に禁圧しなければならぬが、外に向けられた破壊欲動がこうして禁止されると、それは反転して、自己懲罰欲動ないし「超自我」として個々人の内面に蓄積されてゆく。「超自我」とは、フロイトに言わせれば、

「死の欲動」の集積場であつて、過度に道徳的になつて自我を監視し、自我が共同体に対して悪をなせば、あるいはなそうとしただけで、これをサディスティックに攻撃し、死にまで追い詰めてゆく文明の装置にほかならない。閉じた系のうちでやらエントロピーが増大してゆくように、文明化のなかで破壊的な「死の

欲動」が不可避免的に膨れ上がり、人間自身を責め苛む。フロイトにとって文明化とは、神経症と罪責感をいやましに増大させる自滅の渦巻き以外の何ものでもない。——とすると、この場合、水樽はどこに求められるのか。

十九世紀の実証主義的唯物論が骨の髄まで染み込んだ筋金入りの科学的啓蒙主義者としてのフロイトが打ち出す処方箋はこうなる。「人類の宿命的課題は、攻撃欲動ないし自己破壊欲動による共同生活の妨害を、文明の発展によつて阻止できるのかということに尽きているようである。……われわれが期待するのは、(天上の二つの力)の片割れである永遠のエロースが、同じく不死身であるこの宿敵と互角に張り合えるよう、精いっぱい頑張ってくれることである」と。これは、およそ処方箋などと呼べるものではないかもしれないが、人間の無意識的欲動の抑圧を問題視し、罪責感にまみれた神経症者の消滅した文明を遠望した治療者フロイトの偽らざる心情であることもまちがいないところである。フロイトが人間の無意識を探索したのは、ひとえにこの無意識の蠢きを、文明化したエロースとしての意識によつて押さえ込み、支配しようとするためにすぎないと、その偏頗な暴力性がしばしばあげつらわれたりもする。しかし、これもつまるところ彼のペシミスティックな文明観の裏返しにすぎないと感得すれば、これとはちがった、ぎりぎりの選択の前に佇むフロイトの顔つきもまた、おのずと見えてこようというものである。



アドルノ (S・モーゼス撮影)
ローレンツ・イエーガー著
『アドルノ—政治的伝記』(岩波書店)より

によって外なる自然を支配し、恫喝によって内なる自然(肉体、欲動)を支配し、そして詭計によって社会共同体を支配するための道具としての啓蒙理性。

アドルノは、啓蒙

アドルノ

『啓蒙の弁証法』(ホルクハイマーと共著)をものしたアドルノにとってもまた、太古よりの人類の文明史は、虚無・野蛮へと落ち込んでゆくメエルシュトレエムの渦にはかならなかった。

ここで正面切って問題視されるのは、言うまでもなく人間の啓蒙理性そのものである。二十世紀になって最高の知的段階に達したかと思えた文明が、原爆や絶滅収容所に象徴されるように、なぜその反対の野蛮に転化したのか、「人類はなぜ、啓蒙理性を通して、真に人間的な状態に入ってゆく代わりに、新しい野蛮状態に入ってしまったのか」。アドルノに言わせれば、啓蒙が野蛮に転落したのは、啓蒙理性のちよつとした過ちなどではなくて、そのそもその本質に起因している。すなわち、啓蒙理性は、もとより世界との宥和的關係を築くためのものなどではなく、古来、もっぱら世界を支配するための装置(道具的理性)として作用してきたということである。計算

理性によるこうした支配関係樹立のさまを、『オデュッセイア』におけるオデュッセウスの智謀、わけでもセイレーンの誘惑をやり過ぐす策略のなかに象徴的に読み取った。神話の怪物セイレーンの歌声は、聞く者を、死なない自我喪失へと誘う自然の快樂の約束である。これに対して文明の道は、この快樂を断念したうえでの労働と服従の道であり、被支配者たる船の漕ぎ手たちは、この歌声を聞かないよう耳に蠟をつめ、自らの自然的欲動を断念して、ひたすら漕ぐことに専念しなければならない。他方、他者を労働させる支配者たるオデュッセウスは、この自然の快樂を味わうことはできず、自らの身体を帆柱に縛りつけさせたうえでこのことである。セイレーンたちの歌はこれにより毒気を抜かれ、いわゆる「芸術」に墮してしまふとともに、彼女たち自身、神話的生命を断たれて消滅せざるをえない。つまり、文明のなかでは、智謀としての啓蒙理性を通して、自然支配(怪物討伐)と自己支配(快樂と労働の統御)と他者支配(主奴關係の成立)が同時進行してゆくということである。奴隷はくびきに

ながれたまま欲動を枯渇させ、主人もまた、薄められた快樂のなかで自ら退化してゆく。「とどまるところを知らない進歩のたらず呪いは、とどまるところを知らない退歩にほかならない」。——これが、いくらかフロイトと通じ合うところをもったアドルノのペシミスティックな文明観の大筋であるが、では、このメエルシュトレエムの渦を切り抜けるための水樽は何に求められるのか。当然ながらアドルノは、フロイトのように意識ないし自我を強化し自律させる方向には向かわない。求められるのはむしろ逆に、「退行」であり、「退行」を通しての啓蒙理性の自動運動の停止である。それは、主客の距離を冷ややかに広げてゆくことを本質とする自閉的な思考とは反対に、この距離を小さくして事物と絡み合せてゆく呪術的、ミメーシス的思考であり、それを通じての思考の自己批判ないし反省ということである。「精神が、自らの本質が支配にあることを自ら認め、自然としての自らのうちに立ち戻ろうとする謙虚さをもつことによって、精神を自然へと隷属させていた支配への要求は精神から消失するはずである」。これが具体的にどこまで有効かはさておき、アドルノが、芸術的ともいえるこうした感性的(美的)思考のありようのうちに、荒れ狂う啓蒙理性の大渦を抜け出してゆく隘路を見出そうとしていたことは、われわれにとっても一考の余地のあるところであらう。

ベンヤミン

フロイトやアドルノの診断が、欲動の変質にせよ啓蒙理性にせよ、むしろ人間の内側からなされたとすれば、ベンヤミンのそれは、同じような問題圏をめぐりつつも、どちらかというところ、事物、すなわちモノ（自然）やコト（歴史）の側に立ってなされる。事物から温かみが消えてゆくというのが彼の基本感情であった。「もしも自然に言語が授けられたなら、すべての自然は嘆きはじめるであろう——これはひとつの形而上学的真理である」。

ベンヤミンにとつてのメルシュトレエムの渦とは、事物が死滅し瓦礫化してゆくという存在論的事態でもある。彼の好む神学的比喩を使えば、人類のこれまでの文明



ベンヤミン (G・フロイント撮影)
H. Puttnies / G. Smith
"Benjaminiana" (Anabas Verlag) より

化は、楽園追放以後の漸進的な墮落のプロセスにほかならず、事物は、衰退、没落の途上にあつて、いわずに破壊の瀑布をめぐり流れて落ちてゆく。十七世紀のドイツバロックは、彼の目には、事物が、啓蒙主義的思考の進展のなかで、宗教的浄化（救済としての彼岸）の可能性を奪われ、まさにたんなる無意味な素材、人間のたんなる気晴らしのための素材と墮しはじめた時代と映っていたし、ヨーロッパ十九世紀の産業資本主義の勃興期は、あらゆる事物が、千篇一律の商品化の永劫回帰のなかで交換価値からのみ切り取られて、ますますその根源から引き離され、ニヒリスティックな様相を強めてゆく時代として映っていた。よく知られたベンヤミンの「歴史の天使」の過去を見据える眼差しに飛び込んでくるのは、いちめんの破局、うず高く積み上がった瓦礫の山である。天使は、楽園から吹きつけてくる嵐にあおられ、翼を閉じることもできぬまま後ろ向きに未来（大渦の中心）へと吹き飛ばされてゆく。「われわれが進歩と呼んでいるもの、それがこの嵐なのだ」。

ならば、ベンヤミンにとつてあの救いの水樽はどこにあるのか。ひとことでは言えませんが、それは、この進歩（文明化）の嵐のなかで死滅し廃墟化したモノとコトを、その外側から見た別の視線のもとに新たに甦らせること、瓦礫からいわばこれまでなかった新しい意味を発散させるということになる。後ろ向きに吹き飛ばされてゆく天使の希いも、「瓦礫にとどまって、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せ集めて組

み立てること」とされている。歴史にもし、楽園への方向づけをもった真にポジティブな部分があるとすれば、その輪郭は、進歩のなかでもっとも死滅したネガティブなものを極限において反転的に蘇生させることによってしか現れ出ることはない。ベンヤミンは、この蘇生の方法を「文化史的弁証法」と称し、バロック論からパサージュ論にいたるまで、自らの思考の核心に置いた。最後にこの「文化史的弁証法」についての彼自身の言葉を引用して、このささやかな筆すさびの結びとしておこう。

「どの時代にも、いわゆる〈実り多く〉〈未来に満ち〉〈生き生きした〉〈ポジティブな〉部分と、虚しく、滞り、死滅した部分がある。……しかしじつはほんとうに価値があるのはネガのほうであつて、これを下地としてはじめて、真に生き生きしたポジティブなものシルエツトが浮かび上がる。それゆえ、決定的に重要なのは、この排除されたネガティブな部分にあらためて分割をほどこし、視角をずらすことで、もって、このネガティブな部分のなかにも、先のポジティブなものとは異なったポジティブなものが現れ出るようにすることである。これを無限に続けると、ついには、過去全体が、歴史的復興^{アドヴァンスマン}を遂げたかたちで、現在へともたらされることになろう」。

フロンティア ■ リチウム二次電池と地球温暖化問題 ■ 福塚友和

TOMOKAZU FUKUTSUKA

環境問題が地球規模で議論されるようになり様々な対策が検討されています。特に地球温暖化が大きな問題であります。日本の取り組みでは、京都で気候変動枠組条約第三回締約国会議（いわゆるCOP3）を開催し、温室効果ガス排出の削減目的を定めた京都議定書が採択され、また、二〇〇七年には安倍前総理がクールアース五〇という京都議定書後の取り組みを発表するなど世界をリードする役割を担っています。

このような温暖化を引き起こす温室効果ガスの中に二酸化炭素があります。二酸化炭素は化石燃料を燃焼すると必ず発生するものです。日本では化石燃料による発電が多いことやガソリンエンジン自動車が高い普及率であることで、化石燃料が二酸化炭素排出源として多くの割合を占めています。すなわち、地球温暖化対策としての二酸化炭素排出抑制にはエネルギー源の転換や省エネルギーなどエネルギー関連技術の発展が必要です。

エネルギー分野で日本が果たしてきた役割は非常に大きく、これまで世界をリードしてきました。身の回りに目を向けると、近年めざましい発展を遂げているノートパソコンや携帯電話に搭載されているリチウムイオン電池は日本で最もアクティブな研究が行われています。また、水素をエネルギー源とした燃料電池も活発な研究開発が行われています。これらの電池の自動車用電源への搭載が盛んに行われています。先日、経済産業省が発表した「Cool Earth — エネルギー革新技術計画」では「重点的に

取り組むべきエネルギー革新技術（二一）にプラグインハイブリッド自動車・電気自動車と燃料電池自動車を選ばれています。プラグインハイブリッド自動車・電気自動車はリチウム二次電池などの充電電池を電源として用いるもので、燃料電池自動車とともに、二酸化炭素の排出量をガソリンエンジン自動車と比べて三分の一程度に減らすことが可能です。

ここでリチウム二次電池について簡単に紹介します。現在市販されているリチウム二次電池はプラス極にリチウムを含有した金属酸化物が、マイナス極には黒鉛などの炭素材料が使われています。リチウムイオンが溶解した有機電解液を用いており、充電時はリチウムイオンがプラス極からマイナス極に電解液を通過して移動するという単純な反応で進行します。放電時はその逆の反応が起こります。この過程で電池から外部へ電気が流れます。このとき興味深い現象として、電池内にはリチウム金属そのものは含まれておらず、正常動作時は生成しません。そのため、このようなリチウム二次電池は商品名としてよく知られているリチウムイオン電池と呼ばれています。

リチウム二次電池を自動車用途に用いるには、例えば発進時に大電流を取り出せることが要求されます。また、充電を短時間で終えることも要求されます。すなわち短時間で大きな電流量を流すことに対応します。これまで、この高出入力化という観点から、新規材料の開発、現行材料の高性能化、電池構成技術の向上など、材料側



プラズマ化学気相析出装置の中の様子。明るいところがプラズマで下に設置してある金属板に炭素薄膜を析出させる。



福塚友和（ふくつかともかず）
一九七五年大阪府生まれ。二〇〇〇年九月京都大学大学院工学研究科退学。同一〇月姫路工業大学（現兵庫県立大学）助手。二〇〇五年三月京都大学博士（工学）取得。二〇〇七年一月京都大学大学院人間・環境学研究科助教。専門分野は電気化学、炭素材料化学。

からの多くの研究が行われてきました。一方、私たちは、材料毎に特性に違いがあるが、本質的にはリチウムイオンの移動に大きく影響する共通の因子があるはずであるという考えから研究を行ってきました。私は主にマイナスイオンである炭素材料と電解液の間でのリチウムイオンの移動について研究を行ってきました。そのための材料としてプラズマ化学気相析出法という手法を用いて炭素薄膜を作製し、リチウムイオン電池のマイナスイオン移動モデル材料として研究を行ってきました（図）。このようにして得られる薄膜電極を用いて、電極／電解質界面でのリチウムイオン移動を電気化学的に調べた結果、移動に伴う活性化障壁（電極と電解質の間をリチウムイオンが移動するのに越えなければいけないエネルギーの大きさ）が電解質の違いにより異なることなどを発見しました。このような知見はすぐに特性向上などに結びつくものではありませんが、基礎的で重要なものであり、材料設計・電池構成技術とともにリチウム二次電池の高性能化の助けになると思っています。このようなデバイスの基礎的研究を通して地球環境問題の解決に役立つように研究を進めていきたいと考えています。

フロントティア ■ マンガというビジュアル・コンテンツの越境と受容 ■

孫郁雯

YUWEN SUN

一九九〇年代後半の台湾において、日本のポップ・カルチャーは、それまで圧倒的な影響力を持っていたアメリカの流行文化に拮抗し、若年層の間で「哈日」（日本大好き）ブームを巻き起こした。特に、日本のアニメ（Anime）・マンガ（Comic）・ゲーム（Game）とつづいたACG産業は、ブーム以前すでに子どもたちの日常生活に密着しており、彼らが日本という国に関する知識を学校で教わる前に、ドラえもんやアニメや任天堂のゲームを通して日本式の娯楽を経験したのである。このように日本のACGが馴染み深い文化として台湾の新しい世代に浸透していたことは、その後の日本ブームの基盤作りに貢献したといえる。ACG産業の中で、最も早い段階で台湾に普及したものはマンガである。現在、日本の翻訳マンガは台湾市場の約九割を占めており、全国四千店舗ほどあるレンタル・ショップを通して、手頃な価格で大量に貸出されている。書店での販売を主とする日本マンガの消費形態に比べ、台湾では便利で安価なレンタル・ショップが巷に点在している。このような流通網の存在は、日本マンガが台湾で目覚ましい発展を遂げた直接要因として挙げられる。

流通システムの発達以外にも、著作権法の改正や、日本製メディア・コンテンツの輸入禁止令の解除など制度面の改革は、九〇年代の日本ブームの外部要因として大きく作用した。だが、その流行現象の背後には、歴史的、文化的要因も隠れている。日本植民地であった歴史を振り返ると、映

画、歌謡曲、子供雑誌など日本の大衆文化は、二〇世紀の初頭、日本政府による統治の始まりとともに台湾へ入り込んだ。この時期に輸入された少年読み物を楽しんでいた台湾人マンガ家は、日本マンガの題材と表現技法を、中国から伝えられてきた「連環画」と融合させ、戦後において独特の台湾マンガを作りあげていった。しかし、第二次世界大戦後、台湾へ移った国民党政府は、共産思想の流布を防ぎながら、日治時期に施行された皇民化教育の影響を是正せざるを得ないという政治的難局に直面したため、反共・反日政策を立て、言論統制と出版物の検閲を行った。その結果、民衆のなかの親日的感情は露い出せなくなったが、その一方で、アジアの先進国である日本には常に熱い視線が注がれ続けた。

例えば、六〇年代、厳しいマンガ検閲を通るため、題材に尽きた台湾の出版社は、真つ先にテーマの豊富な日本マンガに目をつけた。出版社は、日の丸国旗や地名など明らかに日本を思わせる内容を改編して中国風に仕立てたが、そのようなローカル化は徹底したものではなく、内容を詳しくみると高校野球、和風の屋敷、行儀作法など日本の要素が遍在していた。日本マンガの改作版は、比較的成本が低いうえ、市場の受けも良かったので、一種のアングラ文化として正式な中国語版權を取得した九〇年代初頭までひそかに出版され続けていた。戦前の親日世代と九〇年代の哈日世代の間に、約五〇年間のタイムラグがあるものの、日本のビジュアル・コンテンツは言語・文

孫郁雯（ソン・イクブン）一九七八年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、国際比較調査EASS 2008の研究メンバー。専門分野はメディア学、大衆文化交流史。



図1 貸本屋のイメージを一新させたフランチャイズ経営の台湾のレンタル・ショップ。



図2 (右) 日本マンガ『まぼろし探偵』（桑田次郎、少年画報社、1961年）、(左)『まぼろし探偵』の改作版『怪探小飛龍』（施藍旭、義明出版社、1970年）。

化の障壁を超え、世代が替わっても継続的に消費されてきたのである。だが、いずれの世代も、アジアにおける現代化のリーダー格である日本を羨望の眼差しで眺めながら、同時に、戦争の教訓を忘れて日本文化を容易に受け入れるべきではないという矛盾した感情を抱いている。そのような葛藤は、台湾のみならず、香港やシンガポールなど東南アジア地域においても見受けられる。それらの地域において九〇年代末に日本の流行文化が一斉に盛んになった理由は、若者の間でモダニズムへの欲求が形式上の反日感情を一時的に上回った現象だと考えられる。

現在、マンガをはじめとする日本のビジュアル・コンテンツが世界中に輸出され、新たなソフト・パワーを日本にもたらしている。近年北米へ進出しはじめたACG産業は、クール・ジャパンの代表として、もともと日本に無関心だった米国の消費者を引き付けるようになった。だが、暴力やエロチックな描写のある日本マンガへの米国教育団体の反発をみれば、文化輸出が必ずしも国にとってプラスに作用しないことがわかる。特に台湾の事例から考えると、東アジアへの文化輸出は、歴史的背景を考慮し、文化帝国主義の批判を招かないように細心の注意を払う必要がある。マンガを読むという単純な行為でも、国境を越えれば様々な要因によって複雑になる。そのようなビジュアル・コンテンツの越境的交流と受容の孕む可能性と問題性を学問的に解明することが、筆者の研究課題である。

画像工学技術が拓く年輪年代学の新たな世界……………大河内隆之

TAKAYUKI OOKOCHI



大河内隆之（おこうち たかゆき）
一九六八年、大阪府生まれ。早稲田大学大学院理工学研究修士課程終了。千葉大学自然科学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究員。人間・環境学研究科客員准教授。専門は、建築史学、年輪年代学、画像工学。現在、木造文化財の年輪年代測定、およびそのための技術開発について研究中。主な論文に、「Nondestructive tree-ring measurements for Japanese oak and Japanese beech using micro-focus X-ray computed tomography」, *Dendrochronologia* 24, 135-164.

歴史研究において最も重要なことのひとつは、正確な年代を明らかにすることである。歴史に想いを馳せるとき、そこにロマンを感じる人は多い。しかし、歴史研究に身を置く研究者にとつては、時に厳しい問題をつきつけられることもある。近年では、自然科学的な研究アプローチが歴史研究においても画期的な成果を挙げ場合も少なくない。その一翼を担っているのが、筆者が専門とする年輪年代学である。

年輪年代学は、樹木の年輪が一年に一層ずつ形成されていく性質を利用して、年輪から過去の様々な情報を一年単位の精度で読み解こうとする学問である。この研究は、二〇世紀初頭にアメリカの天文学者 A・E・ダグラス（一八六七～一九六二）によって開始された¹⁾。当初彼は、太陽の黒点活動の周期を明らかにする目的から年輪年代研究を開始したが、やがて考古学研究にも対象を広げ、一九二九年にはアメリカ先住民の遺跡群の年代を明らかにするのに成功した²⁾。現在では五〇ヶ国以上の国々で、木造文化財の年代を一年単位の正確さで決定できる自然科学的な年代測定法として重要な役割を果たしている。「木の文化」の国である日本においても、奈良国立文化財研究所（現・独立行政法人国立文化財機構奈

良文化財研究所）の光谷拓実によって、一九八〇年から本格的に研究が開始され、対象自体から年代情報が得られる方法として、考古学・建築史学・美術史学などの様々な分野で、数々の実績を残してきた⁴⁾。

一般的に文化財の調査においては、非破壊でおこなわれることが望ましい。とりわけ、仏像や神像などの木造彫刻のように、それ自体に美術的な価値があり、かつ信仰の対象でもある場合には、調査対象を損なわないことが厳に求められる。ところが、実際に仏像などの年輪年代調査をしようとすると、調査対象の年輪を観察して正確なデータを計測することが困難な場合も多い。体躯の表面に、彩色、漆塗、金箔貼などの仕上げが施されている場合、あるいは表面の仕上げが脱落している場合、あるいは表面の場合には、調査対象の表面で正確に年輪を観察することはほぼ不可能である。そこで、非破壊で調査対象内部の年輪を計測する方法として筆者らが実現したのが、マイクロフォーカス X 線 CT 装置を用いた非破壊による年輪年代測定法である。

ここで、非破壊年輪年代測定に必要とされる技術仕様を明確にするために、年輪年代測定のプロセスを概観しておきたい。年輪年代測定では、〇・〇一mm の精度で年輪

幅を一層ずつ計測し、その変動変化のパターンを暦年代の確定している標準的な年輪幅データ（以下、暦年標準パターンと呼ぶ）と照合することが基本となる。日本の木造文化財で重要な位置を占めるヒノキを例にとると、平均的な年輪幅が〇・八mm程度、狭小な場合には年輪幅が〇・二mmに満たないこともある。年輪パターンの照合においては、年輪幅のデータを照合に適したデータ形式に指標化する過程、相関分析などの時系列解析、検定などの統計的な処理を経て、年輪パターン照合に問題がないことを確認する。パターンの照合には通常百年以上の連続したデータが必要となるが、その中の一年分の年輪データでも欠落していること、正確なパターン照合ができなくなることもある。現在のところ、日本の文化財で重要な位置を占めるヒノキの暦年標準パターンは、紀元前九一二年から現在まで途切れることなく作成されているので、これらの対象の年輪年代測定に必要な環境は整っているといえる。

X 線 CT という、多くの方は、病院に備えられているような医療用の装置をイメージするであろう。しかし、現行の医療用の X 線 CT 装置では約一mm未満の対象物を解像することができないので、年輪年代

(1) Webb GE, 1983, Tree Rings and Telescope: The Scientific Career of A. E. Douglass, The University of Arizona Press, Tucson, AZ, USA.
(2) Douglass AE, 1929, The Secret of Southwest Solved by Talkative Tree Rings, The National Geographic Magazine 56 (6): 736-770.
(3) 田中琢・光谷拓実・佐藤忠信（一九九〇）年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―奈良国立文化財研究所学報第四八冊。
(4) 光谷拓実（二〇〇一）「年輪年代法と文化財」『日本の美術』第四二二号 至文堂。

(1) Webb GE, 1983, Tree Rings and Telescope: The Scientific Career of A. E. Douglass, The University of Arizona Press, Tucson, AZ, USA.
(2) Douglass AE, 1929, The Secret of Southwest Solved by Talkative Tree Rings, The National Geographic Magazine 56 (6): 736-770.
(3) 田中琢・光谷拓実・佐藤忠信（一九九〇）年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―奈良国立文化財研究所学報第四八冊。
(4) 光谷拓実（二〇〇一）「年輪年代法と文化財」『日本の美術』第四二二号 至文堂。

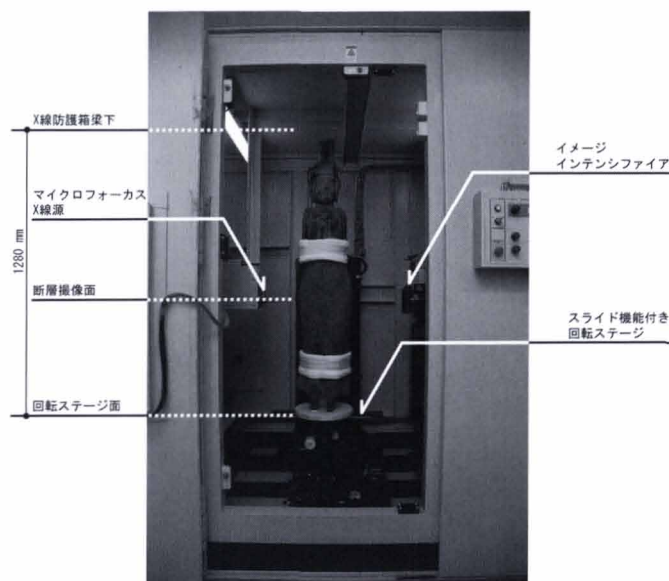


図1 マイクロフォーカスX線CT装置内に設置された池口寺木造菩薩形立像

測定に必要な性能を満たしていない。そこで筆者らは、年輪年代測定に必要な性能を実現するために、文化財の年輪年代測定用に特別に設計されたマイクロフォーカスX線CT装置を島津製作所株式会社と共同で二〇〇四年に開発した。開発からすでに四年経過しているが、現在（二〇〇八年五月）でも世界で唯一の非破壊年輪年代測定用装置として稼動している。

年輪年代測定に必要とされるX線CT装置の仕様としては、①狭小な年輪でも可視化できる解像性能であること、②百年以上の連続データが含まれる広範囲の撮像が可能であること、③ある程度の大きさの木造文化財を安全に扱うことができること、などの条件が挙げられる。①については、X

線源の焦点の大きさが解像性能を左右するため、焦点寸法 $5\mu\text{m}$ のマイクロフォーカスX線源を搭載した。②については、高解像の断層画像を連続的に撮影し、画像処理によって広範囲の断層画像として再構成する技術を開発した。③については、マイクロフォーカスX線源の出力、撮像素子（イメージインテンシファイアとCCDカメラ）の感度、調査対象によるX線の減衰などを考慮し、デバイスの配置と筐体の寸法を決定した。この装置では、直径二七cm、高さ五〇cmまでの調査対象であれば調査対象のいずれの部分でも撮像することができ、調査対象の状況によっては直径四五cm、高さ一二八cm程度のものまで扱うこともできる。

この非破壊年輪年代測定技術の実施事例として、長野県本曾郡大桑村の池口寺木造菩薩形立像を取りあげる。本像は、ヒノキ材による一木造、彫眼、彩色仕上げ（現状素地）の菩薩形立像である。法量は、像高一二・五cm、髪際高九二・八cm（三尺）、腰張二三・二cm。高く結い上げられた宝髻、穏やかながらも適度な肉付けをほどこす面相表現、おとなしい衣文表現等の特徴から、本像の制作時期は平安時代後期～鎌倉時代初期（十二世紀後半～十三世紀初頭）とみられる。

この像の腰部を前記のマイ

クロフォーカスX線CT装置を用いて断層撮影した（図一）。一回あたりの撮像視野が直径三五・三mmになるように定め、順次スライドさせながら撮影した十四枚の画像を統合して年輪幅計測用の断層画像を得た（図二）。筆者らが作成した年輪画像計測用のコンピュータプログラムを用いて年輪幅を計測した結果、本像腰部の断層撮像位置には二一九層の年輪が含まれていた。年輪幅データを対数変換・五年移動平均ハイパスフィルタによって処理したのち、相関分析法によってヒノキの暦年標準パターンと照合したところ、左腰部に残存する本像中の最新年輪の年代は一一一五年であった。この像には辺材や樹皮が残存していないため、原本から像を制作する過程で切削されたしまった年輪数は不明である。したがって、一一一五年という年輪年代は原木伐採の上限年代を示している。年輪年代学によって導かれたこの結論は、十二世紀後半～十三世紀初頭とする美術史的な所見とも矛盾はしない。

このように、外からは見えないものを非破壊で可視化するという画像工学の技術は、年輪年代学において重要な役割を果たしている。その技術の具現化に際しては、年輪年代学に必要な性能とは何か、それを実現するにしようすればよいのか、文化財という貴重な対象を扱ううえで留意すべき点は何か、など様々な観点からの検討が重ねられている。文化財調査の最前線が、自然科学・人文科学の枠を超えた協同の場であることを感じていただければ、筆者として望外の喜びである。

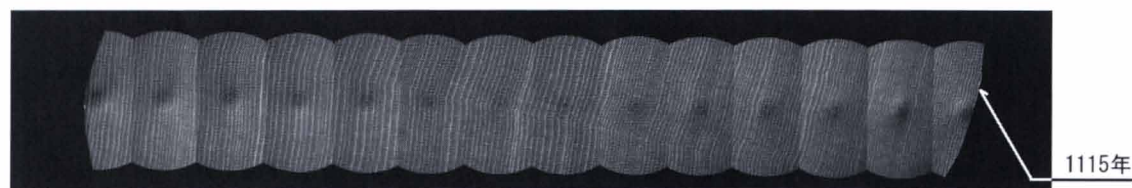


図2 池口寺木造菩薩形立像の腰部断層画像

未完のミステリー——デイケンズの遺作

廣野由美子

YUMIKO HIRONO



廣野由美子（ひろの ゆみこ）

一九五八年、大阪府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。神戸大学文学博士。著書に『十九世紀イギリス小説の技法』（福原賞受賞／英宝社）、「嵐が丘」の謎を解く（創元社）、「批評理論入門」『フランケンシュタイン』解剖講義（中公新書）、「視線は人を殺すか」小説論11講（ミネルヴァ書房）など。

イギリスの探偵小説の元祖とされているのは、T・S・エリオットが「近代イギリスにおける最初で最長、そして最上の探偵小説」と絶賛した『月長石』（一八六八）の作者ウィルキー・コリンズである。しかし、ロンドン警視庁のカフ巡査部長が登場するこの作品に先立ち、職業探偵が謎を解くという話が含まれた小説が、すでにチャールズ・ディケンズによって書かれていた。『荒涼館』（一八五三）にはバケット警部が登場し、弁護士殺人事件を説明している。この話は、作品の一部を構成するサブプロットにすぎないため、通常、探偵小説に分類されない。しかし、作品に含まれるいくつかの謎——出生不明の女主人公、過去に秘密を持つ準男爵夫人をめぐる謎など——がすべて殺人事件と連結しているという意味では、小説全体がミステリー構造を備えている。しかも、バケット警部が登場するのは、フランスの探偵小説の元祖とされるエミール・ガボリオのいくつかの探偵小説で、パリ警視庁のルコック探偵が登場する時期と比較しても、十年以上早いのである。

歴史上、最初の探偵小説とされるのは、アメリカのエドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」（一八四一）だというのが、定説になっている。探偵オーギュスト・

デュバン^③が登場するパリを舞台としたこの作品、およびそれに続く四作品によって、ポーは探偵小説の原型を確立した。

しかし興味深いのは、「モルグ街の殺人」が発表される数か月前に、デイケンズが書いたある小説に対して、ポーが特別の反応を示していることである。デイケンズが、

ゴードン暴動を題材とした歴史小説『バーナビー・ラッジ』を週刊雑誌に連載し始めて間もなく、ポーはこの作品に関するエッセイをアメリカの雑誌に発表した。小説の冒頭は、物語の舞台で二三年前に殺人事件

が起きたという挿話から始まる。領主が殺され、屋敷の執事と庭師が失踪したが、その後数か月たって、近くの池から執事と思われる遺体が発見されたため、庭師が犯人であることになったという。これを読んだポーは、遺体の顔がもはや判別できず服装から執事と判断されたことに着目し、被害者（庭師）を犯人（執事）の替え玉にしたトリックを見破ったのである。ポーの推理は的中した。ところがそれにとどまらず、彼はなおも『バーナビー・ラッジ』の完結後に、ふたたび長い評論を書いて雑誌に発表している。当時、すでに大西洋兩岸で名声を博していたデイケンズはポーよりはるかに有名な大作家であったが、「被害者即

犯人トリック」の原型を考案したのみならず、真相をずっとあとまで隠しておくというやり方のなかに、ポーは、ミステリー作家としてのデイケンズの卓抜な才能をも認めざるをえず、よほど触発されたのだろう。

*

デイケンズの最後の作品『エドウィン・ドルードの謎』（一八七〇）は、月刊分冊という形で一二回にわたって刊行される予定だった。しかし、物語がちやうど半ばにさしかかった第六号まで進んだところで、デイケンズは病に倒れ急死した。^④『Mystery』を表題に掲げた小説であるのみならず、作者が書かなかった後半の謎解きの部分が文字通り迷宮入りになってしまったために、それ自体が謎めいた存在となり、『エドウィン・ドルードの謎』は、しばしばミステリー史上にも組み込まれる。多くのミステリー作家たちが、続編の創作に挑戦したという点でも、この作品は注目を集めている。

エドウィンは、亡くなった親同士の取り決めによって許嫁ローザと結婚することになっていった。彼と数歳しか年の離れていない叔父ジャスパールは、クロイスタラムの大聖堂聖歌隊長の地位にあり、阿片常用者で、ローザに横恋慕している。エドウィンは、初対面の青年ネヴィルと仲違いする

（1）一八二九年に内務省所属機関として創設される。別名スコットランド・ヤード。一八四三年、その内部に犯罪捜査にあたる刑事部（のちのC・I・D）が編成される。
（2）『ルージユ事件』（一八六六年。ただし探偵役は素人タバレ）、『書類一三』（一八六七）、『オルシバルの犯罪』（一八六八）、『ルコック探偵』（一八六九）、『パリの奴隷』（一八六九）など。
（3）デュバンは、この作品では素人。次作から私立探偵となる。
（4）デュバンが登場する『マリイ・ロジェの謎』（一八四二）と『盗まれた手紙』（一八四五）、および探偵の登場しない『黄金虫』（一八四三）と『おまえが犯人だ』（一八四四）。
（5）一七八〇年にロンドンで、反カトリックを唱えるジョージ・ゴードン卿の首謀により引き起こされた暴動。
（6）架空の地名。ロンドンの東南東に位置する、セント州北西部の寺院のある町口チェスターが舞台であると推定される。

が、ジャスパールの計らいで彼と和解するた
めに会った翌朝、行方不明となる。捜査に
よって、エドウィンの時計とネクタイピン
だけが川から発見され、ネヴィルは殺人容
疑で逮捕される。証拠不十分で釈放された
のちも、ネヴィルは殺人犯であるとの汚名
によって町を追われ、ロンドンに移り住む。
そのころ、クロイスタラムにダチエリーと
名乗る男性が現れ、ジャスパールを監視し始
める。ここで物語は中絶となった。

それまでの物語の流れや、ディケンズが
周囲の人物に漏らしたヒントをもとに推測
すると、ジャスパールがエドウィンを殺害し
たことは、ほぼ確実である。ジャスパールは、
ネヴィルと別れて帰って来たエドウィンを
絞殺し、遺体を地下納骨堂の石灰の中に隠
したらしい（ジャスパールは納骨堂の鍵を管
理している墓石職人に接近し、骨が石灰に
溶けるという知識を得ている）。彼は石灰
に溶けない時計とシャツピンを取り外した
つもりだったが、エドウィンがポケットに
婚約指輪を所持していたことを知らなかつ
たため、最終的にはこれが証拠となって真
相が暴露されることになるのだろう。

*

しかし、謎はまだまだ残っている。た
とえばその一つは、ディケンズの指示に
基づいて挿絵画家が描いた月刊分冊の表紙
絵（図参照）である。伝統的に、表紙絵は
シリーズ刊行中同一のものが使用され、物
語の各場面をほめかす絵が、中央のタイ
トルを取り囲むような形で配される様式に
なっていた。上方の大聖堂を背景にして、
左方には腕を組んだ男女エドウィンとロー

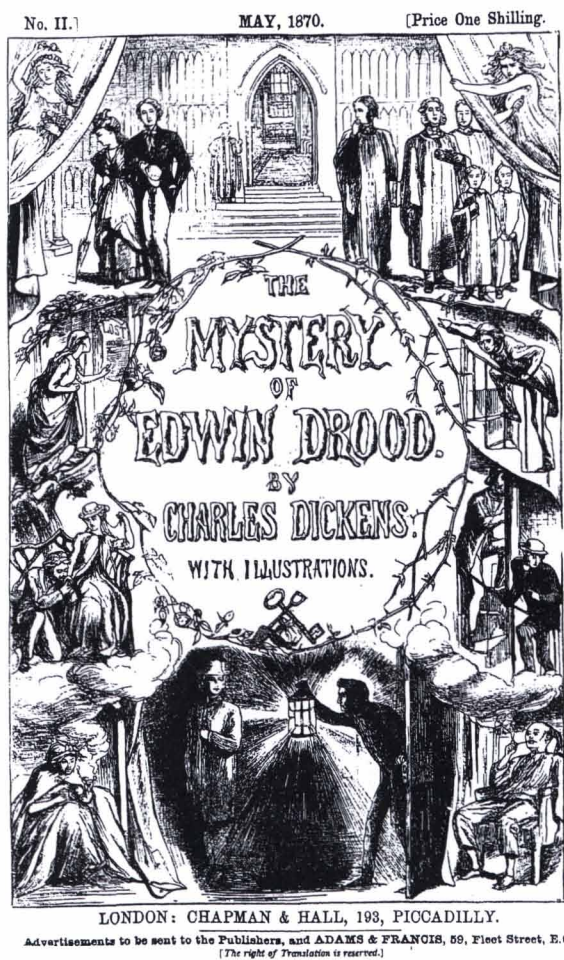
ザが歩いていて、右方には聖歌隊の一群が
いる。列を離れてじつと女性のほうに視線
を投げかけている男がジャスパールで、ロー
ザは嫌そうに顔を背けている。下端の左右
には阿片を吸っている人物が描かれ、その
吹き出す煙が上方へと広がっていることか
ら、阿片がこの作品で重要な役割を果たし
ていることが暗示される。

問題は、最も注意を引きつける下の中央
の絵である。これは作品にはまだ書かれて
いない箇所だが、重要な場面であるらしい。
右上に螺旋階段があることから、この場
所は地下納骨堂であるようだ。ジャスパール
らしき男が扉を開け、カンテラを照らすと、
暗闇から一人の男の姿が現れる。この謎の
人物は、いったいだれなのか。この若い男
は、上方に描かれているエドウィンとどこ
となく似ていることから、エドウィン生存

説を唱える批評家もいる。ネヴィルにはヘ
レナという気性の激しい妹がいるが、彼女
が兄の復讐（ネヴィルは死ぬのかもしれない）
をするために男装して探偵を演じてい
るという説もある。

私はこの謎の人物がダチエリーで、物語
が設定されている時代を考証すると、彼の
正体は私立探偵なのだと考えている。そ
の根拠は、紙数が足りなくなつたため別
の場で述べる予定だが、もし私の推定が正
しいとすれば、この未完のミステリーには、
シャーロック・ホームズの前身となる英国
初の私立探偵が登場するという構想が含ま
れていたことになるだろう。

（7）ディケンズは、挿絵画
家ファイルズの描いたジャス
パールの短いネクタイを、二重
巻きのマフラーに変更するよ
うにと指示し、その理由を彼
に明かしたという。
（8）コナン・ドイルがホー
ムズ・シリーズの第一作目
『緋色の研究』を発表したの
は、一八八七年。



挿絵画家ルーカ・ファイルズ作：月刊シリーズとして発行された『エドウィン・ドルードの謎』の表紙絵

パリの街角の表と裏

多賀 茂

SHIGERU TAGA



多賀 茂（たが しげる）
一九五七年生まれ。パリ第四大学ソルボンヌ博士課程修了。文学博士「パリ第四大学」。和歌山大学経済学部助教授等をへて、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専攻はフランス文学・フランス思想。主著書に『アイデアと制度』（名古屋大学出版会二〇〇八年）、論文に「逸脱、排除、自由——怪物的身体をめぐる考察」、「フランス文学における身体——その意識と表現」（平成二三—一六年度科学研究費補助金研究成果報告書）などがある。

パリは美しい町であると多くの人が言う。パリの街並みは、ほぼ同じような高さや意匠と色彩の建物が建ち並び、いかにも秩序だった美が表現されている。私自身、著作の中で、都市が都市であるための根本的な条件として、それが一つの「かたまり」として認識されることを挙げ、たとえば一直線に続く軒の線や類似した建物の連続がそうした感覚を生むための強力な力として働くことを主張した（『アイデアと制度』名古屋大学出版会、二〇〇八年）。シャンゼリゼ通りのようなパリの大通りを歩く者は、軒の線やほぼ類似した建物の連続が、確かに都市のかたまり感や統一感を発生させていることをはっきりと感じることができる。統一された外観こそが、パリの美しさの最大の要因であると言えるだろう。しかし今回はその反対のことを言おうと思う。パリの外観的統一にはいくつかの例外があり、それがまたパリの魅力を作り出しているのだということ、表向きのパリの美しさの「裏」に、また別の魅力が息づいているということを言おうと思う。

秩序だった表通りでも、一つ一つの建物を細かく見てみると、壁面の彫刻や窓の造形において建築家の創意が統一感の中に微妙な差異を作り出されているのだが、それ

だけではない。十九世紀後半に行われたオスマン男爵による大改造は、現在まで続くパリの景観の基盤を作ったとされるが、実はその影響が及ばなかった場所が意外に多くある。まず区域そのものが大改造の対象にならなかった所が多くあり、そんな区域では、十八世紀あるいは場合によっては中世にまで遡る建物が、十九世紀後半以降のブルジョワ的壮麗さとは異なった景観を作り出している。また統一された外観が作られた区域でも、裏通りへ回ればそれほど統一感はない。各階の高さが少しずつずれていたり、建てられた年代ごとの様式を示していたりする。さらに建物の中庭側に入れば、もはや秩序への意志はまったく働いていないかのように、自由な建築がなされている。十九世紀以降の厳しい建築規制も、中庭側にはなんの規制の設けなかったようである。今回は、そうしたパリの「裏」の風景のうち、私が好きな二つの例を紹介したいと思う。

一つ目の写真は、六区にあるRue Férou（フェルー通り）という、サン・シュルピス教会の横からリユクサンブル公園へとつながる短い通りの眺めである。十八世紀以前らしいおおらかな建物が両側に建ち、途中左手から木の緑が張り出している。

ここを通るたびに、なぜか私は心が安らぎ、いつまでもたずんでいたくなる。なんの根拠もないが、ロマネスク様式の教会とゴシック様式の教会との相違のようなものを、こうした古い落ち着いた街並みを見ると感じてしまう。建物のマスが、上方から私たちを圧迫するのではなく、まるで地面から掘り出されてきたように、どっしりと優しく存在している。母性的とでも言えようか。そこを通る者にやすらぎを感じさせてくれる空間がそこに存在している。余計な装飾



フェルー通り

はなにもない。建物には入り口と窓と壁があるだけである。窓の相対的な小ささや壁面の微妙なカーブ、石の厚みなどがそうした感覚を私たちに感じさせるのだろう。モンテニユラシーヌなど十六世紀や十七世紀の人物がふと出てきてもおかしくないような景色である。この通りに住んでいた写真家マン・レイや隣のセルヴァンド二通りに住んでいた思想家ロラン・バルトも、きっとここを何度も通ったことだろう。建物の低さ、重量感、様々な凹凸や樹木などが醸し出す空間の、まるで音楽的とも言えるような流れのなんと心地よいことだろう。この道が非常に短いことも、ひよっとしたらドビュッシーやあるいはクーブランの小品のような味わいをこの道に与えている原因の一つかもしれない。ただしこの道も、反対の端から見通してみるとそれほど感銘を受けないのはなぜだろうか。少しのほり加減になっていること、道の向こうに見える風景が、写真のように下から見ると、リュクサンブール公園の柵で終わるようになっていいることなどが、原因なのだろうか。いずれにしろ、音楽を逆方向から聞くわけにはいかないように、風景にも方向性があるということだろう。

二つ目の写真は、私が滞在したことのあるアパートの一室から見た眺めである。先に挙げたフェルー通りとは歩いて五分もかからない場所にあるアパートである。建物は一九三〇年代に建てられており、アール・デコ様式をわずかに感じさせる立派な風体を道路側には見せている。しかしいわず中庭側に面している（実際に中庭と言える

ような「庭」はないのであるが）部屋の窓からはこんな景色が見えるのである。なんとという多様性であることか。色彩、様式高さ、すべてがてんでばらばらである。私自身、表通りから見ている限り、中庭側がここまで不統一であるとは想像もしなかった。もちろん、表通りの統一感に対して、一歩裏へ回ればそんな統一感が失われているのがパリの常識であることぐらいは知っていた。学生時代に一時居住んだことがある屋根裏部屋からも、建物の裏側の複雑に入り組んだ空間の景色が見えていた。ところが、ここの中庭側の風景はなんとも不思議な感覚を抱かせる風景なのである。空間の出っ張りや引込み、高さの違い、斜めと直角、色の違いなどがほどよく調和している。ワイングラス片手に、小さなベランダからこの風景を見ていると、「なんだか



アパートから見た眺め

クレーの絵のようだ」などと夢想にふけてしまう。空間のリズム感が生き生きと感じられるのである。時には、住民の話し声（あるいは喧嘩しているような叫び声）が聞こえてくることもあるし、カーテン越しになにやら動いている人物の影が見えることもある。なんの職業を持っている、どんな生活をしているのかわからない人たちが、同じこの中庭に面したいくつもの部屋に住んでいる。一つとして同じ人生はないだろう。表通りの統一感が、公共というものの力強さや必要性を表現しているとすれば、裏側のこうした多様性は、私的なものの魅力や大切さを表現しているようにも思える。しかも今回この写真を見直してみると、さらに気づいたことがある。個人の多様な生活が想像はされる。しかし洗濯物などといった個人の生活をあからさまに示すものは一切見えていないのである。どうやらフランス人にとって、私的なものとは、たとえ裏側であれ公共の場からは身を潜めさせるべきものなのだろう。だとすると、フランス人のカップルが公共の場で抱き合っているのは、日本の若い女性が公共の場で化粧をしているのとは、意味が違っているのである。

ただ、そんな文化論めいた考察は抜きにしても、〈裏〉のパリは空間構成そのものがおもしろい。今回あげた二例でわかるように、リズムがあり、メロディーがあり、転調がある。歴史的な時間が重層的に積み重なっているパリの街角は、実は音楽的な時間の流れが生き生きと息づいている空間でもあるのである。

阪神大震災の集団力学

ハッ塚一郎

ICHIRO YATSUZUKA



国内外で大きな災害があいつぐ中、すでに大多数の人々にとっては、阪神・淡路大震災（一九九五年一月）は歴史上の出来事である。それは、年に一度追悼の風景を報じ、災害への備えを論じ、体験の風化を懸念するために引用する出来事でしかない。

しかし「体験の風化」や「忘却」は、長い年月が経過したために生じたのではない。実際には、阪神大震災の発災から二、三ヶ月という非常に早い時期、それも被災地の内部で、ボランティアとして活動する人々自身が、体験の風化と忘却に直面していた。

ボランティアの活動は、被災地の中で、それまでに例のない新しい集団をつくる試みでもあった。そうした集団が葛藤し、また、もっと大きな「日本社会」という集団の見えない圧力にさらされる中で、風化と忘却が生じたのである。

一方で、風化と忘却に抗する集団が、現在も阪神地域で地道な活動を続けている。市民による活動の新たな可能性は、かつての被災地で今も模索されている。大災害のあとにはどんな集団が生まれるのか。その活動を通して、復興後の社会にはどのような可能性が開かれるのか。それを本稿では考えてみたい。

阪神大震災は「ボランティア革命」という言葉を生んだ。発災の直後から、多くの

人々が被災地を訪れ、物資の運搬、高齢者への訪問など、きめ細かな救援活動に従事した。延べ一八〇万人ものボランティアは日本社会の希望と目された。ただし、ボランティアという集団は決して、何の背景もなく唐突に出現したのではない。

筆者が発災直後から参与観察したネットワーク型ボランティア団体「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」は、神戸を拠点に海外開発NGOの活動に長年携わってきた人々が主導して結成したものである。それまで国外の人々に対する支援にあたってきたNGO関係者が、その経験を軸に、被災地という国内で支援活動を展開したのであった。同様に、被災地で救援活動にあたったボランティア団体の多くは、震災の以前から、地域活動やスポーツなど、核となる多彩な活動や人間関係を蓄積していた。筆者の推計では、震災時に活動したボランティア団体の数は大小約七百、その七割は震災以前に明確な起源をもっている。すなわち、震災以前から潜在していた人々のネットワークやその活力を顕在化させ、新たな社会的活動へと現実化させたのが、阪神大震災のボランティアである。

それは確かに、「革命」と呼ぶにふさわしい実行力と清新さをもっていた。しかしボランティアの集団は、雑種の多様さを

ハッ塚 一郎（やつづか いちろう）

一九六九年、広島県出身。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程研究指導認定退学。熊本大学教育学部准教授。博士（人間・環境学）。専攻はグループ・ダイナミクス、社会的表象論。論文に「阪神大震災を契機とする記録ボランティア活動の勃興と変遷（二〇〇八年）」「ボランティア」と「NPO」の社会的構成プロセスに関する新聞記事分析研究「助詞分析」の試み（二〇〇七年）など、いずれも『実験社会心理学研究』所収。

もった存在でもある。そこには同時に、過ちや失敗、争いや迷いなどの、ネガティブな要素も数多く含まれていた。

参与観察でたびたび耳にしたのは、「次に同じような災害がきたらもうとうまくなるのに」というボランティアたちの嘆きだった。たとえばネットワークや連絡調整の活動だけに限っても、「失敗した」、「もっと人々の力を有効に結集できたのに」、などの反省を多く耳にした。およそ前例が乏しく、自分たちの活動の意味すらよくわからない手探りの活動をボランティアは強

大きなうねりへ

～ 阪神大震災地元NGO救援連絡会議の13ヵ月13日 ～



(1) 阪神大震災地元NGO救援連絡会議の活動記録報告書

いられた。

輪をかけるように、発災から二、三ヶ月で被災地をとりまく状況は急変する。予想外の早さで復旧が進み、人々の関心も、地下鉄サリン事件はじめ、刻々の話題へと移り過ぎていく。さらに、年度替わりの時期を迎え、ボランティア自身も撤収を始めていく。

いまやボランティアたちの活動は解体し、その貴重な経験も霧散しはじめる。自分たちの失敗や手痛い思いは聞いてもらえる場を持たず、行くところを失ってしまう。しかしそれとは裏腹に、世間はボランティアをひたすら礼賛し、その多様な体験を美談へと回収しようとしている。

見方を変えれば、被災し傷つくことのない日本社会の側が、被災地という特異な領域を飼いならして、日常へ復帰させようとしていた。災害に見舞われてもすぐ復興できる、ボランティアがいてくれるから日本は大丈夫、このような物語を、日本社会は必死でつくり出していたのかもしれない。

忘却や風化は、その結果として生じる。災害の不安から目をそらし、今の生活をそのまま続けても大丈夫だと思いこみたいからこそ、われわれは早々に忘却し、積極的に風化を進める。ボランティアを一面的に礼賛することも、その意味では風化にほかならない。

それに対し、被災地で活動したボランティアたちは強く反応した。被災地を去る多くのボランティアは、膨大な体験手記や記録を作成し、残そうとした。決して美談

ではなく、無数の誤りや失敗を含んだ、しかしそれゆえに貴重な体験を、せめて文字として残そうとするかのように。ボランティアの記録をボランティア自身の手で収集・保存しようという運動も起こり、筆者もそこに加わった。伝えよう、残そうとする切迫した思いのゆえか、活動開始からわずか三ヶ月で、四百点を超える記録資料や報告書、体験手記がボランティアたちから提供された。

この活動は、その後多くの困難や葛藤を経て、現在は二つの流れに分かれ、かつての被災地で活動を続けている。

「震災・まちのアーカイブ」^①は、震災資料の現地保存と継承を行う市民団体である。研究者や歴史史料関係者をメンバーに加えることで活動は新たな活力を得た。メンバーは、資料の探索と保存、その目録化などの作業を通して、震災体験が目の前で歴史となり、目の前で歴史史料へと変わっていくプロセスに立ち会い続けている。忘却や風化があっても、それでも必ず到来する未来の人々という集団のために、地域のなかで史料を伝え保存する活動が続けられている。

「市民活動センター神戸（KEC）」^②は、震災時に出現したネットワーキングと情報発信の活動を、いわば新しいかたちで展開させ、阪神地域で活動する多くの市民団体を支援する中間支援団体（インターミディアリ）である。福祉、教育、地域づくり、芸術、国際交流等々、日常のなかのさまざまな課題に取り組む人々を結びつけ、小さな集団を支援していく活動は、阪神地域で

着実に地歩を築いてきた。さらに、商店街でフェアトレード・ショップを経営するなど活動を多様化させている。

阪神大震災は歴史上の出来事である。しかし、歴史となる過程で追いやられた事柄を史料として残し伝えようとする集団もある。歴史を経た現在、新たなつながりを脈々とつくり続けている集団もある。災害のあとに生まれたこれらの集団は、この先訪れる新たな災害に抗する潜在的な力でもある。



(2) KECのフェアトレード・ショップ「みみずく舎」(神戸市中央区)

(1) http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/

(2) <http://www.kobekcc.net/>

共生を育む亜熱帯の森

川北 篤

ATSUSHI KAWAKITA



亜熱帯の島・奄美大島

九州の南に広がる太平洋と東シナ海の
間には、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸
島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島が弧
状に配列し、南西諸島と総称される。その
ほぼ中央部に位置する奄美大島は、幾重に
も山と谷がつらなる山地の島である。低緯
度ゆえの温暖な気候はそのふもとに亜熱帯
の森を発達させ、黒潮がもたらす湿潤な空
気は、山に豊富な雨をもたらしながら、溪
流や河川、マングローブといった多様な環
境を作り上げた。また最高峰の湯湾岳（六
九四m）をはじめとする山地には、亜熱帯
の島にありながら温帯の面影をとどめた独
特の生物相が見られる。温暖で湿潤な気候
に恵まれ、複雑な地形に抱かれた奄美の森
は、島としては他に例を見ないほどの多彩
な景観と高い生物多様性を誇っている。

生物地理学的には、奄美大島は暖温帯か
ら亜熱帯への移行帯にあり、全北区と旧熱
帯区との間の生物境界線（渡瀬線）の南側
に位置する。そのためヒカゲヘゴやノボ
タン、オオゴマダラといった熱帯の森を象
徴する多くの動植物が奄美諸島を分布の北
限としている。またこの地域は極めて古い
時代にアジア大陸や日本列島から切り離さ
れて以降、一度も海没することがなかった

ため、アマミノクロウサギやイボイモリな
どのように、祖先種が大陸では絶滅してし
まった遺存的な生物が多く見られる。さら
に孤島としての長い隔離の歴史は、この地
域独自の種分化をももたらした。ルリカケ
ス、オオトラツグミ、オットンガエル、マ
ルダイコクコガネ、アマミヒイラギモチと
いった数多くの固有種の存在は、この地域
の生物相がいかに長い時間をかけて形作ら
れてきたものであるかを物語る。熱帯のに
ぎわいと、温帯の名残を合わせ持つ奄美大
島は、さまざまな生き物が独自の進化を遂
げた、豊かな生物相に彩られた島でもある。

奄美大島の複雑な地形と多様な生物が織
りなす光景は、実に多彩で美しい。芽吹き
に沸き立つ森を黄金に染めるオキナワジイ
の花、朝靄にけむる森に響きわたるリュウ
キュウアカシヨウビンの声、梅雨の雨を浴
びて深緑色に輝く鬱蒼とした森、入り組ん
だ海岸線が作り上げる波静かな入江。この
神秘的とすら思える山深い奄美の森はしか
し、急峻な斜面と猛毒を持つハブの存在の
ために、容易に人々を寄せ付けない場所で
もあった。そこはケンムンという妖怪が棲
む森であり、ノロと呼ばれる神高き女性が
司る秘祭が行われる場所でもある。海洋の
孤島で独自の生物を育んできた奄美の自然
は、同時に地元の人々の独特な習俗や信仰

にも大きな影響を及ぼしてきた。



ヒカゲヘゴがそびえる森



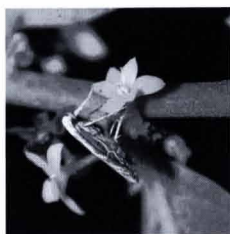
湯湾岳から見下ろす焼内湾

奄美の森の絶対送粉共生系

私はこの奄美大島の亜熱帯の森を舞台に、
植物とその花粉を運ぶ昆虫と間の共生系に
ついて研究している。宿命的に自ら動く能
力を持たない植物は、その多くがさまざま
な動物に花粉の散布（送粉）を託すように
進化を遂げた。これらの植物は、色鮮やか
な花弁や独特の匂いでハナバチ、ハナアブ、
チョウ、ガ、コウモリなどの動物を誘引し、
多くの場合送粉の見返りに花蜜や花粉を報
酬として提供している。しかし動物に送粉
を託した植物の中のごく一部には、長い進
化の果てに著しく特殊な送粉様式を発達さ
せたものが見られる。その最も巧妙な例の
ひとつに、幼虫期に種子を食害する昆虫が、

川北 篤（かわきた あつし）

一九七八年愛知県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士
課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、京都大学大学院
地球環境学、および同大学大学院人間・環境学研究科助教。専門
分野は生態学。著書に『共進化の生態学』（共著、文芸総合出版、二
〇〇八年）がある。



左) ウラジロカンコノキの雄花を訪れるハナホソガ

右) 雌花に産卵するハナホソガ

自らの子孫の餌を確保するために能動的に送粉を行うようになった、絶対送粉共生系がある。

奄美大島を分布の北限とするウラジロカンコノキは、山地の尾根筋を好んで生える常緑性の中高木である。それぞれの木には雄花と雌花が見られるが、いずれも五ミリにも満たない小さなもので、花弁を欠き、緑色の花らしからぬ姿をしている。とりわけ雌花は数本の雌蕊が癒合しただけの極めて特殊な形をしており、昼間の森を飛び交うハナバチやチョウには全く見向きもされない。送粉者であるハナホソガは体長数ミリ程度の小さな蛾で、産卵を行う雌だけが夜間に花を訪れる。

初夏の蒸し暑い夜、森にはリユウキウウコノハズクの美しい鳴き声が響きわたる。そんな中、懐中電灯を片手にウラジロカンコノキをのぞき込むと、ハナホソガの雌がせわしなく触角で枝を叩きながら雌花を探しているのに出会う。すでに雄花を訪れ口吻に花粉をたっぷりと蓄えたハナホソガは、適当な雌花を見つけると、口吻を何度も伸縮させながら、癒合した雌蕊の内側にある柱頭に入念に授粉する。そして授粉を終えると、長い産卵管を子房に突き刺して雌花に卵を産みつける。ハナホソガの幼虫は果実の発達が始まる頃に孵化し、発達途中の胚珠の一部のみを食害して成熟する。一方で残された胚珠は正常な種子となって植物の次世代を担ってゆく。

こうしたハナホソガの一連の授粉・産卵行動は、個々の雌に本能的に備わったものであり、さまざまな遺伝的変化を伴った極

めて複雑な進化の産物である。奄美大島にはウラジロカンコノキに近縁な植物がさらに四種生育するが、驚くことにそのいずれもがそれぞれに特異的なただ一種のハナホソガのみによって送粉されている。これらの植物とハナホソガは、互いに相手の存在なしには繁殖を遂げられないほどに強く依存し合った、絶対的な共生関係にあるといえる。そしてこのような絶対送粉共生系は、生物種間の共進化や、共生系の起源の謎を解き明かす上での貴重な材料を我々に提供してくれているのである。

世界の熱帯の絶対送粉共生系

ウラジロカンコノキが属するコミカンソウ属は、世界の熱帯域を中心に約一二〇〇種が知られる、著しい多様化を遂げたグループである。これらの植物の送粉様式を明らかにすべく、世界の様々な地域で調査を行ったところ、実にその約半数にあたる六〇〇種近くが、それぞれに種特異的なハナホソガによって送粉されていると考えられることが分かってきた。アジアの熱帯を象徴するフタバガキがそびえるラオスの森、ゴンドワナ大陸に由来し孤島として太平洋に浮かぶニューカレドニア島、さまざまな生物が適応放散を遂げたマダガスカルの山地雲霧林、カリブ海に浮かぶキューバの蛇紋岩地に発達した林。その行く先々でコミカンソウ属植物がそれぞれに特異的な一種のハナホソガと関係を結んでいるのが見られた。日本から遠く離れたこれらの地で同じように口吻を動かしながら送粉するハナホソガを見たときの感慨は筆舌に尽くし

難い。さらに分子系統解析と年代推定の結果から、これらのハナホソガは二五〇〇万年から三〇〇〇万年前に起源したたった一種のハナホソガに由来し、その後コミカンソウ属植物と密接に関わり合いながら種分化を繰り返してきたことが分かった。奄美の夜の森で見たウラジロカンコノキを送粉するハナホソガは、二五〇〇万年という想像もできないほどの長い間、世界中の熱帯の森で何度となく繰り返されてきた生物の営みと、絶え間なく続いてきた進化と種分化の歴史のほんの一端を、我々に垣間見せてくれたのである。

共生を育む森

本稿で紹介した絶対送粉共生系は、いうまでもなく森を構成するごく一部の生き物にとつての物語である。多様な生物が溢れる実際の森には、数え切れないほどの共生の物語が存在し、そのいずれもが人間の尺度では見当もつかないほどの長い進化の歴史を持っている。そして現在見られる森の生態系は、こうしたさまざまな履歴を帯びた無数の生き物が、地球規模での移動分散と、度重なる種分化と絶滅を繰り返しながら作り上げてきたものである。中でも多くの固有種を生みだし、その土地独特の伝統や信仰を育んできた奄美の森は、海洋の孤島で起こった独自の生物進化の歴史を物語ると、とりわけかけがえのない自然であることとを、ウラジロカンコノキの枝の上を歩き回るハナホソガを見るたびに、あらためて気づかされずにはいられない。

「軍艦アパート」の記憶

中嶋節子

SETSUOKO NAKAJIMA



二〇〇七年一月、「軍艦アパート」として知られた大阪市改良住宅・下寺住宅が姿を消した。日本橋筋の電気屋街の東に位置するこの住宅は、一九三〇年の不良住宅地区改良事業、いわばスラムクリアランス事業として、大阪市で最初に建てられた鉄筋コンクリート造の集合住宅である。「軍艦アパート」の呼称は、屋上に多くの煙突が並び巨大な住棟が、軍艦のように見えることから付けられたという。

改良事業は、一九二七年の不良住宅地区改良法の制定を受けて、全国六大都市で実施され、大阪市では下寺住宅（三〇年）のほか、北日東住宅（三二年）、南日東住宅（三三年）の計三ヶ所に鉄筋コンクリート造改良住宅が建設された。木造の住宅は他都市でも建てられていたが、同潤会が法律制定前に建設した猿江住宅を除くと、本格的な鉄筋コンクリート造改良住宅の建設は大阪市が先陣を切った。

この時代の大阪市では、都市政策に手腕を振るった池上四郎、關一両市長のもと、住宅政策についても先進的な取り組みが行われていた。法律制定後、直ちに着手された改良事業は、市にとってまさに時宜を得たものだったのである。見方をかえれば、大阪では密集市街地の問題がもはや看過できない状況にあったことを示している。



図2 竣工直後の南日東住宅 新しい生活の器として、注目された。『建築と社会』6-5、1933年

こうして建てられた改良住宅は、その後七〇年以上にわたって住み続けられてきたが、老朽化を理由に、漸次建て替えが進められ、南日東住宅が二〇〇一年、北日東住宅が翌二〇〇二年に解体された。そして下寺住宅が二〇〇六年度に取り壊されたことで、戦前の鉄筋コンクリート造改良住宅はすべて姿を消した。

これら三住宅の解体にあたって、それぞれ一ヶ月近くかけて、全住戸平面の実測、共用空間の環境・利用調査、建築構造調査、ヒヤリング調査などを行う機会に恵まれた。そこに刻まれた都市の歴史と暮らしの履歴はあまりに生々しく、七〇年という歳月を

圧倒的な迫力と説得力で物語ってくれる。

裏の空間を埋める

改良住宅が建てられた日本橋筋界隈は、明治初期にはまだ中心市街地の周縁部であったが、明治中期以降、急激な市街地の拡大によって、家屋密集地が無秩序に広がる地域へと姿を変えていった。そこに明治末になって、内国勧業博覧会の開催、市電（堺筋）の敷設などを契機とする街路や街区の整備事業が進められたことにより、行き場を失った家屋が街区の奥へと入り込み、家屋密集の状況はさらに深刻なものとなっていった。これらの地区は、下駄屋裏、桃ノ木裏、豚屋裏、燗的裏などの通称で呼ばれ、道路に面した表の空間に対する、まさに「裏」の空間として都市を埋めていた。空間の二重構造が地区の特徴であった。

改良住宅の敷地が、一般道路に面していない街区の内部、いわゆる「あんこ」部分であることは、こうした空間構造に起因する。そのため開発にあたって、一般道路に繋がる新たな道路を敷地内に貫通させ、この道路に面して住棟を配置する手法が採られている。こうした貫通道路は、機能的には表の空間と裏の空間を繋ぐものであり、空間的には裏の空間を

中嶋節子（なかじま せつこ）
一九六九年、滋賀県生まれ。京都大学工学部卒業。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士（工学・京都大学）。大阪市立大学生活科学部助手、同大学院生活科学研究科助教などを経て、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は都市史、建築史。近代日本の都市景観や環境文化をめぐる問題がメインテーマ。



図1 解体直前の下寺住宅「出家」が独特のファサードをつくる。2006年撮影。

(1) 関東大震災後、帝都復興の一環として住宅供給を目的に設立された財団法人。都市中間層向けの良質な住宅供給とともに改良住宅建設も行った。

(2) 歴史主義様式を否定し、機能的・合理的で装飾のない建築を求めるモダンムーブメントのなかで登場した建築。ヨーロッパではじまった運動は、国を超えて広がり、20世紀の建築の中心課題となった。

表の空間へと転化する役割を果たした。

モダンズム建築十長屋Ⅱ立体長屋

鉄筋コンクリートで建てられた改良住宅は、いずれも三階建てで、デザインは時代の最先端を行くモダンズム建築とされた。また共用部分には、ダストシュートや共同洗濯場、共同物干し場、コミュニティスペースとしての中庭など、新しい生活を誘導する設備が準備されていた。

モダンな外観や共用設備に対して、住戸は水道やガス、水洗便所が導入された以外は、入居者のこれまでの生活様式を踏襲したものとなっている。住戸内は木造で、六畳と三畳、あるいは六畳と四畳半の二室に押入れ、踏み込み土間、炊事場、便所が設けられるのが標準的な間取りであった。これは当時の庶民の平均的な住まいであった長屋の規模・構成とほぼ同じといえてよい。こうしてみた時、改良住宅の建築は、従来の木造長屋を、鉄筋コンクリートのフレームのなかに積み上げた「立体長屋」として理解することができる。先進的な社会事業の象徴としての外観、設備と、生活の実態との調整を意図した住戸との明らかな二重構造がそこには存在する。改良事業以前の都市空間の表と裏という二重構造が、事業後は建物の外部と内部の二重構造へとかたちを変えたということもできよう。もちろん住環境は飛躍的に改善されたが、都市が内包する問題は、新たな二重構造として温存されたのである。

間取りが語る住まいの履歴

これらの住宅は、長年にわたって住み続けられるなかで、生活の変化と要求に応じて多くの改造が加えられてきた。最も特徴的なものは、「出家（だしや）」と呼ばれるベランダなどを居室化する行為である。八割から九割の住戸で「出家」が張り出し、それらのなかには二〇〇パーセント以上の増床を図っている住戸もあった。この改造によって外部に現れた壁面は、当初のモダンな姿を想像することができないほど、個性的で強烈なインパクトをもつ。まさに住むという行為が作り出した景観である。

内部については、実測平面から改造の変更をトレースすることができ、戦後のベビーブーム期に、「出家」によって多くの住戸で子供部屋が増築される。また、五〇年代後半から六〇年代にかけて、冷蔵庫や電子レンジの登場、システムキッチンの普及によって台所が改造され、ダイニングキッチンがつくられた。やがて八〇年代以降、子供が巣立ち、家族の人数が減るとワンルーム化が進む。ワンルーム化とともに大家族で複数の住戸を持つ住まい方も見られるようになる。面積拡大の要求に増築で対応するのではなく、一戸はリビング、一戸は寝室といったように、機能を複数の住戸に配分する住まい方が登場するのである。そして解体直前は高齢化が進み、コンパクトな住まい方が好まれるようになっていた。間取りに見る住まいの履歴は、そのまま日本人の住まい方の変遷と重なる。

記憶装置としての改良住宅

建物は解体されたが、七〇年あまりの生涯を終えた改良住宅は、鉄筋コンクリート造集合住宅のライフサイクルを一巡した事例として、都市と住宅をめぐる諸問題に多くの知見を残してくれた。都市空間の継続性と代謝、建物の構造的耐久性、設備の交換可能性、間取りの可変性・生活様式との整合性、コミュニティの形成と維持。これらはいずれも持続可能な環境を目指す社会にあって解決が迫られる今日の課題である。これらの調査を通じて、時を経た建物に記憶された都市と暮らしの歴史を読み解くことの楽しさを改めて確認するとともに、それらが姿を消した後、その存在を記録し、未来を考える材料として活かし続ける必要を強く感じている。



図3 解体直前の北日東住宅 3住宅中もっとも洗練されたデザインの住宅だった。2002年撮影。

篠原雅武Ⅱ著

評者・岡部明子（千葉大学大学院准教授）

「公共空間の政治理論」

人文書院

二〇〇七年八月 二四八頁

定価二、四〇〇円十税



市民活動・NPOの観点から「新しい公」としての公共空間が論じられるようになった。他方、都市デザイナーや建築家はデザインする対象として公共空間を捉えてきた。前者が活動の概念的空間であるのに対して、後者は広場・街路や公園など実在する空間である。広場が市民活動の原風景であるという感覚を共有しない日本人にとっては、どうしても活動と実在の二つの公共空間が結び付かない。本書は、ルフェーブルやアーレントらの思想と正面から向き合い、空間が公共的であることの条件を探ってゆくうちに、

概念的な公共空間と物理的な公共空間の双方を包み込む理論的枠組みを浮かび上がらせることに成功している。第二章は、ルフェーブルを軸に展開されている。マルクス主義の社会思想家として知られるH・ルフェーブルは、わが国では一九七〇年前後の学生運動と不可分な思想家というイメージが根強い。こうした先入観を払拭して本著者は、ルフェーブルの『都市への権利』（一九六九）、『都市革命』（一九七〇）に代表される都市論から『空間の生産』（一九七四）で空間論に至る論展開をていねいに追って

いる。そして、現代を見透かしたルフェーブル空間論の真髓を「隙間」あるいは「亀裂」といった言葉として抽出していく。

本書を水先案内にルフェーブルを改めて読むと、地球規模で市場原理が充満し一元的な価値で空間が階層序列化されてゆく今日、「諸々の差異が維持され、始動することになるのは、均質化の狭間においてである」（『空間の生産』）というルフェーブルの言葉は現代都市社会に鋭く突き刺さる。

こうした「均質空間の内側の隙間」は、建築・都市計画を専門とする評者にとって、建築家たちが物理的な側面から目を向けている隙間を想起させる。建築家の宮本佳明はそれを「環境ノイズ」と名づけている（『環境ノイズを読み、風景をつくる』二〇〇七）。一例として、酒鬼薔薇事件の凶行現場となったタンク山をあげているが、ここは近代都市計画に則りフラット化されたニュータウンに削り残された「計画のほころび」であるという。

そして、宮本氏が「環境ノイズ」に「都市のテーマパーク化という退屈な未来を免れる」手応えを得ているように、隙間には、フラット化と階層序列化が同時に進行するのに抗い、公共空間を救い出す種が確かに潜んでいる。しかし、それは、隙間にくすぶるエネルギーが一気に爆発して革命を起し、都市社会を転覆するような「強い」ものから程遠い。

第三章では、隙間や裂け目がどんなものなのか、H・アーレントが『人間の条件』（一九五八）で提示した「現われの空間」を基に、以来五〇年で進化した公共空間の危機に引き寄せて、独自の解釈を加えている。そもそも現われの空間は、人びとが助け合うだけでなく傷つけ合う方向にもむかうという。ジェンダー論者の

バトラーの脆弱性の概念を援用して、「現われの空間」とは「耐え難いものが何であるかを覚し、それに反応していくための空間ではないか」と推論している。

そして最後に、公共空間をつなぎとめるためには、「耐え難いものの現われとしての行為と、それが隙間に創出するやりとりの空間を、どれだけささいで脆弱なものであっても支えていこうとする必要がある」という結論を絞り出している。ヘタ地（不整形な崖地などで不動産市場が見向きしない土地）の狭小住宅や衰退商店街再生などの現場で、日々都市の物理的な隙間と格闘している建築家やまちづくりの担い手たちにとっては勇気付けられるメッセージであることはいうまでもない。ただ、彼らは、その困難さを理論家たち以上に痛いほど肌で感じているかもしれない。なぜなら、ヘタ地で奮闘して成功すればするほど、デザインという付加価値で即座にマーケットに回収されていく事例をいくつも見てきているし、商店街活性化に成功した少ない例では、いずれもレトロなどのテーマ性やニッチなサブカルチャーが付加価値を生み、均質化する都市空間に再編されていくのを目の当たりにしているからである。

公共空間を追い詰めている状況を和らげるために、脆弱ゆえにかろうじて存立している「現われの空間」と付き合っていくことの大切さを、本書が論理的に示したことの意義はとても大きい。では、どう付き合っていけばそれを壊さずに支え続けることにつながるのか、答えがあるとするなら、現場と理論のやりとりの中であらう。その過程でもキーワードとなるのは、ルフェーブルが空間の均質化に抵抗する方向性として示した「脱中心化」と「転用」かもしれない。

稲垣直樹 II 著

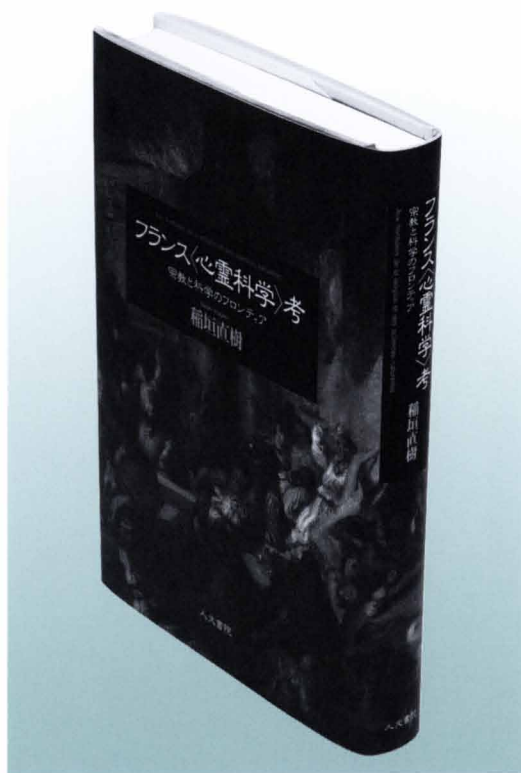
評者・柏木隆雄（大阪大学名誉教授）

「フランスへ心霊科学」考―宗教と科学のフロンティア

人文書院

二〇〇七年一〇月 三九二頁

定価四、五〇〇円十税



て、異常な能力を発揮できる人間である。いかにもエネルギー信奉者のバルザックらしい考えだが、こうした不可思議な能力への憧れは、科学が精密になって、新しい発見がなされ、神秘が普通の現象に過ぎないことが明かされる一九世紀以降、逆説的に支持されるようになった。

本書は近代の知的パラダイムの中に、それに相反するような「心霊科学」に取り組み、それが「科学的」な客観性を持つことを説いた人々の著作を読破、克明な検討を加えて論じた力作である。

第一章「近代」の申し子としての『心霊科学』は、フランス革命の後、政教分離に絡む公教育の進展による「科学」的思考の確立を見たあと、そうした「科学的な」背景からメスメル、動物磁気などが流行したことを説く。先のバルザックの小説の例を考えればよく理解されるように、近代を律するパラダイム時間、空間表象を多重化する装置としての近代小説は、「事実」を根拠とすることを謳いながら、そこに「不可思議」なものを捨象することがない。

A・コントが確立した「実証主義」の六つの法則、「現実性」「有用性」「確実性」「明確性」「肯定性」「相対性」のうち、特に「相対性」の確証が、科学における相対主義に繋がり、そこにユゴー、カルデック、フラマリヨンなどが「心霊科学」に没頭する思想的背景を見るこの章は、卑近な「心霊写真」の解明から始まって、一見「非科学的な」事象が、じつは近代の科学思想の枠組みの中から生まれ出た必然的な結果であることを、重要な事件や思想を百年のスパンで鳥瞰しつつ、ダイナミックに説き明かして明快である。

第二章「創造的シンクレティズムの時代」は、第一章の科学思想的俯瞰を踏

まえて、ユゴーの降霊術体験をつぶさに紹介、彼が一八五三年から二年間没頭した降霊術実験を検証する。著者はパリ国立図書館等で精査した膨大な原資料を縦横に駆使してユゴーの詳細な記述を分析、ユゴーがすごい筆圧で記した「霊」との対話のコピー、その父の姿を書き写す娘アデルの日記など、ユゴー専門家ならではの深い洞察と分析とが堪能できる。

第三章「スピリチズム」、第四章「科学のフロンティアを拓く」は、世紀後半の心霊科学の大事、アラン・カルデックと彼に導かれた天文学者カミーユ・フラマリヨンについての、おそらくは日本で初めての極めて貴重な本格的論考。ユゴーと同じように降霊術に沈没したカルデックは、「霊界通信」を広め、キリスト教とは峻別される「霊」の存在を主張、「霊」と人間の深い関係を「科学的に」論述した。現在も存続するスピリチズムの団体を構築し、それはブラジルにまで及んでいるという。そしてフラマリヨンは「心霊科学」がどのように成立し、いかにして「霊の不思議」が「科学的に」説明されるかを明らかにした。彼が多数の体験者からの回答をさまざまなタイプに分類して、緻密に推論する姿は、現代の霊能事象の検証にも重なるだろう。

第二章の書誌的記述がやや専門的に傾いて、全体の流れを急いで追いたい者にはもどかしいかも知れない。また果たしてユゴー、カルデック、フラマリヨンの見たものが、真に「科学的実証」に堪えるか、著者自身の見解を聞きたい気もするが、ユゴーが精魂込めて記した降霊のノートを問近に見る思いをさせる迫力ある記述を含め、綿密な調査と文献の読破で構築していく著者の労を多として、新たな「心霊科学」の書の誕生を喜ぶたい。

バルザック『ユルシユル・ミルウエ』（一八四二年刊）は、ヒロインの誰にも知られぬ幼い「恋」を、養い親である無信仰の老医師ミノレ博士に悟らせるのに、夢遊状態を誘発して患者を治療するメスメルを登場させる点で異色の作品だ。メスメルは術師に眠らされた女はヒロインの胸の中の恋までも透視するばかりか、ミノレ老人が書斎の本棚に隠した財産証書の在処までありありと見る。

見えぬものを見る夢中透視によって、少女の恋の神聖はいつそう保証され、隠し遺産の存在は、語り手が直に語るより

も透視者によって明らかにされる方が秘密の色合いを濃くするだろう。メスメリズムの勝利を目の当たりにしたミノレが、死後も亡霊となって現れる、と娘に約束するところに、超能力の存在を認めるバルザックの信念を見ることもできる。

傑作『いとこボンス』に登場する占い師フォンテーヌ婆さんも含め、「未来を見抜く」という不思議な、訳のわからない力を備えている「霊能者」たちは、知識を無闇に使うありきたりの教養人と異なり、磨り減らすことなく貯めた情念とエネルギーを、大事の際、一気に爆発させ

人環図書

——本研究科教員・出身者の新著より——

近くて遠い中国語

阿辻哲次著

中央公論新社 二〇〇七年

大学で中国語の履修学生が激増している。ここ数十年、日中間の交流やビジネス展開が驚くべき速度で進み、旅行で中国を訪れる人も膨大な数に達する。オリンピックも近く、中国のことに無関心でいられなくなった時代であると考えれば、語学履修者の激増は当然なのだが、しかし中国語学習者の中には、しばしばわめて安易な考えが見られる。

それは、漢字で書かれた中国語なら、日本人は文章をながめるだけで文意が把握でき、旅行にいつでも、筆談なら通じるだろうという考えである。

もちろん現実にはそんなに甘くない。日本語と中国語はまったく別の言語であり、語彙に使われる漢字が共通であっても意味がまったくちがうことは珍しくない。中国語の「汽車」はクルマ、「愛人」は夫または妻すなわち配偶者のことで、「手紙」はトイレットペーパーのことである。「近くて遠い」は男女の仲だけではない。すぐ近くの国で使われていて、日本語と同じように漢字で書かれる中国語が、実は私たちにとって完全な外国語であるという当たり前の事実をあらためて確認し、そのことを理解してはじめて、中国語が私たちにもっとも学びやすい外国語となる、と本書は主張する。

アジアの歴史地理（全三巻）

金坂清則・山田誠他編

朝倉書店 二〇〇七年（第一巻、第三巻）、二〇〇八年（第二巻）

本研究科の第二代の研究科長を務められた足利健亮教授は、研究科長在任中に『アジア世界の歴史地図』と題する叢書の刊行を企画された。一九九九年に教授が逝去された後、この企画は進行が滞ったが、シリーズ名の変更など紆余曲折をへた後、全三巻のシリーズとしてようやく陽の目を見ることがとなった。

それぞれの巻は、第一巻が「領域と移動」（石原潤、金坂清則、南出眞助、武藤直編）、第二巻が「都市と農地景観」（秋山元秀、金田章裕、高橋誠一、溝口常俊、山田誠編）、第三巻が「林野・草原・水域」（小長谷有紀、中里亜夫、藤田佳久編）と題され、各巻とも人文地理学研究者によるものを主としながらも、東洋史学、考古学その他の隣接分野の研究者の寄稿も含めて構成されている。人環関係者による寄稿としては、編集担当の金坂・山田両教授によるもののほか、足利教授が生前に執筆された原稿と東洋史学の愛宕元名譽教授による論稿が掲載されている。研究蓄積の厚薄のために、すべてのテーマ、地域が網羅されてはおらず、また「アジア」と言いつつ日本に関する論稿が多いくらいはあるものの、類書の少ない中、多くの読者の目にふれることが期待される。

打たれ強くなるための読書術

東郷雄二著

筑摩書房 二〇〇八年

二〇〇五年に京都大学高等教育研究開発推進センターが開催した学生教職員教育交流会で、当時教育学部一回生だった羽山裕子さんが「現在日本人の読書実態について」という発表をしている。読売新聞の読書アンケート調査をもとに、現代日本の読書傾向を分析したもので、十代の若者の二極化と人文社会科学系の本離れという結果が報告されている。十代の若者は本を読む派と読まない派に二極化し、カタい本が読まれなくなったということだ。

京都丸善が閉店し跡地がカラオケ店になったように、ハイカルチャーの風化は急速に進行し、一方で「これは泣けます」というキャッチ・コピーのケータイ小説が百万部を売り上げている。人文社会科学系のカタイ本離れは、学問の世界にいる人間には憂慮すべき事態だろう。

よく言われるように、最近の若者は「すぐに正解を欲しがらる」「どこかに正解がひとつあると信じている」「問題を解くのは得意でも問題を立てるのが苦手である」といった傾向がある。本書ではこれを「知的に打たれ弱い症候群」と名づけ、知的に「打たれ強くなる」ためには、どのような本の読み方をすればよいかを、読書の「技法」として解説した。本読みの巧者には当たり前のことしか書かれていないが、本書によって少しでもカタい本離れが食い止められればと願うところである。

みやこの近代

丸山宏・伊従勉・高木博志編

思文閣出版 二〇〇八年

眼鏡をかけた人にとっていちばん遠いものとは、その人のかけている眼鏡であるというハイデッガーの譬みに倣って言えば、みやこであった歴史の長い京都にとつていちばん遠い過去とは、実は、みやこでなくなつて以来激しく変わった近代の京都である。東京京都に抗して京都の自負を発揮した一八九五年の平安遷都千百年記念祭、それが京都に残した桓武天皇顕彰の平安神宮は、近代につくられた平安イメーজの典型例である。

本書は、本研究科と人文科学研究科、そして学外諸機関の多彩な分野の研究者からなる一九九八年発足の近代京都研究会の会員が、二〇〇二年から〇四年にかけて、一〇九回にわたり京都新聞に連載した同名のコラム記事を編集してなったものである。表現は平易だが、それぞれの分野からイメーজと現実のギャップのある近代京都について、研究の第一線を紹介している。言及の幅は、まちのインフラ、まちのイメージと環境、まちの建築、美術と工芸、なりわいと政治、まつりと世相、京都帝国大学、そして、みやこの海外、という具合に広い。基調は、みやこの長い伝統と、近現代の一地方都市という社会・経済的現実との相克を調整しながら、近代にも京都を地方的次元から跳躍させてきたものの把握にある。続いて本夏、姉妹編の論文集『近代京都研究』が書肆に並ぶはずである。

〔新書判 二二四頁〕

定価 七七七円

〔B5判 三三二頁、三七六頁、二八〇頁〕

定価 一六、八〇〇円（第一巻、第二巻）、

一一、六〇〇円（第三巻）

〔新書判 二二〇八頁〕

定価 七一四円

〔A5判 二四五頁〕

定価 二二三〇円

メタボにならない脳のつくり方

森谷敏夫著

扶桑社 二〇〇八年

厚生労働省は、まさに国民病ともなった糖尿病の予防やその温床となる肥満の予防・改善などを柱にしたメタボ対策の推進を本年四月から開始した。

著者は、「一に運動、二に食事、しっかり禁煙、最後にクスリ」のスローガンをあげて頑張っている厚生労働省生活習慣病対策室に対し最大限のエールを送っている。「運動」を第一に掲げているのも最先端の運動・医学のエビデンスから出たものであると著者は確信している。

職場においても積極的な健康管理と予防医学の実践が急務であることは、疑う余地もない事実である。職場での肥満や生活習慣病の撲滅は企業の医療費の削減や生産性の向上に貢献していくことになる」と著者は信じている。ほんの三〇分程度の歩行を生活の中に取り入れるか、日常の身体活動をできる限り増やす意識改革をするか否かで大きくメタボや生活習慣病の発生率が変わってくる。生涯現役死ぬまで元気に生きる」ためには、それなりの努力が当然必要になってくるであろう。

この本のメッセージは「一生の習慣的な運動の継続や「頭で食べる」食習慣が血糖のコントロールや肥満・メタボの予防だけでなく、心臓、脳血管系疾患、認知症、ガンの予防に不可欠であり、知的機能を維持した豊かな老後への免罪符になる」ことである。

〔新書判 一五二頁〕
定価 七四円

知を愛する者と疑う心

佐藤義之・安部浩・戸田剛文編

晃洋書房 二〇〇八年

古代ギリシャの時代より、哲学の大きな目的のひとつに「真理」をめぐる問題があった。つまり、真理とは何か、それをわれわれは知識として獲得することができるのかという問題である。

しかし、それはまた、「懐疑」の歴史でもあった。多くの哲学者が、真理を求める一方で、その試みが不可能であることを示すように思える議論が数多く提示されてきたのである。結果的に、哲学者たちは懐疑論とどのように向かい合うかということに悩まされてきたのである。本書は、古代に始まる懐疑論と哲学者の対決の概観からはじまり、現代にいたるまでの幾人かの哲学者を取り上げ、彼らの哲学における懐疑の位置づけ、あるいは取組みを論じた論文集である。

具体的には、総論に近い二編に加え、デカルト、バークリ、ヒューム、ヘーゲル、フッサール、レヴィナスといった哲学者の議論が特に論じられており、「真理」と「懐疑」のさまざまな関係を、時代と国を横断して概観することができる。

本書は、ただの解説書ではなく、それぞれの著者が自らの解釈を前面に出した専門書でもあり、骨太の内容となっている。

〔A5判 二五四頁〕
定価 二、七三〇円

はじまりとしての
フィールドワーク―

自分がひらく、世界がかわる

李仁子・金谷美和・佐藤知久編

昭和堂 二〇〇八年

本書は、人間・環境学研究科で文化人類学を学んだ修了生がフィールドワークの経験について綴ったエッセー集である。人環・第一期生の三人が編者となり、博士課程を修了した卒業生のエッセー一二編にぐわえ、新聞記者や家裁調査官、博物館学芸員など社会の多彩な分野で活躍している修了生たちのコラム八編が所収されている。

文化人類学のフィールドワークは、現地で一次情報を簡単に収集できて、すぐにそれが学術的な成果へと結びつくような調査手法ではない。自分の生きてきた世界とはまるで異なる「他者」の生活の場に入りこみ、そこで信頼関係を築きながら、なんらかの学問的な問いに向き合えるようになるまでに、膨大な時間が流れる。その過程で、それぞれの「調査者」は、「調査」という枠をこえ、ひとりの「人間」として心の底から揺さぶられるような経験を重ねる。

本書には、そうしたフィールドワークをとおして悩み、反問を繰り返した経験や、それが「はじまり」となってその後、の人生に大きな影響を与えてきたことが、やわらかい筆致で描かれている。学術的な論文では語られることのないフィールドワーカーたちの思い。その「余白」のひとつひとつに、文化人類学という学問の魅力が浮かび上がっている。

〔A5判 一、六二五頁〕



瓦版

◆”人環”とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の”人環”は、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究所」の略称です。

◆受賞

齋木潤（共生人間学専攻教授）

MVE賞（電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎専門委員会）二〇〇八年一月

ヒューマンインタフェース学会研究会賞（ヒューマンインタフェース学会）二〇〇八年三月

ヒューマンコミュニケーション賞（電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ）二〇〇八年三月

勝又直也（共生文明学専攻准教授）

「中世ヘブライ文学を中心とした地中海・中東の比較文学・比較文化研究」

第一回湯川・朝永奨励賞（京都大学）二〇〇八年五月

◆催し物の報告

◇環 on OPEN 記念講演会／京都市市民管弦楽団メンバーによる弦楽カルテット

●テーマ 人間・環境学研究科の『源氏物語の時代』

●日時 二〇〇八年五月九日（金）午後四時三十分より

●場所 人間・環境学研究科棟地下大講義室

●講師 山本淳子（京都学園大学人間文化学部教授）

◆お知らせ

◇京都大学大学院人間・環境学研究所と京都市および長浜市との連携交流協定の調印

二〇〇八年四月十八日、京都大学大学院人間・環境学研究所において「風雅の町づくり環境づくり」を目的とした「風雅の社会科学」の教育・研究を推進し、「風雅の町づくり環境づくり」を実地で検証・研究することにより、その成果が京都市と長浜市の町づくりに反映し、地域の様々な課題の解決に役立てるよう、京都市および長浜市との連携交流協定を締結しました。この件は、各種新聞やNHKテレビで詳しく報道されました。

人環フォーラム

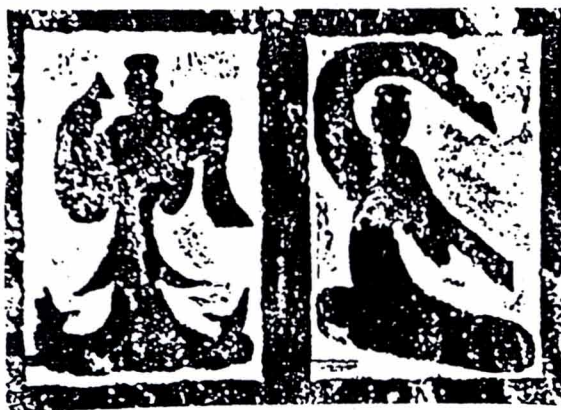
第24号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.24

巻頭言 河野敬雄

対談 地球温暖化と都市
宇沢弘文／間宮陽介 司会 高橋義人

特集 現代に生きる少数民族
菅原和孝／ブライアン・ハヤシ／山田孝子／三谷恵子／西山教行／兼重努

表紙写真 ヘルシンキのシベリウス公園（撮影 高橋義人 二〇〇七年）
裏表紙写真 ヘルシンキのセウラリ野外博物館 北欧の家々は日本と同じ
ようにもともと木造だった（撮影 高橋義人 二〇〇七年）
カット 漢時代の石刻画（張鴻修編著『陝西漢畫』三秦出版社、一九九四より）
裏表紙背景 宮崎興二名譽教授提供



編集委員会

委員長
副委員長
委員

松山 林高 多大 阪勝 岡石 小間
村田 橋質 黒上 又 川倉 宮
圭 達義 弘雅 直真 尚紀 陽
一郎 誠也 人茂 慈昭 也理 人藏 介

人環フォーラム 第23号

平成二〇年九月三〇日発行

編集 『人環フォーラム』編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒六〇六・八五〇 京都市左区吉田二本松町

FAX 〇七五・七五三・六六九四

印刷製本 ショウドウ・イープレス株式会社

編集後記

このところ、食品にまつわる問題が後を絶たない。いわゆる事故米の不正流通事件などはその最たるものだが、産地偽装になると、これはもう日常茶飯事と化している。ウナギの蒲焼きやタケノコの水煮は氷山の一角である。

では、正直に産地表示しているモロッコ産のタコやカナダ産のマツタケはどうだろう。確かに味や香りが違うということはあろう。しかしそれはたぶん主観的なものであって、目隠しをすれば誰も産地を当てることはできないだろう。以前、テレビで、飲料水の目隠し品評会をやっていた、あるタレントが最上位に上げたのは、なんと原宿のトイレの水であった。

外国から帰ってみそ汁を飲み、すしを食らって、「ああ、日本人に生まれてよかった」と、日本人であることを再確認するわたしたち。三島由紀夫はこれを「お茶漬ナシヨナリズム」と呼んだ。産地偽装が食の安全性の問題を超えて、お茶漬ナシヨナリズムに拡大しないことを願うばかりである。（Y・M）



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM